

584
13x



0020044-000

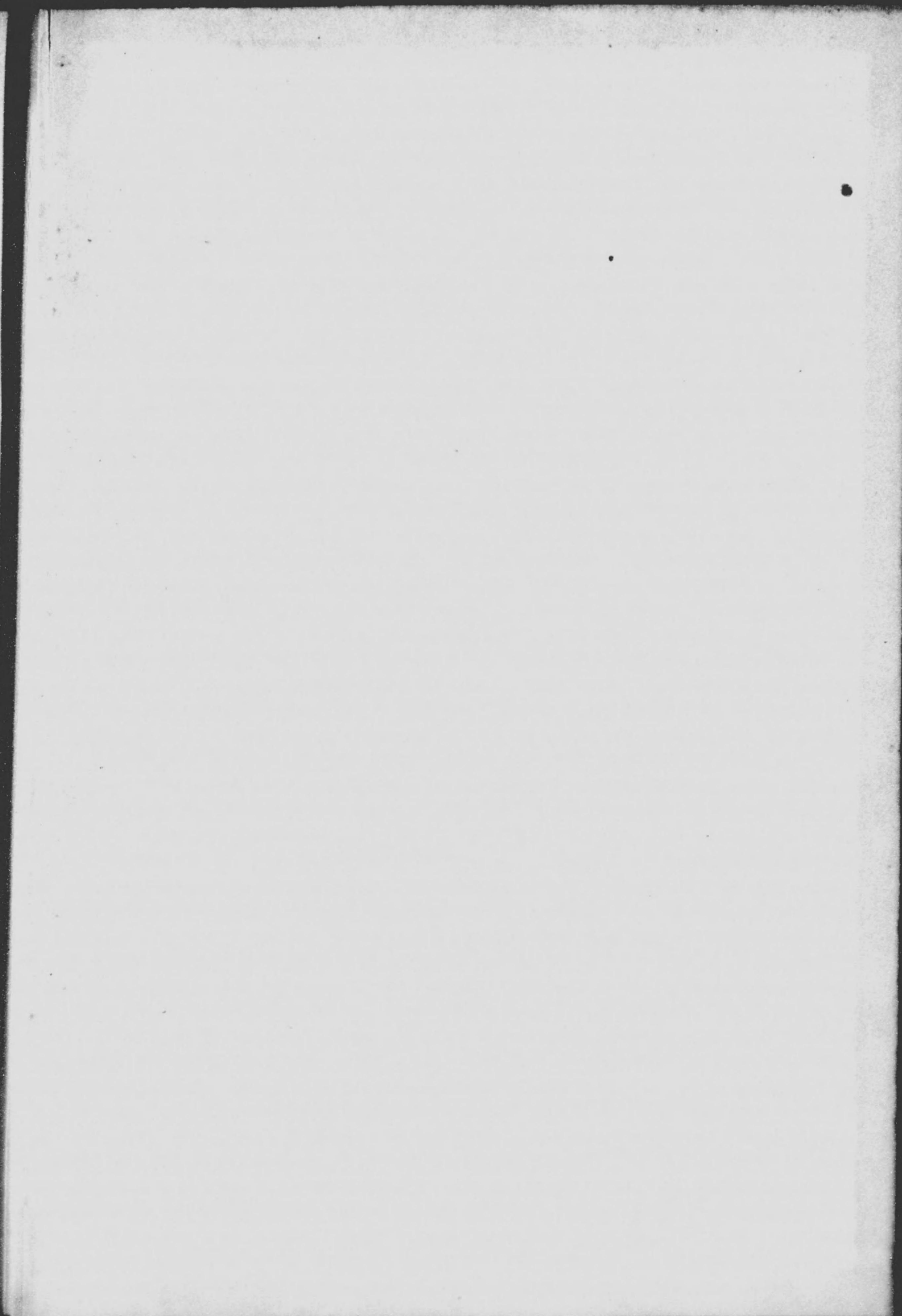
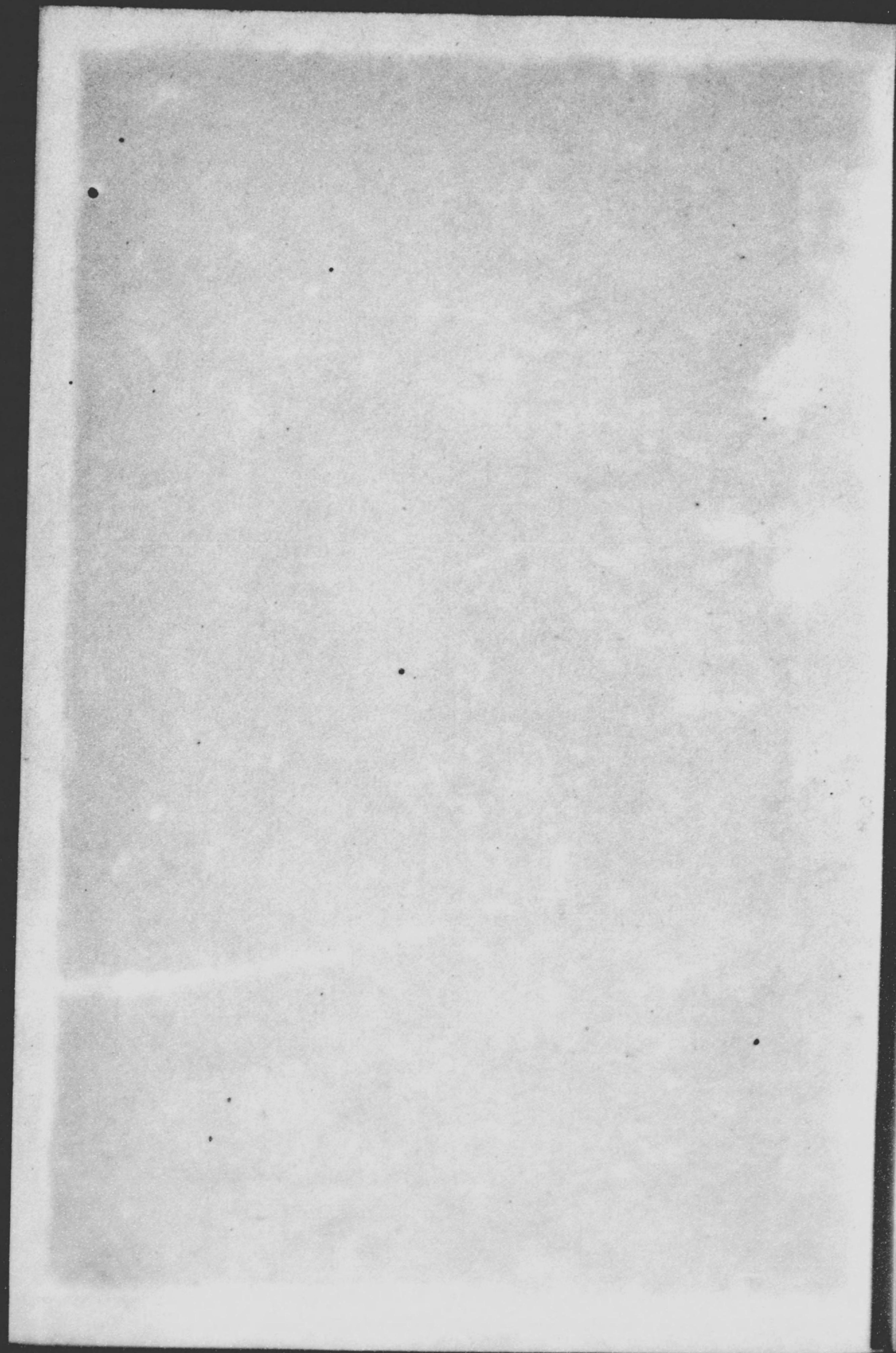
584-13
(584-13x)
現代経済学全集

日本評論社

第2巻

[昭和6]

ADB





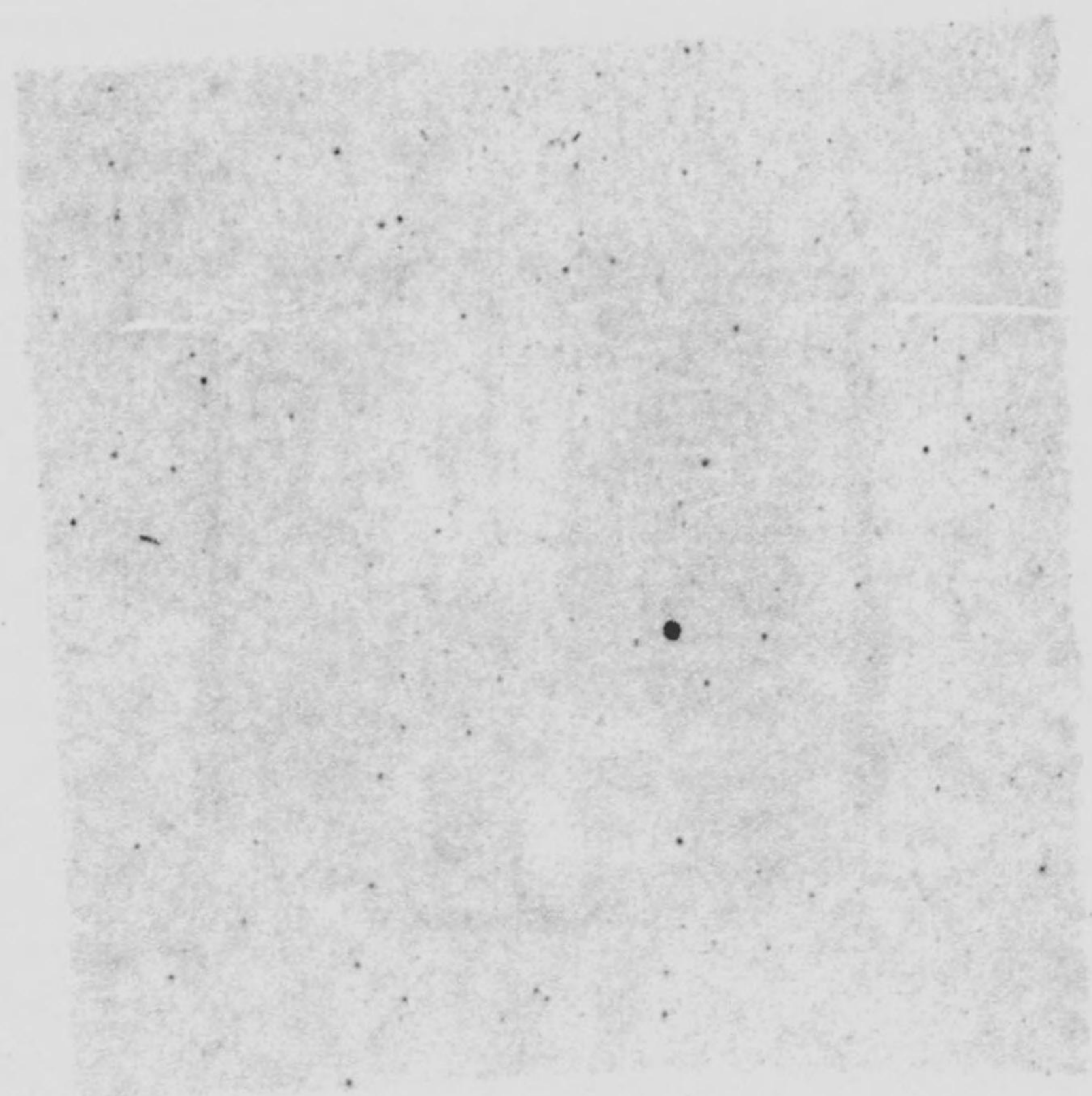
現代經濟學全集 第二卷

小泉
經

信田美雄
著
經濟學
論

日本評論社版

WADA WALKER



584
13p

序

本書を經濟原論と稱することは固より過當である。言ふべくんばたゞ經濟原論の爲めの材料たるに過ぎない。本書執筆の約束以來、常に之を念頭に置いて準備は續けて來たが、遂に意の如く纏め上げることが出来なかつた。刊行定期の制限ありとは言へ、著者微力の致す所で汗顔に堪へぬ。たゞ現在の如き形に於て猶ほ經濟理論研究者に多少の參考資料を供し得れば大幸だと言ふの外はない。本書中經濟的循環を叙述せんとした諸章、勞働價值學說の批評を試みた諸章は比較的多くの興味を以て執筆した部分であつて、若し讀者諸氏にも同様の興味を喚起することが出来れば仕合せであるが、前者の如きは殊に問題が重要難解であるから、本書の叙述から出發して更に他日の大成を期せねばならぬ。著者自身に對する今後の課題の一である。

本書の校正に就いては友人橋本勝彦氏を煩はすことが多かつた。茲に深謝の意を表する。

昭和六年十月

品川御殿山

小泉信三

經濟原論 目次

第一篇 經濟生活……………一

第一章 經濟生活の歴史性と非歴史性……………一

第二章 經濟財……………三

第三章 欲望の法則……………三

第四章 生産……………三

第五章 經濟本則の適用……………七

第六章 價值及び富……………八

第七章 經濟生活と時……………六

第八章 經濟的循環(一)……………六

第九章 經濟的循環(二)……………九

目次

第二篇 交換經濟生活

第一章 交換經濟と統制經濟

第二章 需要及び供給

第三章 交換經濟的生產

第四章 交換經濟的循環(一)

第五章 交換經濟的循環(二)

第六章 資本の交換經濟的職分

第七章 交換經濟的發展

第三篇 價值及び價格

第一章 價值論上に於ける効用說と費用說——殊に勞動價值說批判

第一節 序 說

第二節 リカアドオ以前

三三

三三

三九

三二

一八六

一九七

二〇〇

二三五

二四一

二四二

二四一

二四七

第三節 リカアドオ

第四節 リカアドオ價值論に對する疑問(一)——地代と價值

第五節 リカアドオ價值論に對する疑問(二)——異質勞動の比較

第六節 リカアドオ價值論に對する疑問(三)——價值と利潤

第七節 リカアドオ價值論に對する疑問(四)——利潤率の平均なき場合の價值

第八節 効用說と費用說

第九節 勞動價值說の至當なる根據(一)

第十節 勞動價值說の至當なる根據(二)

第十一節 マルクスの價值價格理論大要

第十二節 マルクス價值法則の根據

第十三節 價值法則、生産價格說の不兩立

第十四節 價值概念と「社會的必要勞動時間」——マルクス說の根本的難點

二五二

二五六

二六一

二七〇

二八〇

二八七

三〇三

三二四

三三四

三五〇

三六四

第十五節 生産價格理論の構造に對する若干の批評……………三七

第十六節 ………………

第十七節 ………………

第十八節 ………………

第十九節 ………………

第二十節 ………………

第二十一節 ………………

第二十二節 ………………

第二十三節 ………………

第二十四節 ………………

第二十五節 ………………

目次終

經濟生活

經濟生活の歴史性と非歴史性



吾々の素養の對象は人間の經濟生活である。然らば經濟生活とは何であるか。

讀者の素養に依頼して私は姑らく此解答を後段迄延期する。姑らく經濟生活の如何なるものであるかは適當に了解されてゐるものと假定する。兎に角吾々は經濟生活なるものを營んでゐる。而かも今日交易經濟、又は交換經濟と稱せらるる組織の下に於てそれを營んでゐる。今日の吾々は交換を行ふことなしには殆ど生活することが出来ぬ状態にある。吾々は吾々所要の必需品其他の物を殆ど凡て他人から購買して其用に充てる。自分で必要とするものを自分で造るといふことは全くないか、有つても其の一小部分に過ぎぬ。大概の場合には自家の所要物は他人が造り、自己の所産物は他人の用に供する爲めに造られるといつて好い有様である。吾々は他人の爲めに働き、他人は又吾々の爲めに働

く。而してその他人と吾々とは賣買交換に依て結び附けられてゐる。

假りに私が労働者であつたとする。私は企業家に儲はれて其工場なり鑛山なりで労働し、それにして賃銀を支拂はれるであらう。即ち私は私の労働給付と賃銀とを交換するのである。而して此の賃銀を以て私は入用の種々なる品物を買ふ。衣食住の如き必需品を買ふ、酒煙草の如き快適品を買ふ、場合によつては多少の贅澤品も買ふであらう。然らば吾々にこれを賣るものは誰か。今日は所謂商品生産の時代と稱せられてゐる。と言ふ事は、私に是等の品物を直接に賣る者は、自ら其物の生産者（後に説明する狭義の生産者）ではなくて、生産者其人から之を仕入れたる商人、又はその商人から更に之を仕入れたる商人であつて、私が購入する様々の品物は私の手に到達する前に既に商品として幾多の人々の手を経由して來たことを意味してゐる。従つて買手である私は、それが何處の誰れに依て造られたるかを知らぬ。造つた方でも勿論何處の誰れがそれを消費するかを承知しないであらう。

今其の生産者であるが、生産の實際の仕事を執行するのは労働者であるが、何を生産し、何程生産し、如何にして生産するかを決定する責任者は、今日では企業家である。企業家にも様々の形態があるが、併し今日の典型的なものに就いていへば、企業家は土地を借り若しくは買ひ、工場を建て、機械

や道具を設備し、原料を購入し、而して労働者を雇入れて、市場で賣れると豫期する品物を造り出して賣る。而して若し其生産物の價格が彼れの生産費を超過すれば、此差額は彼れの所得、即ち利潤を構成するのである。

生産費を超過云々といつたが、その生産費とは何かといへば、複雑な説明は省略し、結局企業家が労働者や地主や資本家に支拂つた労働給付や、土地や資本の使用に對する價格、即ち賃銀、地代、利子に外ならぬ。これ等のものは又夫々労働者其他の所得を構成する。而して企業家や地主や資本家も亦た其の夫々の所得を支出して、其の所望の品物を購入すること前に述べた労働者の場合と同様である。此等の人々の所望品（それが必しも消費財に限らぬことは後に述べる）も同じく企業家主宰の下に労働者地主資本家の協力に依て生産されることは右に述べた。さうすると畢竟今日は企業といふものが中心となつて、所謂生産手段たる労働、土地、資本の所有者は各々其所有物を企業に賣却し、その代金たる各種の所得を以て企業の提供する各種の生産物を購入する。併し何人が如何なる生産手段を提供し、又それに對して幾許の生産物を享受するかは、誰れも統一的に之を決定する者がある譯ではなくて、皆な各人の利得を追求する努力から起る交換行程に依て定められる。

これは極めて粗略な描寫に過ぎないが、今日の經濟生活は斯のやうにして營まれる。併し乍ら吾々は常に斯様にして生活して來た譯ではない。過去に於ける吾々の生活は是とは違つた形で行はれた。國又は地方に由て今でも異つた形で營まれてゐる處がある。

一二の事項に就いていふと、吾々の祖先は、例へば賃銀労働者階級といふものを知らなかつた。労働に従事するものは常にあつた。併しその労働給付を、今日の労働者の如く自由契約に基いて企業家に賣却するといふ階級は、近世の産物である。嘗ては奴隸があつた。奴隸も同じく労働する。併し奴隸は自己の労働をば賃銀に對して他人に給付するといふことはせぬ。奴隸はその全身を舉げて其の主人の所有物である。彼れの労働給付は買ふことも賣ることも爲し得られないのである。又ギルド手工業者なるものがあつた。手工業者も亦た労働する。併し乍ら手工業者は何人にも雇はれない。彼れが他人に提供するはその労働給付者ではなくて、彼れの労働の生産物である。生産の主宰者であるといふ點からいへば、ギルド手工業者も亦た企業家である。併し彼れは近世企業家の如く労働者の雇主ではない。職人なり徒弟なりを使用することはしても、主要なる労働には手工業者が自ら之に當るのが常であつた。又職人や徒弟を使用すると云つても彼等と彼等との關係は自由契約による雇傭關係とは

同じからざるものがあつたのである。

又此のギルド手工業の時代にも生産物は賣買された。併し此の賣買又は交換は今日のそれと餘程趣を殊にするものであつた。それは生産者と消費者とが極めて近接してゐたことである。生産者は其生産物を直接其消費者に賣却するか、或は消費者其人の註文を受けて始めて之を生産するといふ次第であつた。今日主として行はれる商品生産に對して、其は往々は顧客生産又は註文生産と呼ばれて居る。交換の方法が今日と違ふ許りではない。交換其者の全く行はれなかつた時代がある。昔の大家族又は莊園にあつては、家族員又は莊園所屬者の欲望は原則として皆なその家族又は莊園内で満たされた。衣食住の必需品から進んで贅澤品にも屬するものを自ら供給しようといふのであるから、斯る場合の家族は、今日の其の如く夫婦と其子女とのみを以て成る小家族であつては無論手が足らぬ。従つて斯る場合には、直系傍系幾代かの近親が一家をなし、或は更に之に奴隸、農奴等の不自由民の労働力をも加ふることに依て自給自足の生活を營んだのである。斯ういふ時代に市場とか貨幣といふものゝ有り得ないことは勿論である。私は茲に經濟發達の段階を叙述するのではない。私は今日吾々の營みつゝある交換經濟生活又は所謂資本主義的經濟生活が長い歴史的發達の成果であり、従つて今日吾

々が目撃するやうな經濟生活の様式又は諸現象(例へば商品、營利資本、賃銀労働、交換價值、價格其他々々)は必しも、何れの民族何れの時代に於ても見出され得るものではないといふことを言ふのである。たゞ併し乍ら其と同時に吾々は、他面に於て、何れの時代何れの民族、甚しきに至つては空想の所産たるロビンソン・クルウソオの生活に就いてすらも認め得べき共通の一面の有ることを明記しなければならぬ。その方法や様式は様々であるが、人類の生活のある處、其處では必ず衣食の計が營まれ、而して常に此目的を成就するに最小の犠牲を以てすることが努力されてゐる。此事は常に變らない。經濟的秩序は今日までに幾多の變遷を閲みして來た。今後も幾多の變遷を閲みするであらう。各個の秩序は、其に固有にして他に見るべからざる幾多の經濟現象を發生せしめる。併し乍ら又何れの秩序をも通じ渝らざる人間生活の一面があることを看過してはならぬ。私は特定の秩序に限つて見らるべき特異のものに興味を感じ、又何れの秩序の下に於ても見らるべき不變(又は普遍)のものに興味を感ずる。兩者の何れかに重を措くことは隨意である。併し經濟學者は何れかの一を取つて他を放棄しなければならぬといふ主張は其の正當を論證することが困難であらう。

之を經濟學史に徵するに、デギッド・リカードは其の時代の風潮に影響せられた爲めか、或は彼

自身が歴史的素養を缺きたる爲めか、經濟的秩序が今迄に變遷し、今も變遷しつゝあることに極めて無頓着であつたやうに見える。少くも其著作に現れたる所を以て見れば、彼れは彼れの當時の經濟的秩序を自然的なる不變的なるものとして立論し、此秩序の下に行はるゝ法則を永遠に妥當なるかの如くに説いた。彼れが例證に引く所の原始社會の漁夫獵者は、彼れがその身邊に見る十九世紀の倫敦金融業者の如くに行動すると評することは決して失當ではない。此の非歴史的偏頗が社會的秩序の可變性一時性を強調する歴史學派や社會主義者の攻撃を受けたのは固より當然の事であつた。有名なマルクスの「一個の黒人は一個の黒人である。一定の關係内に於て始めて彼れは奴隸となる。木綿紡績機械は綿絲を紡ぐ爲めの機械である。たゞ一定の關係内に於てのみ其は資本となる。此關係から切り離せば機械の資本たらざること、宛も金の其自體に於て貨幣たらず、或は砂糖の砂糖價格たらざるに等しい」(賃銀労働と資本)といふ文句は、よくリカード及び其亞流の短所を直指するものである。併し乍ら此攻撃は又往々にして反對の誇張を導いた。洵に此文句にある通り、生産労働に従事する者は直ちに奴隸たるものでなくて、一定の社會秩序の下に始めて奴隸となるのである。同様に機械の如き生産手段も、一定の社會秩序を俟つて始めて營利資本となる。此意味に解する時此批評の洵に正しい

ことは何人も認めなければなるまい。併し若し此よりも更に一步を進めて、經濟學上の概念は獨り歴史上特定の社會秩序を基礎としてのみ立てらるべきものであつて、何れの社會秩序にも通用なる概念は之を立てゝはならないものであるかの如くに説けば、それは矯正せんとした誤謬と反對の誇張に陥るであらう。上記の例に就いていへば、奴隷は確かに一定の社會にのみあるものであるが、人が生産の爲めに勞働することは如何なる社會にもある。營利資本は今の社會にのみあるものであるが、生産手段は如何なる社會にもある。經濟學者が特定の社會秩序に結び付いた奴隷を論じ、營利資本を論ずることは差支ないが、何れの社會の下にも考へらるべき勞働や生産手段は果して經濟學から驅逐されなければならぬ諸概念であらうか。言葉の上で此問を肯定することは困難であるまいが、之を實行することは殆ど不可能であらう。若し又實行可能であるならば、其場合には吾々は、斯の如き經濟學の外に、更に何れの社會秩序の下にも通用なる人間の經濟生活と、それが特定の秩序の下に營まるゝことに由つて生ずる特殊の現象とを併せ考察する別の一經濟學を要求する權利を有つであらう。

或は謂ふであらう。特定の社會秩序と結び付かぬ概念は自然科學の領域に屬するものであると。此批評も當らない。人間が衣食の計を爲し、其爲めに努力するといふことは何れの社會を通じても行はるゝ

事であるが、此事は必ず目的を立て其に對する手段の選擇評價の下に行はるゝことである。若し目的手段の考量、一定の目的に對する手段の適否に就いての比較選擇其者にして自然科學の對象たるべしとすれば、自然科學の對象とならぬものは何であるか。恐らく何もないと謂はざるを得ぬであらう。

要するに、吾々が忘れてならないのは、人間の經濟生活は今日迄様々の社會秩序の下に營まれて來た。將來も亦た恐らく今と異なる秩序の下に營まれるであらう。併し乍ら、各秩序を通じて不變又は普遍なる事實があると共に又一定の秩序にのみ特有なる諸現象があるといふことは是である。現在の發達せる交換經濟と中世のギルド手工業經濟とでは、無論經濟生活の營まれる形態様式は同じからず、夫々の時代に特有で、他の時代には見ることに出來ぬ現象も無論數多くあるに相違ない。鎖封的家族經濟と現在の交換經濟とを比較すれば、其間の差違は更に一層甚しきものであらう。否な現在と過去とを比較する迄もない。同じ現在に於て資本の私有を基礎とする所謂資本主義國の經濟的秩序と、生産手段の國有を本則とする勞農露西亞の社會主義的秩序との間には經濟現象の上に重要な相違があるべき筈である。例へば資本主義國に於て見る、利子や地代や利潤といふものは勞農國には既にないか、或はやがて無くなるべき筈であるし、又消費財の賣買は行はれても生産用具の賣買はあり得ない筈で

ある等の事がある。故に此等の社會に於て經濟生活の面目が一々異なることは固より言ふ迄もないことであるが、併し、是等の社會の何れに於ても經濟生活が營まれてゐることに變りはない。勞農諸國には最早資本主義的經濟生活は營まれてゐない（或程度の交換經濟は營まれてゐるが）とか、或は自給自給經濟は今日最早其跡を絶つたとかいふことは、無論至當の事であるが、資本主義國には經濟生活があるけれども勞農露西亞では最早それが營まれてないとか、或は反對に、勞農露西亞では經濟生活が營まれてゐるが、資本主義國にはそれがないとか、或はギルド手工業時代には經濟生活が營まれたが、今日はそれがなくなつたとか、反對に今日は經濟生活があるけれども、ギルド時代或は更に遡つて莊園經濟時代には經濟生活がないとか主張することは、何れも甚しい不合理の響を傳へるであらう。

茲にカッセルの言を引用しよう。「共通の欲望充足の爲めに行ふ人間の協働は一定の組織を必要とする。此組織の態様如何は幾多の經濟現象に極めて大なる影響を及ぼす。或種の經濟的事象は經濟生活の組織形態に依て全然制約せられるが、又他の諸事象は、外形上では時々々の經濟組織の其影響を受け、其核心に於ては全然これと無關係である。有ゆる經濟に取つて本質的なる斯る諸事象を、斯る本

質的なるものとして特徴付け、又更に諸經濟現象が經濟組織形態から割合に獨立せる事實のあることを特説するは、經濟學に取つて肝要の事である。是を忘る時は、動もすれば經濟的諸事實は單に偶然の經濟組織に依て制約せらるゝものであつて、其自體には何等の内的必然性を持たぬものであるとの見解が生ずる。斯る見解の爲めに經濟生活の最も重要な本質が失はれねばならぬことは自明の理であつて、又實際に充分經驗の立證する所である。……經濟學の中心課題は經濟的必然性を發見し、經濟を營む人間の外、此必然性への服従を發見することにある」。(N. Cassel, Theoretische Sozialökonomie, III. Aufl. S. 7-8)

私は上方既に經濟、經濟生活等の語を度々使用した。茲で立ち歸つて本章の始めに掲げた問に答へねばならぬ。人間の經濟生活とは何であるか。

第二章 經濟財

經濟生活とは何であるか。經濟生活は人間の欲望を充たさんが爲めに營まれる。故に吾々の考究は欲望から發足しなければならぬ。

改めて欲望の定義を下すことは無用であらう。欲望の何たるかは誰れにも分つてゐることであらう。屢々引用せらるゝ定義は、欲望とは缺乏の感覺と此の缺乏を除かんとする願望との結合せるものだといふ。直ちに此定義を採用すると否とを問はず、兎に角欲望の根柢には缺乏の感があることは誰れも同意する所である。食欲の根柢には饑餓の感がある。衣服に對し住居に對し、其他何物に對する欲望にも、其根柢には缺乏の感がある。然るに満たされざる欲望は不快である。そこで當然此不快を除いて満足の快感に到達せんとする願望が起る。

欲望には之を満たすに外物を籍ることを要するものと然らざるものがある。外物の助を須るゝ欲望の充足は、吾々に取つての問題ではない。例へば散歩を欲して散歩をするとか、歌を唄ひたくて唄

ふとか、健康を進め得んが爲めに起居眠食を規則正しくするとか、學問上の難問題を解決せんが爲めに推理考究するとか、或は宗教上の安心立命を得んが爲めに靜坐工夫をするとかいふことは、何れも吾々の欲望を満たす所以であり、否な、或は欲望中の極めての重要なものを満たす所以であるのであるが、併し吾々はこれが爲めに何等の外物の助を籍る必要がない。然るに吾々の欲望の多くのものは、外物を籍つて始めて之を満たし得るのである。食物や酒に依つて饑渴を満たし、衣服に依て寒暑を防ぎ、家屋に依て雨露を凌ぐことはいふ迄もなく、更に一見物質と極めて縁遠く思はれる種類の欲望——藝術的、學問的、宗教的欲望其他でも、其を充足する爲めには屢々外物の助を俟たなければならぬ。聲を揚げて歌ふ丈けならば、直ぐに何人にも出来ることであるが、併し謳歌に伴奏を要するとすれば、既に此の藝術的欲望を満たす爲めにも、樂器といふ外物を籍らねばならぬ。彫刻家や畫家が創作をする爲めには、大理石や青銅や畫布や顏料を必要とする。宗教上の欲望亦た然りであつて、神佛に祈念して其冥助を仰ぐ丈けならば事甚だ簡單であるが、既に寺院を建立し、祭壇を設けるといふことになれば、直ぐそれ丈けの外物を籍り來らねばならぬ。そこで欲望は之を充たさんとする努力を起し、此努力は當然欲望充足の手段に向ふ。此の欲望充足の手段を稱して財といふ。財とは歐洲語にい

ふ通り「善き物」(Goods, Güter, biens) 即ち人間欲望の充足に役立つものである。言ふ迄もなく茲に「善き」といふのはたゞ欲望充足に役立つといふ丈けの意味であつて、毫もその倫理的可否を意味するものではない。經濟學はたゞ欲望を問ふ。欲望に對する道德的の批判は下さない。經濟學上の「善き物」は往々道德上衛生上の見地よりすれば望まじからぬものであるかも知れぬが、其は少しも差支ないのである。故にアルコホルも、阿片もコカインも、或は卑猥なる小説本も皆な是れ共に財たるの一點に於て、即ち人の欲望を充足する點に於ては麵包や肉類や家具衣服や或は學校教科書と擇ぶ所はないのである。尤も外物其者に人間の欲望を充たすべき客觀的性質が具はつてゐても、人間の方でそれを知らない場合には未だ財とはならぬ。欲望充足に役立つべきものが其用に供給し得べき状態に置かれた場合に始めて財となるのである。例へば石炭の利用法を知らぬ種族に取つては石炭は財ではない。

併し乍ら右記の如き財が直ちに、凡て人間努力の對象となるものではない。吾々が努力するのは、欲望と其充足手段との間に或障害がある場合でなくてはならぬ。空氣は吾々の大切なる欲望を満たすものである。日光も亦た同様である。空氣や日光がなければ吾々は生存することが出来ぬ。併し普通

の事情の下にあつては、吾々は空氣を呼吸し得んが爲めに先づ努力して之を獲得し、日光に浴し得んが爲めに先づその獲得に努力するといふことはせぬ。それは全然その必要がないからである。然らば欲望と財との間に障壁があるとは如何なる場合を指して謂ふのであるか。それは欲望充足の用に充て得べきものの缺乏或は不足せる場合である。吾々が身の周圍に見る食物、衣服、家具其他々々、否、吾々の知る限り空氣と日光とを除けば、其他の財は殆ど皆なそれに屬する。勿論缺乏といふのは、其時の状況の下に於て満たさるべき欲望に對しての缺乏であつて、單にその客觀的數量の如何に由て決せらるゝものではないこと勿論である。「限られた一數量とは一主體の欲望と其充足に充て得べき手段との關係である。…限られた量とは全然主觀的に定められたる關係であつて、其量の客觀的大小には全然關係なきものである」(H. Dietzel, Theoretische Sozialökonomik, 1895, S. 192)。單に數量的にいへば、例へば全地球の表面は極めて廣大といひ得ること勿論である。併し現在の状況の下、現在の技術を以てして利用し得べき状況に置かれたる土地は割合に乏しい。此意味に於て土地は缺乏してゐる。地中に埋藏せらるゝ石炭量は絶大であるかも知れぬ。併し地中の石炭は直ちに利用する譯には行かぬ。然るに採掘せられて燃料となし得べき状態に置かれたる石炭は割合に乏しい。此意味に

於て石炭も亦た不足である。飲料水は大都市には於ては不足してゐるから、吾々を是が爲めに水道料金を支拂ふ。併し都會を距る幾十里の湖畔に往けば如何に飲んでも飲み盡せない丈けの水がある。此場合にもたゞ水があるといふ丈けならば、殆ど無限の水がある譯だが、人の欲望を満たし得べき状況に置かれた水と之に對する欲望とを比較すれば、水は確かに不足してゐるのである。原始林の木材、野生の果實其他に就いてもこれと同様の事を言ふことが出来る。

そこで此の缺乏といふことであるが、物の缺乏は絶對的で動かせないものと、人間の努力に依て左右し得る相對的のものとのある。例へば古の名家の藝術作品といふ如きものは、今日ではそれが如何に珍重せられても、之を新たに作り出すといふことは出来ない。雪舟の作品、ダ・キンチの作品の数は、雪舟、ダ・キンチ亡き後に於ては絶對的に限定されてゐる。或は又コヒユウア・ダイヤモンドといふ如き稀有の寶石も亦た再び之を發見することは至難であるから、是れ亦た殆ど絶對的缺乏せるものといつて好からう。併し大概の財は人間の努力に依て新に其數を増すことが出来る。たゞ人間が努力して之を獲得するか否かは努力其者に依て支拂ふ犠牲と、それに依て獲得せらるべき利益との比較秤量に由て定まるのであるが、兎に角此の種の財の不足は相對的のものであつて、此等のものに就いては欲望に

對して其數量が不足するといつても、或は其獲得が困難であるといつても畢竟同じ事に歸着する。

そこで斯ういつて宜しい。人間は其欲望を満たさんが爲めに、先づ之を満たすべき手段を獲得せんとするが、その欲望に對して存在量の際限なきものは特に之を獲得する必要がないから、人間努力の對象となるものは、欲望を充たすに役立つて、而して不足せるもの、別言すれば効用があつて而して其獲得の困難なるものは是である。これを自由財に對して經濟財といふ。私は茲に第一次的には有形の物質財を考へて居る。これは如何なる財の定義からも除外せらるゝことなき最狹義の財である。併し人間欲望の充足に役立つて、而かも其獲得に努力を要するものは有形物のみには限らない。人間の勤勞給付も亦た同じく欲望充足の役に立つ。醫師の醫療、按摩の施術、藝術家の他人の爲めにする演技、是等の勤務は如何なるところ如何なる社會秩序の下に於ても欲望充足に役立つものである。更に今日の社會に於ては此以外に猶ほ經濟財たり得るものがある。例へば、手形や債券や銀行券等に現さるゝ他人に對する債權、又店舗の暖簾等と稱せらるゝ對人關係の如きは何れも當事者の欲望充足手段を獲得するの用をなし、延いて自ら欲望充足手段たり得るものであるが、併し此等のもの（權利關係等）が經濟財となり得るのは、私有財産を根基とする一定の社會秩序を前提とするものであつて、手形や債

券其他のない處では無論問題にならず。自給自足の家族經濟内に於ては勿論、共產主義經濟に於ても是等のものが欲望充足手段たることは考へられないのであるが、物貨財や勤務が欲望を満たすことは何等特定の法制又は秩序を俟つことなしに行はれる。今日の社會では經濟財は商品として賣買される。又醫者や其他の勤務は料金の支拂に對して給付される。斯ういふことは特定の社會にのみ行はれることである。別の社會では別の方法で物財や勤務の配給が行はれるであらう。或は勤務の給付は命令に依て強制的に行はれるかも知れぬ。或は物財が他人の手に移ることなく、其生産者自身に依て消費されるかも知れぬ。故に商品となつたり、診察料を取つて診察したりすることは經濟財の一時の姿であると謂つて好い。併し人間は如何なる處でも、其欲望を満たすべき手段を得なければならず、而して此手段の大部分は不足の状態にある。従つて努力して之を獲得しなければならぬ。これは如何なる社會秩序の下にも行はれることである。否な如何なる社會秩序どころではない。全く社會秩序のない處、即ち社會を成さざる孤立人にあつても此事は行はれる。勿論孤立人の場合には他人の勤務給付を受けるといふことはあり得ないが、併しロビンソン・クルウソオも各種の欲望を満たすべき外物を自然から獲得することは、必ず之をしなければならぬのである。

此機會にロビンソン經濟の想定に就いて一言して置かう。學者或はロビンソン經濟の考察を難じて架空的非現實的であるといふ。それが斯の如き經濟は歴史上人間生活の常態として存在したことはなまいといふのであるならば、此非難は無論正しい。併し誰れも其様なことは考へてはゐまい。父母も妻子もない全くの孤立人が、孤立の生活を永續的に營み得るものでないことは、言ふ迄もないことである。たゞ併し斯る孤立人の經濟生活を、一層複雑なる社會經濟考察の發端として、その極度に單純化されたものとして、即ち考察の補助手段として想定するといふことは當に許さるべきことなるのみならず、理論推究の爲めに極めて有効の方法である。マルクスもいふ通り、經濟生活を營む上に於て人は必ず他人の人々と互に作用し合ふが、他面「人間」全體としては其の所要物を獲得する爲めに必ず自然に對して働きかける。此の後の一面の缺けてゐる經濟生活といふものはあり得ないのである。然るにロビンソン經濟では人對人の關係は抽象されて仕舞ふから、人間對自然の關係が最も純粹明白の形で現れる。従つて此一面を考察する爲めには孤立人の經濟を假想することが推理を進める上に極めて便利である。而して人間と對自然努力を自然現象と見るのが謬りであることは、既に前段に述べた通りである。

近年ロビンソン經濟の想定を有効に利用した學者にキアナンがある。彼れはいふ、「經濟學の大部分は社會に生活する人を取り扱ふものであるが、併し能ふ限り最も單純な場合を以て始めるのが最も適當である。故に予は時として生嚙り學者に依て『クルウソノ經濟』に向けられた嘲笑を無視して姑らく孤立人の物質的福祉、即ち富が依て定まる諸條件を考察するであらう」と。但しロビンソン・クルウソノは、その難破船から救助した道具其他の重要點の事は姑らく措くも、其の孤立の生涯を開始するに當つて既に社會生活の中に取得して蓄へたる智識を持つて居り、又屢々孤立の生活から社會生活へ復歸しようとして努力してゐるから、正銘正眞の孤立人とは見なされぬ。故に「孤立人の物質的福祉が眞に依て定まる諸條件を有効に究めんが爲めには、姑らくその如何にして其處に來れるか、又その壽命は凡そ幾許なるべきかを問ふことを休めて吾等のクルウソノが終始地上に棲息する唯一人の人類であつたと想像することに依て最も好く進行し得るのである」と。(Edwin Cannan, *Wealth*, 4th impression 1917, p. 19)

ドイツェルの如きもロビンソン經濟想定の至當にして有用なることを説いた。「古典學者は經濟の根本的事實解明の目的の爲めに好んで最も單純なる關係に立ち戻る。經濟内部の事象はロビンソナア

デに照して、又交易經濟的事象は獵者と漁夫の交換の際に於ける處置を吟味することに依て例證されるのである。『現實主義者』は此方法を難する。其故は茲に描かるゝ如き『自然狀態』は嘗て實在したることがないからであるといふ。そして此の非歴史的作り話を『自然法』時代精神の反映であるといふ。是をいふ時、彼等は一二の古典學者は明に彼等は單に一個の方法論的工夫を用ゐるものであつて、これは『自然狀態』及び『自然法』……とは何の關係もないものだと言明してゐる事實を看過するに外ならぬものである」。(a. a. O. S. 196)

本章では私は先づ特定の社會秩序を前提とせず、有ゆる社會に通有なる經濟事象の本質を明にし、次いで次章に於て、現今の交換經濟組織の下では此等の經濟事象が如何なる特定の形象を取て現れるかを述べたいと思ふ。然るに特定の社會秩序から切り離すと、大概の經濟事象は人間對自然の關係に於て起る。然るに此點に於て一々ロビンソン經濟を念頭に置いて思考することは讀者の推究を助けることが尠からぬのである。

第三章 欲望の法則

吾々は既に經濟財の何たるかを、又經濟財と自由財との差別を知つた。然るに經濟財に對して自由財を云ふ時、其例證として引かれるのは大概の場合、空氣、日光或場合には水である。空氣日光又は水は人間の存在の爲めに缺くべからざる大切なものである。而かも吾々は少しも之を獲得せん爲めに努力することがないといふ。茲で吾々は人間の欲望に就いての最も根本的な一法則に逢着する。欲望遞減或は欲望飽和の法則が即ち是である。

人間の欲望が之を満たせば漸くその強度を減じ、之を満たして愈々進めば其強度は愈々減じて遂に皆無に達し、更に進んでその満足を強制する時は、始め絶大の快感を以て迎へられたものが却て漸く嫌惡、不快、或は甚しき苦痛を感ぜしめるに至ることは、誰れも經驗に由て知る通りである。其例證として最も引用し易いのが飲食物に對する欲望である。渴者に對する一杯の水は何物にも代へ難きものであらう。併し飲用の杯を累ねるに従つて渴は醫されて、水は段々欲しくなくなり、仕舞には水を飲

まされることが苦痛となる。渴ける者を蘇生せしむるものも水である。慘忍な水責めの刑具も亦た水である。此道理は日常の經驗に依て何人にも承知してゐる所であるが、効用價值論の先驅者を記憶する爲め屢々ゴッセン法則と呼ばれてゐる。ゴッセン自身の文言は大要左の如くである。曰く、同一の享樂の大きさは、享樂を與へることを斷へ間なく進め行く時は益々減少して、遂に飽和の起るに至て *Die Größe der Lust, welche durch die Fortsetzung der Lust zu erreichen ist, sinkt allmählich ab, bis sie endlich in der Sättigung ihren Höhepunkt erreicht.* (H. H. Gossen, *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln*, 1854, Neue Ausgabe. Berlin 1889 S. 31)

然るに、財が吾々の欲望を充たす力は効用と呼ばれてゐる。効用は客觀的な物の物理的化學的性質ではなくて、その有無強弱は、満たさるべき欲望の強弱と相俟つて始めて定まる。物は同じ物でもそれに依て満たさるべき欲望が無ければ効用はないし、欲望が強ければ其効用は大きく、弱ければ効用が小さい。そこで右述の如く欲望の強度は之を満たすに従つて減退するとすれば、これに對應する財の効用も亦た同じく減退しなければならぬ。即ち欲望の遞減は効用の遞減を意味する。即ち同じ水が漸次に其量の加はるに従つて新たに追加せらるゝ水の各單位は漸次に其効用を失つて遂に零にも達し、甚しきに至つては効用の反對たる非効用（欲望を満たす力の反對たる、苦痛を與へる力）を持つ

に及ぶ。

ゴッセンは効用といふ文字を用ひないが、次の文言はこれと同じ意味に歸着する。「一享樂手段の原子の量の増加と共に新に追加せらるゝ各原子は益々減少を蒙り、遂に零に下降する迄に至らねば已まぬ。」

効用遞減法則は上記の如く飲食物に就て例證することは甚だ容易い。併し必しも何れの欲望に就ても同様に明瞭な譯ではない。否な却て此法則と相背馳するかの如く見える場合、一財の數量の増加するに連れて、追加單位の効用が却て上進するかの如く見える場合も絶無ではない。例へば數オンスといふ如き極めて僅少なる石炭量は、燃料としては全く用を爲さぬ。それが増加して兎に角暖爐に投じ得る程の量に達して始めて燃料としての効用を有する。此の場合の如きに於ては、効用は財數量の増加と共に減退するのではなく、先づ或程度迄上進して然る後下降するのである。飲食物に就いても例外なしとはいはれない。俗諺にいふ、食欲は食ふと共に來るといふ如き事實も必無ではあるまい。更に蒐集家が或物の蒐集の完成に近づくに従つて愈々益々追加單位を熱望する度合の高まるといふ場合の如き、又裝飾品贅澤に對する欲望の愈々充たして愈々飽くことを知らぬと言はれる事例の如き、皆な効

用遞減法則に對する例外をなし或は成すかの如く思はしむるものである。是種の類例を挙げれば猶ほいくらか數へ立てることが出来るであらう。併し此等の例外あるに拘らず、欲望の遞減は通則として儼然動かし難き事實であると謂つて好い。その事は人間の欲望の多種多様であり、文明の進むに従つて愈々さうなる事實其者が遺憾なく之を證明する。

欲望の遞減とは、例へばいくら食べても猶ほ引續き同じ程度の食欲を感ずるといふことなく、食欲は早晚減退して皆無に向はざるを得ぬことをいふのであるから、畢竟欲望の有限の謂ひである。他方に於て、欲望が益々多種多様に向ふといふことは、人間の欲望は無くなるといふことがなく、臍を得て蜀を望み、愈々満たせば愈々際限がないことを指していふのであるから、前に述べたことは、欲望の有限は欲望無限の事實其者に依て證明されるといふに歸着する。それは如何にも甚しい逆説のやうに響くかも知れないが、事實は正に此通りである。有限といふは欲望の強度、無限といふは欲望の種類に就いていふのである。若し欲望遞減の法則が作用しなかつたならば、吾々は單一の欲望の充足の爲めに一切の力を擧げて用ひなければならぬであらう。全く充たされざる状態を取つていふと、人間の欲望は種類に由て輕重強弱がある。恐らく食欲は其の第一に來り、衣食住に對するものが此に次ぎ、遙に

後に至つて快適や裝飾に對する欲望が現れるであらう。然るに今吾々の欲望にして飽くなきものであるとすれば、吾々は例へばたと食欲の満足にのみ没頭して日も時もこれ足らずといふ有様に陥らねばなるまい。如何に食欲満足の爲めに努力しても食欲が常に依然として始めの強烈さを以て迫り來るならば、吾々は他の欲望を顧みる邊がない筈である。然るに、幸にして食欲は或程度迄之を満たせば、其強度は減退して、他の欲望が満足を求める。それ故にこそ吾々は、殊に文明人は、多種多様の欲望の充足に努力を分ちつゝあるのである。否な空氣や水の如き、その有無が人間に取つて直ちに生死を意味する程に大切なるものに就いても、吾々は普通その一定量の得喪に對して殆ど無關心である。それは現在の状況の下に於て、空氣又は水に對する欲望が現に飽和の域に達してゐるか、或は飽和の域に達し得る程其供給の潤澤なることが明白だからである。さり乍ら欲望が若し飽和せぬものならば、如何に空氣や水が潤澤であらうとも、吾々は常住空氣や水の爲めに心配してゐなければならぬ筈である。

此事は土地の産出力を例に引くと了解し易いかも知れぬ。土地には收穫遞減法則なるものが作用するから、一定面積の土地に累ねて費用を注ぎ込んでも收穫は或程度以上には比例的に増加せぬ。現に

各國に於て耕作されてゐる土地に肥瘠様々の差等があるのは、全く此一法則の作用がある爲めである。若しも此法則の作用なく、土地に費用を投下すれば何處迄も其に比例して收穫を増し得るものならば、人は密集して最も肥沃の土地のみを耕すに相違ない。然るに現在第二、第三、第四級、更に其以下の土地が耕されてあるといふのは、或程度以上最良地を耕しても收穫はその費用に比例せず、寧ろ退いて第二第三級或は其以下の土地を耕すに如かぬからである。欲望の場合も亦た同様である。若し欲望が飽和若しくは遞減せぬものならば、人間は單一の欲望の充足に没頭するの外ないであらう。肥瘠様々の土地が耕作されつゝあるの事實其者が收穫遞減法則の立證となるが如く、現に多種多様の欲望が満たされつゝあるの事實其者が、欲望又は効用遞減法則を立證する。而して欲望が多種多様であるのは、一の欲望の充足が他の新なる欲望を發生せしめるからである。茲に欲望の充足が新なる欲望の發生を促すといふのは、欲望充足の爲めに新なる欲望の造り出さるゝこと、例へば經濟學の入門教科書を読み了へて更に高等なる書籍を讀まんと欲する場合の如きもあるが、更に多くの場合には、より緊切なる欲望が満たされて強く感ぜられなくなつた爲めに、其迄潜在して居つた欲望が意識の敷居に頭を擡げるに外ならないのである。

斯の如く欲望は無限である。個々の欲望は飽和せしめ得るが、欲望全體は遂に飽和することが想像せられない。併し想像せられないといふのは、欲望を満たすべき人間の力に限りがあることを承知してゐるからである。人間はその欲望を満たすべき手段即ち財をば、結局自然に仰ぐ（人對人の勤務に由て物の中介をからず、直接に欲望の満たさるゝ比較的重要ならぬ場合を除けば）。然るに自然は少數例外の場合を除けば、常に鄙吝であつて、人間の欲するものを無償で提供するといふことをせぬ。人間は其の要するものを其努力を以て自然から購ひ來らねばならぬ。然るに人間は無限に努力し得るものではない。従つて現在想像せらるゝ限りに於ては、欲望が全體として飽和の域に達することをあり得ないのである。これは人間の擔へる永遠の運命と稱しても好い。社會組織の如何に由て變ることなき不易の事實である。

第四章 生産

自然から努力に依て所要物を購ひ來たるといふのは、固より形容的語法に外ならぬ。正しくいへば、物に人力を加へて之を欲望充足に適した、若しくは、より良く適した状態に移すことに外ならぬ。これを生産といふ。生産といへば物を造ることである。併し人間が自然の一微物をも増減し得るものでないことは、態々いふ迄もないことである。人間が爲し得る限りは人工に依て自然の物質と力とを人間欲望の充足により適した状態に置き改めること、即ち效用を造り若しくは増すことに外ならぬ。土地を耕して穀物を作つたり、鑛山から石炭を採掘したり、採掘せられた石炭を需要者の居る場所に運送したり、更に適宜の分量に於て各戸にこれを配給したり、棉を紡いで絲にしたり、絲を織つて布にしたりすることは、皆なそれである。過去に於ては、麥粉を麵包にしたり、棉を絲にしたりする如く、原料に加工して或物に造る場合と、穀物を作り棉花を作る如く原料其者を獲得する場合とを區別し、前者に於ては單に既存の物の排置結合を變更するに過ぎないが、後者にあつては無から有が生れたかのやうに解し

た者もあつたけれども、此見解は無論正しくない。何れの場合に於ても一原子の増減も行はれてはゐない。穀物が出来た場合にも、何も新しい物質を發生してはゐない、たと耕作施肥其他の注意により地中空中の物質が結合して、人間の欲望を充たし得る形態を取つたといふに過ぎないことは、麥粉に鹽と麵包種其他と熱を加へて麵包を作る場合と理に於ては異なる所がない。

生産とは斯の如く効用を造り若しくは増すことである。然るに効用を作り（若しくは増す）方法は様々である。前述の穀物を作り絲を紡ぐ場合の如く、技術的に物の形狀に變更を加へる場合は勿論であるが、單に一物を其儘或場所から他の場所に移し、或人から他人へ移し、更に或は同じ物を其儘保存することに依ても効用は造られる。それは皆な生産である。但し通常の用法に於ては生産といふ語はこれよりも狭い意味に用ゐられて居る。即ち普通には、効用の創造又は増加をば、對象の形狀に技術的變更を加へることに依て行ふ場合に限つて之を生産といひ、運輸交通商業は之を其中に包含せしめぬことが多い。此の狭い意味に解せられた生産は、自然から直接原料を獲得する原生産（耕作、牧畜、漁獵、鑛業等）と既存の原料に加工する製造工業とに分たれる。生産の語を廣狹何れの意義に解するのが正しいかをば獨斷的に決定することは利益がない。慣習的に生産を原生産と製造工業の意味に解

することは敢て非難すべきことではないが、既に生産が物の創造を意味せずして効用の創造（又は増加）を意味するものと解する以上、經濟財の場所的並に對人的移轉並に其保存をも生産中に含ましめることは論理上當然の順序である。石炭の採掘は何人もその生産なることを疑はない。併し石炭を採掘して地上に賣し來ることは、地中に埋藏せられてゐた物を取り出して人間の利用に適する状態に置くだけの事である。既に此事が生産たることを失はぬとすれば、その採掘した石炭をば山中邊僻の地から人煙賑かなる土地に運搬し來ることが生産たり得ないといふ理由は解し難いと謂はねばなるまい。

但し後にも言ふが、生産が大部分營利即ち貨幣獲得の爲めに行はれる今日の交易經濟下に於ては、直ちに効用の創造を生産といはないで、營利のためにする効用の創造、即ち貨幣價値の創造（増加）、即ち營業としての生産のみを生産と稱するの常である。従つて家庭に於て食物を調理し、或は衣服を裁縫することは、確に効用を増加せしむる行爲たるに拘らず、之を生産とは認めないで消費過程上の一階段と見る程になつてゐる。併しこれは特定の一經濟組織が斯る現象を生せしめたのであつて、「人間」對自然の關係を眼中に置いて人間の欲望充足といふことを考察する時、食物の調理が家庭の料理

人に依て行はれると旅館の料理人に依て行はれるとを區別し、裁縫が一家の主婦に依て行はれると裁縫師に依て行はれるとを區別すべき理由はない。社會主義國には營利的生産は行はれない。併し社會主義國には生産が行はれないとは何人も言はぬであらう。

前述の通り、人間は缺乏の感覺に始まつて此缺乏を除かんとする願望を起し、欲望を充足すべき手段の獲得に努力し、獲得し得たる財を以て其欲望の充足に充てる。斯くして行爲の一連環を完了する。併し此連環の中にあつて努力は常に最終に来るべき欲望充足の爲めに行はれる。即ち欲望の充足其者は目的であつて努力は此目的の爲めに行はれ、此目的の爲めに有意義となる。従つて目的其者と此目的の爲めにする所の行爲とを分つべき充分の理由が存在する。吾々が經濟といひ、或は經濟を營むといふは、欲望充足即ち消費（廣義の消費を分つて消費と使用とにする。消費とは一回の欲望充足に依て財の効用を減却すること、使用は財其者を保存しつゝ欲望充足の用に充てることをいふ）此の目的を達する爲めにする所の行爲を指して謂ふのであつて、欲望充足其者は經濟外に屬するものと見るのが常である。衣服を裁縫することは經濟に屬する。併し衣服を日々着用すること其自身を經濟とはいはぬ。飲用水を供給する爲め水道を設備することは無論經濟に屬する。併し渴を醫さんが爲め水を飲

むこと其自身を經濟とはいはぬ。斯うして見ると、經濟は常に欲望充足といふ目的に對する手段たる位置にあるものである。

學者或は勞働と遊戯とを區別して、後者が行爲其自身を目的とする行爲なるに對して勞働は目的を行爲其自身以外に置く行爲であるといふ。純粹なる場合を取ていへば、何の爲めに遊戯するかと遊戯者に問ふても満足な答へは得られない筈である。球を投げたり、舟を漕いだりすること其自身が楽しいからだといふ以外の答は得られぬであらう。然るに同じ行爲をしても、其行爲が他に目的を持つてされる場合には趣が變つて来る。例へば職業野球團といふものがあつて、選手は給料を貰つて仕合をする。若し其活動が給料取得の爲めに手段として行はれるものとする、その同じ球を投げる行爲が勞働となる。讀書は多くの人の好む所である。併し乍ら、それが何かの目的、例へば或試験に合格せんが爲めに讀書する場合には、それが勞働の性質を帯びて来る。そこで遊戯と勞働の區別は此通りであるとする、經濟行爲は無論遊戯には屬さないで、勞働に屬する。少くも廣い意味に解せられた勞働に屬することが明である。

經濟は既に手段として營まれる。手段として營まれるといふことは、其自身は望ましからぬもの、

無くて済むに越した事はないものを意味する。極言すれば、已むを得ざる惡を意味する。へば土地を耕作すること、或は又自動車を運轉すること、是等の事が常に其自身不快であるとは決していへない。併しこれ等の事が勞働として行はれる場合には、目的は他にある（穀物の收穫とか、賃金の収入とか）のであるから、苟も其が手段である以上、當然無くて済むに越したことはないのである。當然茲に節約原則、或は最少費用の原則が生ずる。即ち吾々は常に一定の目的を成就するに最小の犠牲を以てせんと努力するのである。これを又經濟本則ともいひ、此本則に適へる行爲を經濟的、是に適はざる行爲を不經濟的と稱する。經濟生活に屬する行爲は原則として常に經濟的に營まれる。但し一の行爲はそれが經濟本則に違ふから經濟に屬するのではない。經濟生活は常に目的に對する手段として營まれるから、經濟本則に違ふのである。無論經濟本則の支配を受けるのは經濟行爲のみではない。或目的の爲めに行はれる合理的行動は、何に由らず凡て此本則に依て律せられる。散歩の爲めではなくて、或地點に到達することが目的で歩行する場合には、吾々は當然最短距離の道を選ぶ。受験の爲めに讀書する場合には當然能ふ限り讀むことを少なくして目的を達しようとする。たゞ經濟行爲に於ては、此原則の作用が最も顯著明確且つ微妙に現れる。吾々が名譽の爲め、教養の爲め、或は健康の爲めにせんとす

る場合、此等の達せらるべき目的と其爲めの犠牲とを比較して精確に其輕重をいふのは容易の業でないが、經濟行爲は多く物財の比較を事とするから、殊に交換に貨幣の使用せらるゝ處に於て其比較は寸毫も遺憾なく行はれる。これが此合理主義原則が經濟本則と稱せらるる所以であらう。

經濟行爲は手段たる行爲であるから經濟本則の支配を受けるといふこと、經濟財は不足又は缺乏の財であるといふこととは如何なる關係にあるものであるか。經濟行爲が手段として行はれるといふこと、我々の欲望を満たすべき外物が欲望に對して不足してゐるといふことは、互に不可分の關係に立つてゐるのである。吾々が或る行爲をば、他の或目的の爲めの已むことを得ざる手段として意識するのは、吾々が吾々の目的成就に對して或障害に逢着した場合に限る。此障害といふのは、欲望充足に就いては財の有限といふ事である。其存在量の無際限のものにあつては其に依て欲望を充たすこと其自身と、此目的を達する爲め豫め之を獲得することゝが分別せられず、同一のものとして意識に映する。例へば吾々が空氣を呼吸し、又は河川の水を飲むといふ如き場合を見るに、吾々はたゞ空氣を呼吸し、水を飲むことに對して何等の障害がないから、何もその爲めの準備をしない。する必要がない。即ち所謂自由財の享受に就いては、目的の爲めに已むを得ずするといふ行爲を要せぬのであ

る。欲望充足の行爲其者が欲望充足手段の獲得と一致する。然るに都市の中央、飲料水の缺乏せる處に於ては水を飲まんが爲めには、先づ水道なり井戸なりを設けて水の供給を得る方法を講せねばならぬ。水道を設け、井戸を掘るといふことは、無論其自身が目的ではあり得ない。即ち水の供給が不足して、之を得んが爲めに云々の方法を講せねばならぬといふ時に始めて人は目的に對する手段を意識する。手段とは、それをせずには濟めば是に越したことはないものに外ならぬ。

第五章 經濟本則の適用

斯の如く人間は、苟もその合理的に行動する限り、常に最少の犠牲を以て其目的を達しようとする。此經濟本則は經濟生活の上では三の方面に現れる。

- (一) 一定の手段に依て満たさるべき幾多の欲望ある時は、重要ならぬものを棄て、より重要な欲望の充足に之を充てること。
- (二) 一定の欲望を満足せしむるに最も犠牲少なき手段を選択すること。
- (三) 經濟財獲得の努力其者に依て受くる不快がそれに依て得らるべき欲望満足に及ばざる限りは努力を續けること。

先づ(一)に就いていへば、一財にして數多の用途がある場合、之を重要ならぬ用途に充て、より重要な用途を放棄することは、無論不合理不經濟である。吾々は必ず重要ならぬものを排して、より重要なものを選ぶ。然るに茲で重要な働きをなすのは前に述べた欲望飽和の法則である。或重要な欲

望も、之を充たせばその強さが減退する。従つて始め種類の上では第二位第三位に居た欲望を、其次に満たすことが經濟的となる。即ち欲望飽和の法則ある處に於て常に、より重要な欲望を満たすに努めるといふことは、實際的にいへば數用途ある一財をば特定の用途に偏用せずして様々の用途に遍ねく用ゐるといふことに歸着する。例へば農夫が其の收穫したる穀物を全部食用に供してしまつて、次年度の種穀に事缺くのも不經濟ならば、反對に次年度の種穀の事のみを考へて、目前營養不足に陥るのも同じく不經濟である。同様にまた限りある一定量の食物を今日飽食満腹して明日饑餓に苦しみ、或は反對に、今日食ふや食はずに日を暮らして後日過剩食物を腐敗せしめる如きも、これ亦た經濟の本則に違背する所業である。即ち此點に就いて經濟本則に従ふといふことは、諸多の用途に充用せられた一財の最終の効用をして均等ならしめるといふ事に歸着する。例へば數用途ある一財を或特定の一二用途に偏用するといふことは、若し他の用途に充てたならば、より多大の効用を生すべきものを、遂に効果少なく（或は無効に）使用することを意味するのである。

食物、衣服、酒、煙草といふ如き、既に享樂財として完成せるものは、縱令其用途が單一でないとしても、大概は極めて限られてゐる。享樂財でなくて生産に供用せらるる財、例へば原料、道具機械或は

土地となれば、其用途は一層廣く、更に人間の勞働に至つては必要に由て殆ど何れの用途にも之を向けることが出来る。即ち勞働、又は一般的に生産手段は論理上、先づ最も重要な欲望を満足せしむべき財の生産に之を充用し、逐次他の財の生産に及ぶ筈である。従つて人間が經濟的に行動する限り、一定單位の生産手段は特定財の生産に偏用せらるることなく、適宜幾多の財の生産に遍ねく用ゐられて、其の最終點に於て生産せられた財がどれも欲望満足に同一の程度に役立つやうになる結果を生ずる。これは經濟當事者が生産手段の充用に經濟本則を守り、常に、より多くの効果を收めんことを努める當然の結果である。而して此等は貨幣經濟に於ける各人の貨幣所得の支出上に於て最も精確微妙に現れる。吾々は貨幣を使用するに常にその最も効果大なる用途に於てする。といふことは一定額の貨幣で購入し得べき最も重要なものを購入する。併し或物を購入すれば、その効用は減退する。減退すればその次に重要なものを買ふ。それも重要な度が減退する、更に其次のものを買ふ。或は元に立ち返つて、既に購入したものを更に増買する。斯くして一定額貨幣に依て購はるる財の効用に大小があれば、人は必ず購買の對象を効用の小なるものから、より大なるものに移し、而かも購入を増すに従つて物の効用は減少するといふのであるから、購買終局の點に於ける各財の効用は必ず能ふ限り均一と

ならなければならぬ。これを限界効用均等の法則、又は欲望満足均齊の原理（カッセル）、又或はゴッセン第二法則といふ。ゴッセンの文句は左の如し。

「幾多の享樂を選擇するの自由を有するも、時間がその凡てを完全に受用するに足らざる人間は、各個の享樂の絶對的大さは如何に様々なるにもせよ、彼れの享樂額を最大ならしめんが爲めには、享樂の受用を凡て一部分に止め、詳しくいへば、受用を止めたる瞬間に於ける各享樂の大さが、凡てのものに就いて依然として同一であるやうにせねばならぬ。」

前にも觸れたやうに、限界効用の均等とは常に現在に於ける諸多の効用の均一のみでなくて、時を殊にする効用、即ち現在の効用と將來享くべきもの、効用との比較にも適用される。食料燃料の貯藏、耐久的家屋の建築、土地改良其他より有効なる生産設備をなすこと等は、何れも此原則によつて行はれるものである。

上述の理に由て觀れば、一財を一用途に充て、一物を買ひ、若しくは一物を造るといふことは、皆な一財を以て満たし得べき諸多の欲望、一定額の貨幣を以て購ひ、又一定量の生産手段を以て生産し得べき幾多の對象に選擇を加へた其上で一を取つて他を棄てたことを意味するものである。同時に一物

を失つた場合に、吾々は此喪失に依て蒙る損害を最も小さからしめんと努めるのは當然である。それは如何にするかといふに、一財の一定量に依て充たさるべき數欲望のある場合には、該量中の一物が失はれた場合にはその數欲望中の最も重要ならざるものを放棄する。又一定額の貨幣を以て購入し若しくは一定量の生産手段を以て生産し得べき幾多の財がある場合に失はれたる一物が其中の最も重要なものであれば、其喪失を其儘甘受する外はないが、さうでない場合には、彼れは當然貨幣又は生産手段を用ゐて失はれたるもの、補充をする。併し補充をする爲めには、今迄購入せられ、若しくは生産せらるべきもの、何れかを放棄しなければならぬ。その放棄せらるるものは無論其中の最も重要ならぬものである。

これ皆な凡て經濟本則の命する所である。

一財又は一生産手段に依て満たさるべき幾多の欲望があると同様に、一の欲望を満たすべき財は必しも一でないし、又一の財を生産すべき生産手段も亦た一種に限らない。例へば冬季暖を取るに薪と石炭と何れを燃すべきか。又或る一物を生産するに如何なる方法に依るべきであるか、殊に人間労働と機械と何れに依るべきであるかの問題は、吾々の常に逢着する所である。而して經濟本則は何れ

の場合にもその中の最も犠牲少なきものを選ぶことを命ずる。人が生産方法の改良に努力するのも亦た此の本則の命に従ふものである。人間が無智又は錯誤の爲め謬つて犠牲多き方法を採用することは屢々ある。けれどもそれは過つてする丈けの事であつて、苟も合理的に行動する以上、人間は一事を果たすに、事情の許す限り犠牲少なき方法に依るといふ事は動かし難い事實である。代用品を造り又は用ゐる場合も此に該當するであらう。茶が高價となつたので珈琲を用ゐ、バターが騰貴したのでマルガリンを用ゐるのは畢竟一の欲望をより低廉に満足せしめんとするものに外ならぬ。

次に人間は其の所望物の獲得の爲め何の程度まで努力するかといふ問題がある。

先づ結論をいへば、努力はそれに依て獲得せらるべき財の効用が努力其者の不快と等しくなる點まで續けられるのである。人間は其所要の財を獲得する爲めに努力しなければならぬ。その努力をするに既存の道具や機械の助けを籍るか、或は徒手を以て自然に當るかは別として、兎に角努力して所要のものを得なければならぬことは動かない。然るに人間の爲し得る努力には限りがある。其處で限りのある努力を以て獲得し得べき財の量にも限りがある。従つて或財の一定量を失へば、それが其場合に於て比較上最も不要に近い物でない限りは、之を補充しなければならぬ。補充するには限りある努

力を他の用途から割いて此に充てなければならぬ。其をすれば、其の爲めに、努力を以て獲得せらるべき諸財の中の最も重要ならざるものが放棄されなければならぬのは當然である。そこで右の如き事情の下に於ける一財の得喪は、同じく右の如き意味に於て最も重要ならざる一財に依て得らるべき満足の得喪と其意味を同じうする。これは往年限界効用學說の勃興當時に於て、此効用說に對して、効用說を承認し乍ら費用說を辯護したドイツェルが、經濟財の價値は其獲得の費用に依て定まるといふことは、決して効用に依て定まるといふ理論と相拒否するものではないといふ事を説明する爲めに力説した點である。其場合に彼等は、費用とは畢竟効用の喪失 (Nutzeneinbuss) に外ならぬものであつて、一物の價値が其費用に依て定まるといふことは、其一物を失つた爲めにどれ丈けの効用が失はれるかに由て定まるといふことであるが、その失はれる効用といふのが、若し該財が補充し得らるる財である場合には、限りある労働を其補充に向けた爲め、他の何物かの生産が放棄されねばならぬ。此の放棄せらるるものの効用が即ち喪はるる効用であると説いた。(ドイツェル曰く、「價値は全然効用に倚るものなり」とジエデンスは言ふ。然れども費用は効用の喪失、又は負數効用に等しきを以て、此命題は決して、價値は費用に倚るとの命題と撞着するものではない。諸財の價値の大きさは

其の再生産に由て生ずる効用喪失の大きさに倚ると主張するも、決して是に由てその効用に倚ることが否定されるのではないと。a. a. O. S. 209)。此説明は實に美事なもので、今は効用論費用論争上の一の古典として記憶さるべきものである。

然るに彼れは此説を述べるに當つて、勞働の不快が勞働生産物の價値に影響あることを看過するのみならず、明に之を否認してゐる。其の處で彼れはアダム・スミスを引用して之を難じてゐる。スミスの文の大意に曰く、凡ての物の眞實の價格 (real price)、即ち凡ての物が之を獲得せんと欲する人に眞實に費さしむるものは、之を獲得する辛苦と煩勞と (toil and trouble) である。凡ての物が、既に之を獲得し、而して之を他の物と交換せんと欲する人に取つての眞實の値は、其物が彼自身の爲めに省き、而して他人の上に課することを得る辛苦と煩勞とである。貨幣又は財を以て購買せらるゝものは、吾々自身の肉體の辛苦に依て獲得するものと同じく、勞働に依て購入せられる。彼の貨幣又は彼の財に依て吾々は此辛苦を助かる。——勞働の等しき量は、凡ての時凡ての處に於て勞働者に取つて等しき價値を持つと言ひ得る。彼れの健康、力及び元氣の普通の状態に於て、彼れの熟練と巧妙の普通の程度に於て、彼れは常に其安易、其自由及び其幸福の同じ部分を棄てなければならぬと。

デイツェルが之を難する理由は、勞働の不快其者は人に由り、勞働の種類に由て殊なり、勞働は不快を感せしめるといふ通則に對しては餘りに多くの例外があるといふのである (S. 233)。併し此批評は當らない。勞働の不快は主觀的であると謂ふが、主觀的であるのは勞働の不快感のみではない。効用も亦た主觀的である。一財に依て欲望が満たされる其程度は人に由て同じでない。無論物に由て同じでない。主觀的だからといつて之を放棄するなら、デイツェル自身の認めてゐる、効用や効用喪失の概念も亦た棄てられなければならぬ筈である。今此點は深く追究しないが、茲で特に勞働の不快といふものを度外すると勞働の限度を説明することが出來ぬことを言はなければならぬ。勞働の限度を説明し得ないと、勞働有限性を土臺として立てた、費用即効用喪失の理論も成立しなくなる譯である。デイツェルの理論を極めて簡単な例證で説明すればつまり斯ういふ事になる。例へばロビンソン・クルウツォが毎日十時間の勞働をするものとする。而して其の十時間内に a b c d e なる五種の財を生産するものとする。而して各財の生産は何れも二時間を要するものとし、a が最も重要な財で、b c 以下是に次ぎ、e が最も重要な程度の低いものとする。此場合に a b c d の何れか一を失つたならば、彼れは無論それを補充する。補充する爲めには二時間といふものを、失はれた物の再生産に充て

なくてはならぬ。而して若しも一日の労働量が十時間と限られてゐるとすれば、彼れはその二時間といふものを何か他の物の生産から割かねばならぬ。彼れは當然 e を犠牲にしてその生産を断念するであらう。即ち斯る事情の下に於ては、一日中に生産せらるべき五種の財の何れを失つても、ロビンソンの眞實失ふ所は e に外ならぬといふのである。けれども此處で吾々が問はねばならぬことは、一日十時間の労働に服するといふこと其自身は如何にして定まるのか、何故十時間の代りに十二時間まで労働せぬか、或は八時間で止めないかといふことである。答へは簡單である。十時間の代りに十二時間労働しないのは、其差たる二時間の労働に依て獲得せらるべきもの、効用が労働其者の不快を償ふに足らぬからである。また十時間の代りに八時間の労働に止めないのは、更に二時間の労働に依て得らるべき効用が、少なくとも二時間の労働の「苦辛と煩勞」とを償ふからである。此場合に努力の限度を定めるものは、常に努力に依て得らるべき効用と、努力の爲めに棄てなければならぬ「安易、自由及び幸福」との比較である。

故に労働に依て得らるべき効用が大ならば、労働時間は延長せられ、「安易自由及び幸福」を求める念慮が強ければ労働時間は短縮されるであらう。例へば更に別に一人のロビンソンがあつて彼の小説

に描かれた島よりも一層硤角不毛なる孤島に漂着した場合を想像すれば、彼れは恐らく第一のロビンソンよりも長時間の労働に服するであらう。それは生産力の程度が低ければ、同一時間の労働に服したる後満たされずして残された欲望は、第一の場合よりも必ず強いに相違ないからである。概して貧しい者(乏しい報酬を受ける者)が長時間の労働に従はなければならないのは、彼れは未だ充分その重要な欲望を満たしてゐないから、一定時間の労働後に於て彼れが労働を止める安易と自由と及び幸福と比較するものは富有なる者に於けるよりも遙に強い欲望の満足である。比較的小なる安易と自由と幸福を得んが爲めに其よりも遙に強い欲望充足の幸福を放棄することは固より經濟本則と相容れない。乃ち彼れは更に労働を繼續する。繼續して何の點まで進むかといへば、労働の不快が、労働に依て達せらるべき欲望の満足と相均衡する點までである。若し其以前に停止すれば、彼れは労働しないといふ「安易等々」の爲めに、より大なる欲望満足を犠牲にし、反對に其點以後まで進行すれば、或欲望満足の爲めに、より大なる「安易等々」を犠牲にする譯であつて、何れも經濟本則に抵觸するのである。

第六章 價值及び富

右の叙述に於て私は既に再三價値の語を使用した。經濟學にいふ價値とは何であるか。

既述の如く經濟生活は人間の欲望満足の爲めに営まれる。欲望満足の目的を達せんが爲めに、欲望満足の手段即ち財の獲得に向つて努力する。それは手段其者が欲しいからではない。これがなくては欲望満足に事を缺くからである。故に或物が我々の欲望満足の役に立たないか、或は役に立たなくなれば、吾々はその物の有無得喪に頓着しない。吾々のこれに對する態度は無關心である。又物其者の客觀的性質としては欲望充足に役立ち得べきものであつても、時の情況に於てその得喪が欲望充足の安全を少しも傷けない場合には、其物の有無に對して吾々は同じく無關心であらう。然るに一物に無關心といふことと其物に價値を認めるといふこととは全然相容れない。價値ある物に對して無關心であるといふことは熱いものは冷たいといふにも等しい形容矛盾である。即ち吾々が一物に價値を認めるといふことは其物の有ることを希ひ、無くなることを惧れることに外ならぬ。而して斯く其物を重要視

するのは、其物の得喪が評價者の欲望満足の可能性に影響することを意識することに出發する。そこで吾々が價値ある物に對する關係は單に効用ある物に對する關係よりも更に一步進んでゐることが分かる。固より價値ある物は効用ある物でなくてはならぬが、併し乍ら單に効用があるだけでは未だ必しも價値を生せぬ。例へば水や空氣の如き自由財である。水も空氣も吾々の大切な欲望を満たすべきものであることは誰も疑はぬ。併し乍ら通常の場合吾々は水や空氣の特定量（水何ガロン、空氣幾立方尺）の得喪に對して無關心である。これは件の特定量が得られても失はれても、吾々は飲む水呼吸する空氣に毫も不自由しないことを承知してゐるからである。即ち該財の特定量に對して吾々の幸福、即ち欲望満足が少しも倚頼しないことを承知してゐるからである。然るに數量の限りある物になると趣は異つて來る。即ち是等のものにあつては、その或特定量の有無が吾々の幸福に影響する。従つて吾々はこれに對して無關心でなくて、之を尊重せざるを得ないのである。而してこれを尊重するのは單に其物に効用があることを認めるからではない。効用の享受、即ち欲望満足の可能が、それに倚頼することを意識するからである。茲に於てカアル・メンガアの動かし難き價値の定義がある。

其大意に曰く、財の價値とは、吾々が吾々の欲望満足の上に於て特定の財又は財の分量の所有に倚

頼することを意識することに依て之に認める重要性であると。(これは自由なる意譯であるから原文を併記しよう。Der Wert ist Bedeutung, welche konkrete Güter oder Güterquantitäten für uns dadurch erlangen, dass wir in der Befriedigung unserer Bedürfnisse von der Verfügung über dieselben abhängig zu sein uns bewusst sind, (Carl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre II, Aufl. 1923. S. 103)

茲に効用が直ちに價值を定めず、効用の認識が直ちに價值の認識とならないのは何故であるか。外でもない。欲望飽和の法則があるからである。渴きの爲めに將に死なんとするものが清冽なる湖水の畔に辿り着いたとしよう。彼れは手に掬ぶ間もどかしく其水を飲むであらう。最初の一杯乃至數杯は彼れに取つて絶大の効用を有するであらう。而かも猶ほ彼れは其湖水の水を他人が來て與に掬ぶことを少しも妨げようとはしないだらう。それは如何に渴いてゐても此湖を飲み干すことが出来ないこと、延いて他人が與に飲むといふことは少しも彼れの幸福に影響しないことを承知してゐるからである。

前に自由財と經濟財とを分けたが、上述の説明に由て、經濟財とは即ち價值ある財、自由財とは効用あるも價值なき財であることが會得されたであらう。

自由財に對しては吾々は無關心であり得る。經濟財に對して之を重要視する。無關心であり得ることとは、即ち其に對して獨立し得ることである。重要視するといふことは、何等かの程度に於てこれに従屬することである。人は固より價值なきものを顧みず、價值ある物或は價值より多きものを獲得せんとして努力する。併しこれを以て直ちに物の價值の-highいことが人間の幸福であるかと即斷すれば非常な謬りで、事實の正反對である。財と「人間」との關係に就いて見れば人間が愈々財に従屬することの反對に愈々財に無關心となる状態に近づき得ることこそ望ましいのである。現在大なる價值を有し、人間がその獲得の爲めに營々として努力して居る様々の財が、一朝何等かの原因に依て水や空氣の如く自由に無償に享受し得らるゝものになつたとしたならば、人間は幸福は如何許りであらう。反之、今日無代價で得てゐる水や空氣や光線に價值が生じ、營々として努力しなければ水も飲めず、空氣も吸へず、日光にも浴することが出来ないとなつたならば、其慘狀は想像の外であらう。吾々にはたゞ水を飲み、空氣を吸ひ、日光に浴する爲め丈に其精力の大部分を消磨しなければならぬ。人類の文化は忽ち其跡を留めなくなつてしまふであらう。人間の全體としての自然に對する努力は換言す

れば今日の經濟財の價値を益々低下せしめんことにあると言つても差支ないのである。

價値は財に對する人間の從屬を意味するといふことに就いてドイツェルの言には味ふべきものがある。

「吾々は無際限の財を無視すること全能なる専制君主が其の臣下を遇する如くする。有限の財は吾々に尊敬の念を吹き込む——吾々をそれに依頼することを感ずる。此尊敬の念、此の依頼の意識から評價といふことが發する。たゞ斯る財のみが主體に依て價値物の位階に迄引上げられる。價値物とは効用があつて、而して限られた量に於て有せらるゝものである。」(G. O. S. 219)

評價の根源として明に依頼の意識を擧げたのはロオドベルトスが夙い。これもドイツェルが指摘してゐる。「可用性ある物」と(効用ある物と同義に解して可也)と「價値ある物」とは同一でない。「價値ある物は可用性あるものよりも更に狭き概念である」「予が可用性と稱するは一物が何等かの目的を達する手段として用を爲し得る役立性の人間に依て認められたるものであり」、従つて「全然客觀的基礎」を有するものである。「人間が果して實際に、『可用性ある物』が其の客觀的適當性に應じて其成就の爲めに役立ち得る目的を立てたるか否かは『可用性ある物』といふ概念に於ては表明せられて

居らぬ。此事は『價値ある物』の概念に於て始めて起る。人は實際に一の目的の纒にこれに用ゐ得べき手段を以て成就し得べきものを立てることに依て、此物に對して彼の必要と稱する一種の依頼の關係に立つに至る。而して其物は單に此事に依てのみ(欲望せられたるものとして)彼の『價値』と稱せらるゝ重要性を取得するのである」(S. 220)

一物の價値とは其物に對する依頼の意識から發して之に認める重要性であることは、上述の通りである。ところで其重要性を認める者、即ち評價者であるが、吾々は之を全然孤立の個人の場合と社會の場合とに分つことが出来る。而して社會は更に共同經濟組織のものと交換經濟組織のものに分つことが出来る。

孤立經濟(ロビンソン經濟)に就いては至極簡單である。彼れに取つての諸貨物の價値とは直ちに其等のもの、彼れの欲望充足上に有する重要性を意味する。彼れに取つての小屋一棟、上衣一着、小銃一挺、獨木舟一隻、投網一張り、山羊一頭、魚十尾等々の價値は、欲望充足上此等の諸貨物の單位の有無に依頼する程度の認識に由て定まる。換言すれば、一貨物一單位、例へば獨木舟一隻を失ふことに依て彼れが何れの欲望の満足を、或は何の程度の欲望満足を犠牲にしなければならぬかに由て定ま

るのである。これは假りに此等のもの、數量が與へられた一定のものとしての話である。

然るに其存在量が固定せず、生産手段を投入すれば新に再生産し得べきものである場合には、一物の價値は該財其者の得喪に依て得喪せらるゝ欲望の充足に依らず、該物の喪失の場合に限りある生産手段を其補充に充當する爲めに起る他の欲望満足放棄の程度如何に由て定まることは、前に少しく論及した通りである。何れにしてもロビンソン經濟に於ては、一物の價値は、主體がその物に認める重要性だといふことは極めて容易に説明し得られる。

然るに評價者が單一の個人でなくて、何等かの社會である場合には問題は稍々複雑である。

個々の財に對する個々人の欲望は一々異なる。従つて一物の喪失に依てどれ程の欲望満足が失はれるか、又一物の保有に依てどれ程の欲望満足が保障されるかは、人に由て同じくない。併し個々人の主觀的評價は斯く千差萬別であつても、此等個々人を以て構成せらるる社會に對して一定財の一定量が或重要性を持つてゐることは議論がない。一物の或一定量が失はれば、何人かの欲望満足は、それだけ削減される。而して社會はその何人かを通じて其丈の損失を忍ばねばならぬ。従つて該物の得喪は其社會に取つて無關心の事柄であり得ない。其社會の幸福は或程度に於て該物の得喪に倚賴するの

である。茲に於て社會に對する價値といふものが無くてはならぬ。けれども此の社會による單一の評價の行はれ方は、其社會が共同經濟たると交換經濟たるとに由て同一でない。

共同經濟にあつては、該經濟全體に對する一財の價値は經濟主體の統一的意志に依て評定される。自給自足しつゝある昔の大家族經濟、或は共產主義者に依て想ひ描かれてゐる未來の大規模なる共產主義經濟に於ては、評價は家長又は中央行政機關に依て行はれるのである。吾々は常により多くの價値ある物を獲得せんと努力し、其價値に従つて生産力の配當を行ふものであるが、共同經濟に於ては、此の評價並に其に基づく生産力の配當は何れも中央意志に依て統一的に行はれる。

無論此場合に評價が經濟主體に依て統一的に行はれるといふことは、其の個々の屬員を無視して行はれるといふ意味ではない。主體は全員の爲めに、全員各自の欲望と其輕重とを計量し、他面之を満たすべき諸財の存在量又は現有の生産力を顧慮し、比較して、何れの欲望充足を重しとし、又従つて其充足の倚賴する何れの財を重しとなすべきかを決定するのである。家族經濟内に於ける評價は家長（或は家長の代理者）に依て行はれるが、無論其場合家長の個人的欲望のみが顧慮されるのではない。例へば小兒の或欲望を満たす爲めに家長が自己の或欲望を抑制するとか、或は僕婢の欲望を満た

さしめんが爲めに家族員の或欲望の充足を放棄するとかいふことは無論屢々起り得る。又其の評價は單純に欲望者の數に依て決せられる譯でもない。例へば家族員は皆健康で、其中の一人のみが病床に呻吟するといふ場合、恐らく藥劑は（爾餘全員に取ては無用なるに拘らず）價値あるものとして尊重されるであらう。けれども此等の場合に誰れの何の欲望充足を先重すべきか、又是を何の程度に於てすべきかといふことは、經濟主體の判斷に依て決せられる。主體の判定如何に由ては主體自身の個人的欲望のみが尊重されて、爾餘の者の其は甚しく輕視されるかも知れぬ。又其と正反對の事があるかも知れぬ。共產主義社會に於ても同様であつて、若し完全に私的交換といふことを禁遏し得るならば、諸物の價値は一に中央機關の公定に由て階等附けられるのである。而して何れの場合に於ても問題を決するものは、欲望充足が一財の得喪に何の程度迄倚賴するかを判定である。

ロビンソンが奴隸フライデエを得たる後、此二人がロビンソン主宰の下に一の家族的共同經濟を營んだとすれば、此二人を以て構成する社會に取つての諸物の價値は、ロビンソンの判定に由て決せられる。彼れは無論フライデエの趣味欲望を顧慮するであらう。併し此の二人の社會に取つて何物が最も重要であるか、何が其次に重要であるか等々を定めることは、二人の欲望を自己の標準に依て斟酌してロビンソンがするのである。

然るに、若しフライデエもロビンソンと離れて別に獨立の家計を營み、自己の裁量に従つて特殊の生産物を造ることに其力を集注し、其生産物を任意にロビンソンと交換するものと假定すれば、吾々は極めて幼稚單純ながらも茲に一個の交換經濟を持つのであつて、前記のやうな統一的評價は行はれなくなる。何となれば、誰れか此の二人の人を以て成る社會の全體を代表して評價するといふことが行はれないからである。假りにロビンソンがa b財は互に同價値、cは其三倍、dは其四分の一といふ風に各財の價値を定めても、それは全然彼一個に取ての評價であつて、フライデエに對しては必しも効力を有たぬ。ロビンソンはa一個を提供してフライデエ所有のb一個と交換しようとしても、フライデエは之を應諾するとは定まつてゐない。其代り又フライデエは或はd二個を以てa一個と交換しようとするかも知れぬ。交換經濟の參加人員が増加すれば事態は益々紛糾を加へるであらう。

斯る社會に於て社會の統一的評價を表明するものは諸財の價格形成の外にはない。これは別の場所で詳論しなければならぬことであるが、價格は各人個々の主觀的評價から出發して形成せられる。併し必しも個人の評價とは一致しない。個人の評價とは一致しないが、併し各個人は此の統一的評價と

見るべきものに服従するのである。一財を購入せんとする者は、それが經濟的に行動する限り、如何に其物を高く評價してゐても、之に對して其價格以上は支拂はぬ。反對に如何に其物を低く評價して居る者も其價格以下では之を購入することが出來ぬ。彼れは此價格を支拂ふか、左なくば其購買を斷念するか、何れかしなければならぬのである。此價格を支拂ふことを辭せざる者のみが能く購買者となり、之を甘んじ受取る者のみが供給者となり得るのである。一定の價格が成立すると、其丈けの價格を支拂ふことを肯んじない幾多の購買候補者、又其價格を以て満足せぬ同じく幾多の販賣候補者は其賣買から除外されるのである。従つて一財の價格は屢々誤り解せらるゝやうに其に對する個人的評價の平均を表明するものではない。何となれば此の價格を支拂ふことを辭せざる者は、皆な其財をば少くも其價格以上に評價する者でなくてはならぬが、其價格以上に評價する者の評價の程度には何等の定限がない。價格以上に非常に高く評價してゐるかも知れない。又反對に賣買から除外された買手の評價に就ても同様である。吾々をたゞ彼等の評價は價格以下であるといふことのみが明かなので、其程度は其價格以下零以上無數の階等があり得るのである。或者は價格に極く近い程度に評價してゐるかも知れない。或は零に近い評價をしてゐるかも知れない。又其中間の何處かに位する程度の

評價をしてゐるかも知れない。其だから購買者の評價が價格以上に離れてゐると同一の割合に於て購買から除外された者の評價が價格以下に離れる筈だといふ約束は何處にもない。従つて買手の評價の平均が價格に現れるといふ理由は何處にも説明されてゐない、又説明され得ないのである。

然らば價格は何れの個人的評價とも一致しないのであるか。さうではない。其は限界的購買者、即ち辛うじて賣買から除外されずに残り得た購買者の個人的評價と一致すると謂ふことが出来る。限界的購買者とは購買者中で最も評價の低い者である。此限界購買者は、少なくとも多數の賣買者があつて各人が經濟的に行動せる場合に就いていへば、一財を其價格と等しく評價せる者と見ることが出来る。従つて此財の一單位量が失はれた場合には、其價格は此の限界購買者を除外するに必要な丈け、或は彼れをして該財の其購買額を一單位量縮小せしめるに必要な丈け騰貴する。さうして限界購買者は其價格と等しく評價してゐた満足を失ふのである。従つて價格の相等しきものは社會に取つて相等しき重要性を有するものと考へねばならぬ。

前に一物の價值とは評價者が其福祉（欲望充足）が其物の得喪に倚賴せることを意識するに基づいて其物に認める重要性であると謂つたが、此評價は前述の如く、ロビンソン經濟に於ては極めて簡單

に行はれ、又共同經濟に就いても左迄の困難なく行はれる。たゞ交換經濟に至つては、全體を指導統制する單一の意思なく、又經濟を構成する各個人が夫々區々の評價をなし、其に基づいて行動するから、孤立人經濟又は共同經濟に於ける如く社會其者が直接に財の重要性を判定するといふことがない。ただ一財の一單位が失はれた場合、其社會全體は何程の損失を蒙るかを考へて見ると、社會は限界購買者の欲望充足一單位丈けを失ふのである。該財一單位の有無に倚賴する福祉とは、限界購買者の欲望充足に等しき重要性を持つ。而して此重要性が價格に表現されるのである。故に社會は其限界購買者を通じて一財を評價するといふことが出来る。但し何人が其の限界購買者となるかは固より需要供給の關係に依て、價格に由て定まる。價格が騰貴すれば、前より高き評價をなす者が限界購買者となり、反對に下落すれば、より低き評價者が限界購買者、即ち社會評價の表明者となるのである。

人間は其欲望の成るべく豊富充分に満たされることを希ふ。その財に對する關係をいへば、財の供給が成るべく豊富潤澤であることが願はしいのである。併し今迄に述べて來たことに依て、價値は豊富潤澤に由て生じないで、缺乏不足に由て生ずることが明になつた。豊富なるもの、一々は、吾々は之を無視または輕視する。缺乏不足してゐるもの、一々は、その缺乏してゐるといふことが吾々に其物に對

する尊敬の念を吹き込む。併し吾々は價値なきもの、爲めには努力しないから、物に價値があるといふことが、即ち吾々の幸福を表示するのであるかの如く考へ易いが、此點は速斷に陥ることを慎まなければならぬ。人間は物に對する從屬の甚しいことに依て幸福になるものではない。從屬から免れることに依て幸福となるのである。勿論社會に於ける一個人の立場、又は諸國に對する一國の立場からいへば、成るべく價値の多い物を有することが望ましい。それは即ち他人を我に從屬せしめ、我が有する物に對して相手をして多くの物を提供せしめる所以だからである。けれども社會全體、又は人間其者の財に對する關係からいへば、當然吾々の欲望を充たすべきもの、益々豊富潤澤であることが望ましいのである。水や空氣に價値がないこそ幸福なのである。

斯様に價値といふものは畢竟人間の物に對する倚賴の意識より發するのであるが、此の倚賴の反對たる獨立、即ち逆に人間の物に對する支配を現すもの、即ち價値と相對立する概念は何であるか。從來學者が往々價値に對せしめる概念は富であつた。就中リカードは此兩者の差別を明にしようとして努めた。「人の貧富は、その能く人間生活の必需品便宜品及び娛樂品を享受し得るの度合如何に由る」とアダム・スミスは言つた。リカードは此のスミスの言に賛成である。さて賛成して見ると價

値と富とは相對立する概念であることが分かる。蓋し價値は不足から生じ、富は潤澤を意味するからである。故に曰く、「從來貨物、即ち人間生活の必需品、便宜品及び享樂物の數量を減少せしむることに依て富を増加せしめ得るといふ斷定をなすものがあつたのは、價値と福祉若しくは富との觀念の混同から生じたものである。若しも價値が富の尺度たるのであつたならば、此事は否定すべからざる所であらう。諸貨物の價値は稀少の爲めに騰貴するからである。併し乍ら若しアダム・スミスの言ふ所が正しければ、若しも富が必需品及び享樂物より成るものであるならば、富は數量の減少に依て増加せしめ得るものではない」と。

但し一個人又は一國の立場から見れば、珍しい、數量の少ない物を持つて居ることが即ちそれだけ其人を富有ならしめる所以であるが、併し此場合は一人が富有となる丈他人の富は減少する道理である。水が缺乏すれば、その缺乏した水を獨占(獨占者があるとして)して居る者の富は、個人的見地からしては當然増加する。併しこれに依て社會全體の富が増加するとは言はれない。否な全體の富は減少する道理である。……「農業家は其穀物の一部分を、靴製造者は其靴の一部分を、又凡ての人々は其所有物の一部分を、單に從來無代價で得た水の供給を受けるといふ一の目的の爲めにのみ投じなければならぬ

いのであるから、彼等はその此目的に充用しなければならぬ貨物全量だけ貧しくなり、水の所有者は正しく此人々の損失額丈けの利益を受ける。全社會の享受するものは、水の同一量及び諸貨物の同一量であるが、たゞ其分配の趣が異なる。併し乍らこれは水の缺乏よりも寧ろ其獨占を假想するものである。若し水が缺乏したならば、其場合には其國及び個人は、其の一享樂物の一部分を奪はれるのであるから、其富は實際に減少するであらう。農業家は、常に自己に取つて必要なるか、或は望ましかるべき他の諸貨物と交換するの用に充つべき穀物が少なくなるのみならず、彼れも他の凡ての人々もその最も缺くべからざる一快適品の享受を削減されるであらう。常に富の分配が異なるのみならず、富の現實の喪失がある」(小泉譯、リカアドオ經濟及び租稅原論、四〇九—四一一頁)

第七章 經濟生活と時

經濟生活は欲望充足の爲めに營まれる。そこで當然吾々の欲望充足に役立たぬものは吾々の努力の對象とならぬ。又欲望を満たし得べき性質は具備しても、其存在量に既述せる意味に於ての不足なきものも同じく吾々の努力の對象にはならぬ。といふ事は、畢竟經濟生活は價值ある物の獲得を意味するといふに歸着する。而してこれが廣い意味での生産であることは前に述べた通りである。

生産は如何にして行はれるか。生産とは結局に於て人間の自然に對する攻撃に歸着する。固より社會を構成せる人間が生産を營む場合には、人間の對自然の攻撃が行はれると同時に人間對人間の交渉にも或作用の行はれることを常とするが、而かも孤立人に就いても生産は考へ得られるから、生産に缺くべからざる本質は人間對人間の交渉でなくて人間對自然の一面に存すると言はなければならぬ。その人間の自然に對する攻撃が即ち勞働に依て行はれる。能動的要素としての勞働、受動的要素としての自然、此の二つがなければ生産は無論行はれない。土地を耕して穀物を作り、河海に魚を漁するこ

とは言ふ迄もなく、既存の原料に加工する場合に於ても、常に人間の自然に對する働きかけは何等かの方法に於て行はれてゐる。而して其自然の最も主要なる地位を占めるものは土地である。古く行はれた、富なるものは土地を母とし、勞働を父として生れるといふ言葉は此意味に於て正しい。

然るに闘争に武器が用ゐらるゝると同じく、生産も亦た用具を以て行はれる。人間が赤手空拳を以て直ちに自然に立ち向ふといふことは、今日でも絶無ではない。天然果實を採取するとか、野生の鳥獸魚介を手捕りにするとか、或は有り合せた石などを擲げ付けて捕獲して之を食ふとかいふのは其に該當するが、併し斯の如き、殆ど手から口への生活を營むことは、今日では極めて稀れで、實は經濟と非經濟の境界領域に屬すると謂つても好い位のものである。大概の場合には、人間は過去の生産の結果たる財を用具として更に所望の財の獲得に向ふのが常である。淵に臨んで魚を羨む代りに退いて網を結ぶといふのが其一例である。野蠻人が幼稚ながらも先づ弓矢を造り、或は投石器を造り、次いで其を用ゐて鳥獸を捕るといふ場合、例へば先づ棉を造り、其綿を紡いで絲にし、絲を織つて布にし、布を裁縫して衣服にするといふ場合、その絲を紡ぐ紡績機械、絲を織る織機、裁縫に用ゐるミシンを先づ製造し、それを用ゐて紡績や織布や、裁縫を行ふといふ場合、或は先づ土地を耕し、種を蒔き、肥料を施

し、而して實つたものを收穫し、收穫したものを或は製粉し、或は精白して最後に食用に供するといふ場合は、何れも其に該當するのである。此等の場合に於て人間の求めるものは食物衣服であつて、網や弓矢や投石器、或は綿花、綿絲、綿布、紡績機、力織機、ミシン、更に又種子や肥料や、土地改良等は何れも皆な此の所望の財を獲得する爲め的手段として役立つものに外ならぬ。即ち此等のものも皆な人間の欲望を満たす財たることは失はないが、その欲望を満たす方法は衣服や麵包の直接なるに對して間接なるの差違がある。故にそれを直接財及び間接財として別けても好い。或は享樂財、生産財として別けても好い。更に或はメンガアに従つて第一位財と第二、第三、第四位財等々、即ち低位財と高位財として別けても好い。メンガアが引用する所の例に従へば、食物、飲料、煙草其他は第一位財、是に對して穀粉、燃料、パンを焼く道具等が第二位財、小麥、裸麥、製粉機械等が第三位財、耕地、耕耘用具等が第四位財である。高位低位の別は第一位財から益々遠ざかるものを益々高位にあるものとするのである (Menger a. a. O. S. 21—22)。

前述の通り、人間が手から口への生活を営む場合には、生産財は全く生産せられないか、生産せられても極めて僅少である。例へば手で蟲や魚を捕へたり、野生の果實を摘み取つて直ぐ其儘食へると

か、或は木の葉を身に纏つて衣服にすると言ふやうな事があつたとすれば、其様な場合がそれであるが、此等の場合には生産、獲得せらるゝもの大部分は、享樂財であつて、享樂財に對する生産財の割合は極めて小さいのである。それが一方で満たさるべき欲望が精良となつて加工の過程が加はつて行くと、既にそれ丈で、生産財と享樂財の割合が變化する。即ち例へば假りに穀物肉類を元と生食したのを先づ製粉して後麵包に焼いたり、或は様々の調理をして食用に供するとすれば、既に完成せる食物（即ち享樂財）と其材料（生産財）との別を生ずる。凡て品物の精製といふことが進めば、それ丈け享樂財と生産財との割合が變化して比例的に後者が増大する。文明の進歩は必ず此意味に於ける生産財の比較的增加を齎すと謂つて好いのである。

右段には材料の意味に於ける生産財の事を説いたが、是よりも遙に著しいのは生産道具の意味に於ける生産財の増加である。即ち魚を漁する爲めに網を造り、田を耕す爲めに犁鋤を造る。絲を紡ぎ布を織る爲めに機械を造る。其機械を造る爲めに更に機械を造る。其の網や犁鋤や機械が私の道具の意味での生産財である。既に人間は道具を造る動物だといふ學者さへある位だから、此意味での生産財を全く用ゐない生産は無視しても差支ない位であり、又經濟生活の進歩は一面に於て此生産財の増加（絶

對的にも亦た享樂財に對して相對的にも）其者に外ならぬことは改めて説明する迄もない事であらう。而して道具的生産財が何故に使用せられ、又従つて生産されるかといへば、其なしには造り得ないものを造る爲めか、或は一定の費用を以てより良く或はより多量のものを作る爲め、即ち生産をより有効に行はんが爲めに用ゐられるのであることは論を俟たぬ。而してこれは蠻人が鳥獸を捕る爲めに弓矢や陷穽を造る場合でも、文明人が新式の大規模な機械装置を設ける場合でも其道理に變りはない。

生産財を用ゐて、或は益々多くの生産財を用ゐて生産を行ふと謂ふことは、詰まり手から口への生活を營むことの反對である。而して手から口への生活といふのは、畢竟當面目前の欲望を満たす努力に忙しいといふことに外ならぬ。従つて生産財を造り、或は益々多くの生産財を造るといふことは、畢竟それだけ將來の計をなすといふことに歸着する。尤も經濟行爲が遊戯でなくて勞働である以上、それは凡て行爲以外の目的の爲めに行はれる行爲であり、而して或目的の爲めに手段として或事を行ふとすれば、其事自身が既に將來の計を爲す事を意味してゐる。即ち例へば魚介を取りに海濱へ出かけて行くといふことも、既に極く近い乍らも將來の計を爲すものだといふことも出来る。然るに直ちに魚介を

取る爲めに海濱に出るといふことをしないで、先づ退いて網を結ぶとすれば、それは近き將來の代りに更により遠き將來の利益の爲めに努力するといふことになる。従つて生産財を生産するといふことは、近い利益を棄て、より遠き將來の計を成す所以であると言ふべきである。而して將來の計を成すといふことは、畢竟現在の犠牲に對する報酬を今直ぐに求めないで之を將來に期待するといふことである。換言すれば、犠牲に對する報酬を待つといふことである。生産財を生産することは此意味に於ての待忍を意味する。其は別言すれば享樂（欲望満足）の延期を意味する。益々多くの生産財を用ゐることとは益々多くの待忍（即ち享樂延期）が行はれたことを意味する。而して此享樂の延期を稱して又節約といふ。

さて此の「待忍」を行ふといふことは、多くの場合に於て賢明の處置である。併し必しも常に然りとは限らない。例へば平常の年に農夫が翌年蒔くべき種穀を食ふ盡したとしたら、其は明に思慮なき愚かな振舞である。併し饑饉に際しては、種穀を食ふは固より、家畜を屠殺して食用に供することも已むを得ぬ場合があるであらう。其様に目前の必要が切迫してゐる場合に、現在の事を打て棄て、置いて遠い將來の計に没頭したならば、却てそれが愚かな處置であるかも知れない。要するに待忍の行は

れる程度如何は、現在（即ち近き將來）の欲望を充足し得る程度如何と、將來を顧慮する智力及び意力の如何とに由て決せられる。如何に將來を顧慮し得る丈けの智力があつても、現在目前の饑寒を防ぐに全力を擧げても足らぬといふやうな場合には、將來の生活をより良くする爲めの生産財などを造つてゐる邊はない。人は差し當り先づ現在の力（労働と既存の生産手段と）を擧げて兎に角食べ得るもの、身に纏ひ得るものの獲得に没頭しなければならぬ。併し乍ら若し將來の計を成す丈けの智力と意力とを缺くならば、縱令現在の生産力に餘裕があつても、人は目前の欲望充足に忙しいだらう。

或る學者の引例を藉りて重ねて此道理を説明しよう。學者が著述をするとする。書齋には利用すべき各種の文書が亂雜に堆積してゐる。若し筆を執るに當つて先づ此書類を適當に整理して、例へば之をカードに記入分類するといふことをすれば、其以後の書類の點檢は極めて簡便となり、後日に於ける執筆は其爲めに非常に促進されるであらう。併し乍らカード作製には時間と努力とを要するから、若しも此學者が直ぐ日々幾枚かの原稿を書いて書肆に提供して之を稿料に代へる必要があり、而かもその幾枚かを書くことが一日の精一杯の仕事であるとしたならば、彼れは到底カードを作成してゐる邊がない。彼れは不便を忍びつゝ用ある毎に亂雜な書類を掻き廻して必要のものを見出しては稿を

續ぐといふ事をするより外に仕方があるまい。併し乍ら、縱令日々執筆の必要は切迫して居らずとも、此人にして將來に於けるカード利用の便益を充分會得することが出来ないか、或は出来ても怠慢で其決心が付かぬ場合には、彼れは依然として幼稚亂雜の方法を以て執筆を進めるであらう。此場合に其の何れの方法を取るであらうかは此人の智力意力に依て左右せられる。カードの作製を生産財の生産といふのも仰々しいが、此場合に於てもカードは上述の意味に於ける待忍あることに依て作製されるのであつて、道理の上では生産をより有効に行ふ爲め各種の道具や機械を生産する場合と毫も殊なる所はない。カード作製に要する時と努力とは直ちにカードの完成其事に依ては報ひられない。將來の幾年かの執筆上、幾度かカードの利用に依て受ける便益に依て始めて酬ひられるのである。該著述家は現在の犠牲と將來の便益とを比較して其處置を決する。而して將來の便益の爲め敢て現在の犠牲を忍ぶとすれば、即ち彼れは此場合其努力の報酬を直ちに求めることをしないで之を後日に待つのである。

カードを作製するか否かが右述の考慮に依て決せらるゝと同じく、如何なる程度のカードを作製するかといふことも、同様に現在の犠牲と將來の便益との比較に依て決せられる。時と努力とを費すこ

とが愈々多ければ愈々精細綿密なカードが作製せられ、それが愈々精細綿密なものであれば、愈々多くの場合に、又愈々長き將來に亘つて便益を供するものとする。さうすると作製せらるべきカードの粗密の程度を決するものは、之を精細にせんが爲めに要せらるゝ附加的勞力とそれが精細を加へた爲めに將來に於て享受すべき附加的便益との比較である。現在の犠牲といふことを度外すれば、將來に受けらるべき便益の愈々大きいことが望ましい。併し現在の犠牲を併せ考量すれば、或程度以上に將來の便益を求めることが却て不賢明の處置となる。例へば既に老境に入つて著述生活の餘命は幾許もなくなつたのに、自己の存生中には充分利用せらるべくない精細なカードを編成する爲めに、残り少なくなつた貴重な執筆時間の多くの部分を割くといふが如きは其である（子孫又は後學者の爲めにするといへば話は別である）。

一々例證に就いては説明しないが、より有効なる生産を行はんが爲めに道具を造り、機械を造り、或は耕地に改良工事を施し、或は道路を修築し、運河を開鑿する等の場合も皆な同じ事である。

上記の通りの次第であるから、生産財を用ゐて生産を行ふといふことは或意味で迂廻的方法に依る生産だと謂つて好い。魚を取るのに直ちに淵に臨まずして退いて網を結び、出來たその網を以て魚を

漁どるとすれば、これは明に迂廻的生产である。飲料水を求めるのに、直ぐに河や湖水の岸に赴いて水を汲み取る代りに、先づ鐵管土管を造り、之を埋設して水道を引くとすれば、これ亦た迂廻的生产である。迂廻的生产であつて而してより有効なる生産である。併し迂廻的であるからより有効であるのではない。より有効な方法が迂廻的である場合に比較考量の上之を撰擇するに過ぎない。目的は固より欲望の充足にあるのだから、吾々は經濟本則の命する所に従つて、其に達する最短の途を擇ぶ。故に迂廻的であつて而かも其効果に變りのない場合には吾々は全然それを問題にしないといふ丈の事である。但し迂廻的といふのは必しも時間上の先後を意味しない。即ち先づ生産財を生産し、然る後始めて之を用ゐて享樂財を生産するといふ意味に解する必要はない。たゞ現在の生産力の全部を擧げて直接享樂財の生産に充てるといふことをせず、其の或部分を割いて、成程將來の享樂を豊富にはするが、併し今直接享樂の用には供すべからざる生産財の生産に充てるといふ意味に於て迂廻的であるのである。

更に孤立人の場合に就いて之を考察して見よう。ロビンソン・クルウソオが沖に出てもつと豊富に魚を漁獲する爲め小舟を一隻造らうとする。彼れは固より日々の生活の必要を満たす爲めに日々勞働

しなければならぬ。此勞働に依て日々目前の必要に應ずることが精一杯の仕事であるならば、彼れは其以上には何事も出來ぬ筈である。然るに彼れに餘力があれば次の様にして小舟を造るとが出来る。其一は先づ日々の勞働の所産から幾日分かの食料其他の必要品を貯藏するのである。さて貯藏が出來たら、一切他事を放擲して小舟の製作に取り掛る。小舟の製作中に必需品の生産は中止される。其期間の生活は貯藏品に依て支へるのである。これは明に迂廻的と稱し得る方法である。此意味に於て學者が往々資本（此處では生産財の意味）の形成には先づ食料品の貯藏を必要とするといつたのは無論全部の真相を盡くしてはゐないが、全くの誤謬ではない。

併し必需品の貯藏がなくても小舟を造ることは出来る。それは何うするかといへば、クルウソオが日々の勞働時間の幾分を割いて小舟を製作するのである。これは從來よりも享樂用必需品の生産に従事する時間を短縮して、其の短縮した丈けを日々小舟の製作に充てることにしても出来るし、又享樂財の生産は從來通りにして、小舟の製作に充てる丈け日々勞働時間を延長しても好い。此場合は先づ生産財を造り、而る後其を用ゐて享樂財を作るといふのでなく、一方に享樂財を生産しつつ、他方で力を生産財の生産に割く次第であるから、時間の先後といふ意味では迂廻と言へぬかも知れないが、現在

在享樂財の生産に充て得べき生産力の一部を割いて差し當り享樂用に供し得ないものの生産に投ずるのであるから、其意味に於て迂廻してゐる。即ちクルウソオは此場合、彼れの生産力に依て生産し得る限りの享樂財を消費して居らぬ。換言すれば、彼れの享樂的消費は彼れの生産力の限度の手前に止まつてゐる。

彼れが前記の如き既に生産せられた食料其他を消費せずして先づ貯藏する場合には明かに享樂の延期が行はれてゐる次第であるが、日々其勞働時間の幾分を小舟の製作に割く場合に於ても亦た同様である。即ち享樂財の生産に充つべき時間の短縮せらるゝ場合には、當然それ丈け消費を削減せねばならぬ。勞働時間を延長する場合にはそれ丈け直ぐには酬ひられない勞働に従事したこと、即ち其丈け報酬の取得を待つたことになる。孤立人に就いて云つたことは社會經濟にも適用される。たゞ社會經濟に於ては先づ食料（其他享樂財）を生産貯藏し、次に其の貯藏品で生活を支へつゝ、其全生産財を生産財の生産に投用するといふことは殆ど行はれないで、一方享樂財の生産が行はれるのと相並んで生産財の生産が行はれるのが常である。但しクルウソオの場合だと彼れ一人の勞働時間を彼れ此れ配當するのであるが、分業の行はれる社會經濟に於ては、社會成員中の或者が享樂財の生産を掌り、他の

部分が生産財の生産に當るのである。但し生産財は獨り享樂財の生産に充用せらるゝのみならず、生産財其者の生産にも充用される（例へば機械の製造に用ゐらるゝ機械や原料）から、生産財の生産擔當者は、此の兩者の必要を満たさなければならぬことは注意を要する。而して此事は、交換經濟と共產經濟と其の何れに於ても變らない。無論社會成員の一部分が享樂財の代りに生産財の生産を專掌することは、結局に於て享樂財の生産額を増加せしむる結果を齎すのであるが、而かも從來の享樂財生産者と現有生産財の或者とを生産財の生産に移す其時に於ては、享樂財の生産は削減されるか、或は其増加を抑止されることは、クルウソオが小舟製作の爲めに「待忍」を行ふのと異なる所がない。例へば現在の勞農露西亞の政策である。前年來勞農政府は五個年計畫に於て、生産力殊に工業生産力の發展に努めてゐる。生産力の發展を期するには、先づ鐵道、發電所、トラクター其他生産財の生産に力を集注しなければならぬ。けれども限りある生産力を重に生産財の生産に集注すれば其丈け差し當つては享樂財の生産は延期されなければならぬ（將來に於ては享樂財が大に豊富になるとしても）。現在の露西亞民衆の生活状態が外見上頗る低く、食料も服裝も共に粗惡を極め、家屋や街路の甚だ不體裁を免れぬと傳へられるのは、無論一方では全體として生産力の未だ低度にあることにも因るが、他面に於

ては生産財生産の爲めに、享樂財の増加を餘り顧みてゐる邊がない爲めだと解して好からう。若し現在に於て食物や衣服を善美にし、都市の外觀を飾ることに努めるとしたならば、鐵道や發電所の建設はそれ丈け放棄しなければならぬ譯である。

生産財の生産に就いて述べた待忍の原理は更に他の幾多の場合にも適用される。リカアドオ以來度々引用された葡萄酒の貯藏及び植林の場合の如きもそれである。

葡萄酒を醸造して、更に幾年か之を窖の中に貯藏すると其味が一層芳醇となる。して見ると芳醇な葡萄酒を造る爲めには、其醸造に勞働其他を費すこと以外に更に幾年か其の既に醸造せられた酒を飲用せず放置することが必要である。他の點では同じ費用をかけたとしても新醸の酒は味が劣る。そこで若しも新醸の酒を飲み盡さねばならぬ程葡萄酒が缺乏するか、然らざるも、之を貯藏して置く丈けの忍耐に誰れもが當らなければ、良酒は得られない。茲に待忍を必要とする。植林の場合も同様である。植ゑ付けた苗木が數十年を経ると亨々たる巨木となつて有用の材となる。同じ費用を投じて植ゑ付けても、僅に數年の後に之を引抜くか伐採すれば殆ど何の役にも立たないものである。さうすると植ゑた苗木が有用の材となるかならぬかは、幾十年の間其成長を待つか待たぬかに由て岐れる。今費し

た勞力其他の犠牲に對して目前直ぐ報酬を收めなければ承知出來ぬといふ場合には、葡萄酒の貯藏も植林も行はれない譯である。それは人が迂廻的方法を選んで生産財を生産する場合と同じ原理の支配を受ける。

耐久的な家屋を建築する場合の如きも同様である。たゞ目前の近き將來に雨露を凌ぐといふ丈けに満足しないで、例へば五十年の居住に堪へる家屋を建築したりとせよ。無論耐久的な家屋は他の事情が變らなければ何等かの割合でそれ丈け多くの建築費を要するものと解して好い。さうすると人が耐久的な家屋を建てるか、或はどの程度の耐久家屋を建てるかといふことは、現在の犠牲と後日の便益との比較に由て決せられる。人が若し今働いた報酬は今直ちに收めなければ承知しないとすると、耐久的な家屋などを建築してゐる閑はない筈である。吾々が家屋によつて享受するものは居住の便益である。そこで若し現在受ける居住の便益に對してたゞ其丈けの代償をしか支拂はぬといふ事であれば、後日の便益に對して今豫め費用を投ずるといふことは行はれない筈である。現在の交換經濟下での事に就いて言ふと、住宅を建築する者或は購入する者と之を賃借するものとある。賃借する者は毎月の居住の便益に對して毎月家賃を支拂ふ。若し月極めでなくて日極めの借家といふものがあるならば、

日毎の便益に對して日毎に代償を支拂ふ。犠牲に對して直ぐ其全部の報償を受けねば承知出來ぬ者に取つては、これが最も好適の方法であらう。然るに之と違つて、住宅を自ら建築せしめるか、或は建築せられたものを購入するかといふ場合には、今直ぐ支拂ふ代金は、一部分は明日からの居住の便益に對するものであり、他の部分は、明後日、其次の日、更に次の日と、以下其家屋の使用に耐へる全期間に生ずべき便益に對するものである。若しそれが前述の通り五十年の使用に堪へるものであるならば、今日支拂ふ代金の或部分は五十年後、或部分は四十九年後、更に或部分は四十八年後等々の便益に對して豫め支拂はれるものである。これは家賃に就いて説明したが、家屋の賣買や賃借の行はれない世界に就いても其の理窟に變りはない。自分の住宅を自分の勞働に依て建築する場合にして考へても同じ事である。

待忍の事を説けば當然の順序として經濟財の耐久性の事を説かなければならぬ。財とは人間の欲望を充たすの用を爲すもの、即ち効用を有するものである。併し乍ら此の効用たるや大概永續的のものではない。財は其の財としての用途に充當せらるゝことに依て其効用を失ふことを常とする。たゞ其の之を失ふに遅速がある。先づ享樂財に就いて言ふ。たゞ一回の供用に依て其効用を失ふものがある。

る。幾度も繰返し同じ供用に堪へ得るものがある。食物や酒や烟草の如きは一回の供用に依て「消費」されて最早食物、酒、烟草としては用を爲さなくなる。反之、家屋や、家具や車馬衣服等々の如きものは之を欲望満足の用に充てゝも直ちに其効用は失はぬ。結局は失ふとしても、其迄繰り返し幾回かの使用に堪へる。これを消費財に對して使用財又は耐久財と呼んで好い。但しその耐久の程度は物に由て等しくない。家屋の如く幾十年の居住に堪へるものもあれば、麥稈帽の如く一夏毎に取り替へなければならぬものもある。或は用途の如何に由て同じ一つの物が消費財となつたり耐久財となつたりする。牝牛を乳牛として用ゐれば耐久財であるが、之を屠殺して食用に供すれば消費財となるが如きはこれである。

消費財にあつては財の「體」其者と其「用」とを分つことが出来ない。例へば葡萄酒を飲用すれば、葡萄酒其者は無くなつてしまふ。葡萄酒の「體」其者は其儘に保存して之を飲用するといふことは不可能である。葡萄酒の用途は飲まれることにあるが、飲まれるといふ其用を果たしつゝ葡萄酒其者を保存するといふことは出来ない。食物にしても煙草にしても消費財ならば皆な同様である。然るに耐久財になると其「體」以外に「用」が存する。例へば家屋の用は人を居住せしめることである。併し乍ら其用を

果たしつゝ一方家屋其者は大體依然として存在する。貸借の行はれる法制の下で此差別を考へて見れば能く分る。家屋ならば家屋其者は、其所有者のものであり乍ら其用丈けを居住者に賣る（即ち賃貸）といふことが出来る。同じ耐久財の中でも其耐久の程度の低いものは其丈け消費財に近づくから、體と用との區別も著しくなくなるが、而かも前記の麥稈帽子の如きものでも損料を取つて之を貸すことが全然考へられないことではない。然るに消費財では其が全く不可能である。葡萄酒を所有しつゝ之を他人に賃貸する、即ちたゞ其飲用の「用」だけを他人に賣却するといふことは到底出来ない相談である。

すると享樂財は凡て直接に吾々の欲望を充たすものであるが、消費財は財の「體」其者に依て之を充たし、耐久財は其「用」に依て之を満たすと謂つて好い。従つて使用財は當然財たるものであるが、此財の「用」或は益務（service, Dienst）も亦た之を財視して差支ない。交換經濟の下では、食物衣服車馬家屋等が賣買されるが、衣服車馬家屋の「用」も亦た同じく賣買される。即ち賃貸借と稱するものが是である。

此の差別は生産財にもある。生産財にも同じ形で二度以上反覆して生産上の役目を果たし得るも

のと然らざるものがある。例を綿織物に取る。最初は原綿が紡績工場で綿絲になる。綿絲が織物工場で綿織物となる。更に綿織物が裁縫されて完成品たる衣服になる。此道程上に於て原綿なり綿絲なり綿織物は、皆な何れも生産の用に供せられるが、而かも皆な二度と同じ形では使用されぬ。原綿は綿絲紡績工場で「消費」せられ、綿絲は織物工場で「消費」されてしまふのである。原綿が絲になれば最早原綿ではない。綿絲が織物になれば、最早綿絲ではない。小麦が穀粉となり、穀粉が麵包となるのも、礦石が銑鐵となり、銑鐵が鋼鐵となり、鋼鐵が何かの器具になるのも皆な同じである。

斯く或生産財が消費されつゝ（其形を變へつゝ）生産上の役目を果たす一方に、同じ形の儘で引續き生産上に使用されるものがある。機械、道具、建物、船舶、鐵道等がそれである。例へば紡績工場に就いていへば、原綿は絶へず一方から入り來つて、綿絲となつて他方から出て行くが、工場の建物や機械は同じものが引續き使用せられつゝ、其職分を果たすのである。經濟學者は屢々生産財の消耗の遲速に由て固定資本と流動資本とを分けた。前者は大體同じ形で繰り返して其用を爲し得るもの、後者は一回の使用に依て消耗するもの（茲に消耗といふのは必しも經濟財として全く消滅してしまふことではない。原綿は原綿としては消耗しても、其代り絲が残る。それは少しも妨げないのである）である。

る。姑らく其に倣つて生産財を流動生産財と固定生産財とに分ける。

固定及び流動生産財の別は又能動的所動的生産財、或は勞働用具と勞働對象の別だといつて好い。鋸で木を削つて机にするとする。木は變形して机になつた。併し鋸は依然として鋸である。鋸は働きかけ、木は其の働きを受ける位置に立つ。前者は生産の用具、後者は對象である。製紙機械を以てパルプに加工して紙を造る。パルプは所動、機械や道具は能動の立場にあることは誰が見ても明であらう。吾々は能動生産財を假りに勞働用具、所動生産財を原料又は材料と稱する。さうすると能動的生産財は既に機械や道具として完成せるもの、所動的生産財は例へば綿が結局衣服となり、木が家屋や椅子や机となつて終る如く、これから完成財となる其の道程上にあるものである。ところが其の機械や道具として既に完成せる勞働用具は何うして出來たかといふと、これが又例へば鐵材が軌道となり、又各種の機械となるやうに、其の夫々の原料に加工して造られたものである。さうすると原料といふものは皆な完成の途中にあるものであつて、而して其の完成の終點は、完成享樂財か、完成生産財（即ち勞働用具）かその何れかである。固より勞働用具と雖も生産上に使用されることに依て消費するから、勞働用具も結局は享樂財に變形すべき途中の階段にあるものだと謂へないこともないが、不

穩當である。木材が家になり、机になると同じ意味に於て鋸や鉋が家になり机になるといひ、鐵が軌道となり汽鐘車になると同じ意味に於て鐵道が生絲になる(繭を運送するから)、紙になる(バルブを運送するから)牛肉になる(生牛を運送するから)等々々といふのは非常識であらう。衣服は衣服として完成財である。書籍も靴も帽子も肌衣も皆な同様である。併し衣服其他を造るべき切れ地や紙や皮革などは、何れも原料又は半製品であつて、それに更に一段又は數段の加工が施されて始めて完成品となる。然るに鋸や鉋や鐵道は夫れ／＼何れも木や鐵を材料として造られた完成品であつて最早や其自身に對しては加工は施されない。其故これ等のものは何れも享樂財を生産する手段ではあるにしても、原料や半製品とは其趣を殊にして、其自身が既に完成財である。等しくこれ生産財であるが、勞働用具にあつては生産物が其を以て (with it) 生産せられ、原料にあつては其から (from or of it) 生産される。

繰り返していふが、人間(孤立人でも社會でも)の有する經濟財を觀察すると、之を享樂財と生産財とに別つことが出来る。享樂財は直接人間の欲望の充足に用ゐられ、生産財は享樂財生産の手段たることに依て間接に欲望の満足に貢獻する。享樂財を更に分つて消費財と使用財とする。消費財は物

其者に依て欲望満足の用を果たし、使用財は其の生ずる用又は益務に依て欲望を満たす。生産財も更に二つに大別することが出来る。固定生産財と流動生産財とである。固定生産財は流動生産財を變形して其完成に向はしめることに用ゐられる。流動生産財は皆な完成の途中にあるものであつて、其或部分は享樂財となつて終り、他の部分は固定生産財となつて終る。換言すれば、享樂財も固定生産財も何れも皆な一度は流動生産財の段階を經過して來たものである。

第八章 經濟的循環(一)

茲で人間經濟生活全體の姿を概観して見る。

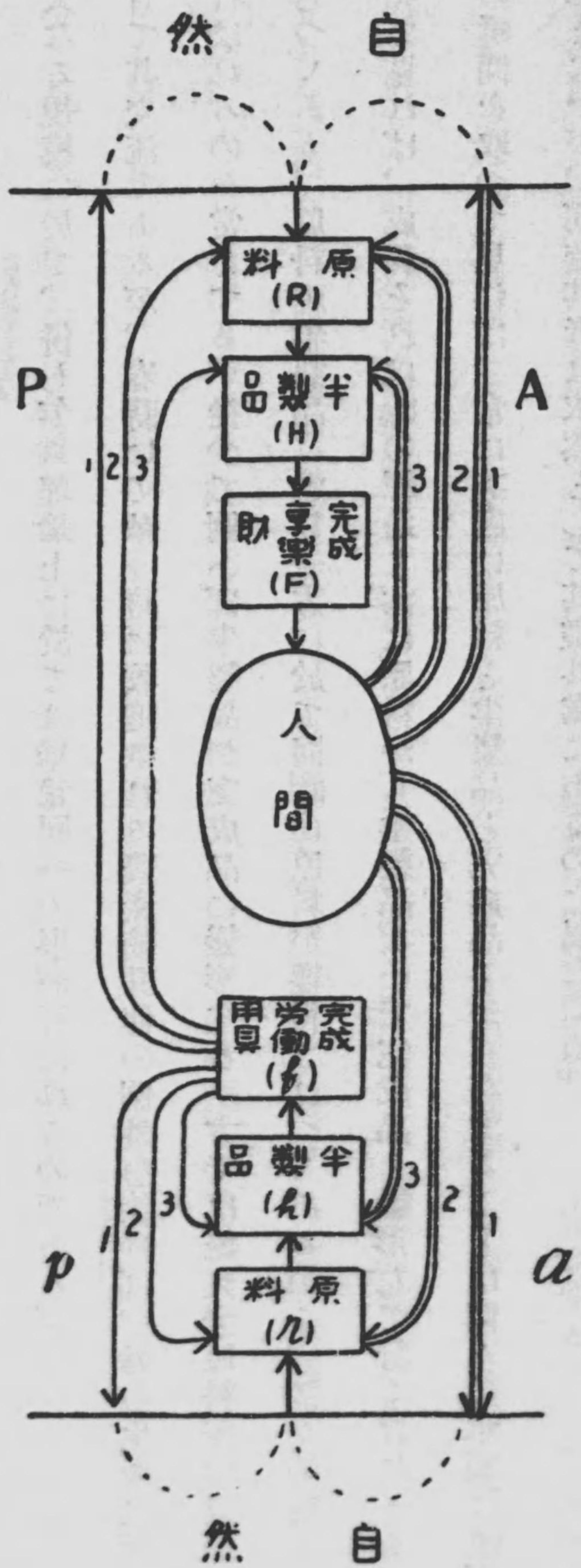
經濟生活は欲望を充たす爲めに營まれる。然るに此の欲望の満足は突然偶然的に行はるべきものでなくて、不斷連續的に行ふ用意を必要とする。假りに同じ程度の欲望満足を續けようとするれば、毎期間に消費せられた丈けの消費財と、耐久財の中、欲望充足の爲めに消磨する部分丈けを其期の中に補充しなければならぬ。その補充するといふ事は、畢竟流動生産財に加工して享樂財に完成せしめるといふ事である。然らば、流動生産財其者は何處から得られるかといふと結局自然から獲得される。人間は労働に依て(後述の如く、労働用具の助けを以て)自然から先づ原料を獲得し、これに加工を施し結局完成享樂財として欲望充足の用に充てるのである。その加工を施す程度と段階は種々様々である。我々の常食たる米の如きは耕作收穫せられてからあまり加工を経ずして食用に供せられるが、これが西洋人の麵包になると、小麦を製粉し更に之を麵包に焼くといふ過程を経なければならぬ。衣服

や住宅に至つては更に數多くの加工を要する次第であるが、極く大綱みに完成品は自然から原料として獲得せられ、原料が一度び加工されて半製品となり、半製品が更に加工を受けて完成品になるものと定める。原料を獲得するのが原生産(Rohproduktion)、完成品を造るのが製造(Fabrikation)而して其中間にあるのを假りに半製造又は半製品生産(Halbproduktion)と稱する。形容的にいへば、自然から人間に向つて一條の河の如く流動生産財が流れ来る。その流れが幾つかの堰を通過して、原料は半製品となり、半製品は完成享樂財として人間に到達するのである。併し此の財の河流は自動的に流るのではなくて、人間が労働に依つて之を導き来る。労働は先づ自然に加へられ、次で原料に、次で半製品に加へられ、斯くして財の流れは一の堰から次の堰へと進むのである。

併し人間がたゞ徒手空拳を以て労働を自然に加へるといふことは、今日では先づない。大概の場合には機械とか道具とかいふ労働用具に依て助けられるのが常である。その原料に加へられ、半製品に加へられる場合も同様である。ところが労働用具も亦た使用中に晩かれ早かれ消耗する。従つて現在程度の生産を維持しようとするには、常に社會成員の或部分が消耗せられた丈けの労働用具を補充することに従事しなければならぬ。孤立人の場合ならば労働時間の一定割合を之に割かなければならぬ。

補充するといふことは、享樂財の場合と同じく、流動生産財に加工して之を勞働用具に完成せしめることである。従つて完成勞働用具も亦た原料、半製品、製造品といふ階段を経て結局自然から獲得されることは享樂財の場合と同じである。即ち自然から人間に向つては二條の財の流れが走る次第である。一條は享樂財として終り一條は勞働用具として終る。一は享樂生産部門、一は勞働用具生産部門である。前者の完成生産物は欲望充足の用に供せられるから、眞儘生産行程から脱出する。後者の完成生産物は勞働を助ける爲めに生産の各部門、各種、各段階に割り當てられて使用される。従つて此の方の流れは直接人間に到達しないで、享樂財生産部門の各段階に使用されることに依て間接に到達する。然るに勞働用具は獨り享樂財生産各段階に使用されるのみならず、勞働用具其者の生産の各段階にも使用される(採鑛、製鐵又は機械の製造其者に機械が使用される)から、前記の如く川の流に譬へていへば、勞働用具生産部門の流れの方は、一部分は此部門の最終段階と他の諸段階との間を環流することになる譯である。甚だ不完全ながら此有様を圖にして示せば左の如くである(單線は財、複線は勞働の流動方向を示す)。之を説明すれば、人間は一定期間、例へば一年内に一定量の完成享樂財を得て其欲望を充足する。此の欲望満足を持続的に行ふには、一切生産財(一切の原料、半製品及び完成勞働用具)

の生産を同一の水準に維持しなければならぬ。これが爲めには、彼れは一方に於て其勞働の或部分を、



末は享樂財となるべき原料の獲得、原料の半製品への仕上げ、半製品の完成享樂財への仕上げに分ち投入すると同時に、他方其勞働の他の部分を、末は勞働用具となるべき原料の獲得、其原料の半製品への仕上げ、半製品の完成勞働用具への仕上げに分ち投入しなければならぬ。その何れをする場合にも勞働は勞働用具の助けを受けるのを常則とする。その勞働用具は何處から來るかといへば、勞働用具生

産部門の最終段階で完成するものからである。此の完成生産物が人間労働と同じく二つの大きい流れに別れて、一は享樂財として完成すべき原料の獲得、原料の加工、半製品の加工に、他は労働用具其自身として完成すべき原料の獲得、其加工、半製品の加工に、何れも分ち充當されるのである。如き人間と自然との間に於ける労働と財との交流、又或部分に於ける生産財の環流、これが人間經濟の生活の略圖であつて、クルウソオの如き孤立人の經濟では極小の規模に於て、近世の社會經濟では絶大なる規模に於て、併し乍ら理論上に於ては畢竟同一の事が行はれるのである。

さて其交流であるが、春蒔いて秋一時に收穫される農産物其他の例外を除けば、財の生産は斷續なく行はれるのを常とする。従つて例へば半製品が完成品に變形する一方では絶えず原料が半製品に變形しつゝあり、原料が半製品に進む一方に於て同時に原料が獲得されつゝあるから、個々の特定物に就いて見れば、成程それは時の経過と共に原料から半製品次いで完成品と變形して行くけれども、一定の瞬間を取つて見れば、常に其處に原料と半製品と完成品とが存在することは個々の水滴は流下して息まないが、河流其者は依然として其儘其處にあるのに異ならぬ。

ところで生産は時間を要するから、一定の期間内に獲得せられた原料は何個月か（或は何年か）後

に至つて半製品となり、更に何個月か立つて完成品となる。假りにその各々の段階の経過に四個月を要するものとすれば、原料は採取せられてから享樂財又は労働用具として完成する迄に一年を要する。そこで一定の期間に於て半製品として製造者の手に渡るものは四個月以前に自然から獲得されたものであり、同じ期間に完成品として製造者の手を離れるものは同じく四個月前に半製品となつたものである。然るに、原料が半製品に進み、半製品が完成品に進むと同時に、直ぐ其跡へは原料、半製品が入つて先行者に代り、其の代つて位置を占めたものが又其次の者に依て代られる。今假定の如く四個月の経過と共に自然から完成状態へ向つての生産段階を一段上る其有様を表にして示せば上の如くなる。（此表 *Table* に學ぶ所多し）

R は原料 H は半製品 F は完成財を示すものとする。而して R が H になり、H が F となるには前記の如く各々四個月を要するといふ假定であつて、その四個月といふ時間は横に測られるものとする。さうすると R₁ が四個月かゝつて H₁ になり、更に四個月かゝつて F₁ になる。然るに H₁ が造られつゝある時には同時に R₂ が獲得せられつゝある。更に H₁ が R₂ になりつゝある時には一方で R₂ が H₂ になり、且つ新に R₃ が獲得せられつゝある。以下之に準ずる。今

F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆
H ₁	H ₂	H ₃	H ₄	H ₅	H ₆
R ₁	R ₂	R ₃	R ₄	R ₅	R ₆

月かゝつて F₁ になる。然るに H₁ が造られつゝある時には同時に R₂ が獲得せられつゝある。更に H₁ が R₂ になりつゝある時には一方で R₂ が H₂ になり、且つ新に R₃ が獲得せられつゝある。以下之に準ずる。今

此符號を左から右上へ斜めに讀めば、特定財の完成行程の行衛を辿ることになるが、之を縦に讀むこと例へば $F_1 H_2 R_3$ 又は $F_2 H_3 R_4$ の如くすれば、それは或期間（四個月）内に生産せられつゝある完成財、半製品、原料を示し、 $F_1 + F_2 + F_3$ は一年内に於ける完成財の生産額を示す。そこで年々の享樂財生産高を同一の水準に保つといふことは $F_1 + F_2 + F_3$ と $H_1 + H_2 + H_3$ とを相等しからしめるといふ事であるが、これを相等しからしめるには $H_1 H_2 H_3$ と $H_4 H_5 H_6$ 、 $R_1 R_2 R_3$ と $R_4 R_5 R_6$ とが等しくなくてはならぬ。若しさうすれば $F_1 H_1 R_1$ の關係と $F_2 H_2 R_2$ 關係とは相等しい、即ち符號を縦に讀んでも或は前記の如く斜めに讀んでも何れにしても變りはないといふことになる。といふことは、一定の期間（四個月）内に生産せらるゝ原料、半製品の量は宛も其期間内に於ける完成財の製造を維持するに足る數量に等しいといふことになる。

これは享樂財の生産に就いて云つた事であるが、勞働用具（固定生産財）の生産でも同じことである。今 f, h, r を以て勞働用具生産の原料半製品完成財を示すことゝすると、年々同一量の享樂財を生産し續けて行く爲めには、年々消費した丈の勞働用具が丁度補充されねばならぬ。（固定生産財の年々の消費額は其現存量を其耐用年數で除した商である。年々に建築せられた百棟の家屋があり、

其の耐用年數は各五十年であるとするれば、年々腐朽に歸するものは二棟である。従つて年々二棟の家屋を建築し續けて行けば現在の百棟といふ數を維持することが出来る。二棟以上を建築すれば棟數は百戸以上に増し、二棟以下ならば百棟以下に減少することは當然である。補充するといふことは消費した丈の勞働用具を年々生産することであるが、その生産も享樂財の場合と同じやうに原料の獲得に始まつて、半製品、完成財に進むといふ順序で行はれる。而して各階段の経過に要する時間をこれ

も同じく四ヶ月とすると、前記のものと同様の表を作成することが出来る。

今此の二つの表を重ねると左の如くなる。

	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5	F_6
H_1	H_2	H_3	H_4	H_5	H_6	H_7
R_1	R_2	R_3	R_4	R_5	R_6	R_7
	f_1	f_2	f_3	f_4	f_5	f_6
	h_1	h_2	h_3	h_4	h_5	h_7
	r_1	r_2	r_3	r_4	r_5	r_7

此縦線で劃された中の符號が此一年内に生産せられた、一切の財を示す。此一年内にどれ丈の財が完成するかを見るに享樂財 $F_1 + F_2 + F_3$ と勞働用具 $f_1 + f_2 + f_3$ である。此中の $F_1 + F_2 + F_3$ は消費者の手に渡つてた勞働用具の補充に充てられてしまふ。 $f_1 + f_2 + f_3$ の方は其の年の内に消耗した勞働用具の補充に充てられる。然るに勞働用具は常に末は享樂財の完

成に終るべき諸生産段階(D、H、R)に使用せらるゝのみならず、労働用具の完成に終るべき諸段階(f、h、r)にも使用せられ、従つて其處で消耗されるから、一切の生産を同一の規模で反覆する爲めには、或時期に生産せられるrはhを、又hはfを丁度維持するに足る數量のものでなくてはならぬ。換言すれば、丁度或時期に生産せらるる労働用具を送る丈の半製品、丁度その半製品を造る丈の原料が同時に生産されなくてはならぬと同時に生産されたfは其の同じ時期にF、H、R、f、h、rで消耗された労働用具と丁度相等しきものでなくてはならぬ。若しも此期間にそれ丈のfが生産せられなかつたならば、次期の生産に供用せらるべき固定生産財は前期よりも不足を告げ、従つて、他の事情にして變らざる限り、FもHもRもhもrも、否なf其自身の生産額もそれ丈減少しなければならぬ譯である。

斯の如く或時期内に生産せられたfが宛も其時期に於ける生産の一切部門、一切段階に於ける消耗労働用具を補充するに足り、他面該期間内に生産せらる原料及び半製品の數量は、丁度該期間に完成する享樂財及び労働用具を生産するに足る丈け(或は生産するに必要な丈け)のものが生産されるとすると、斯る條件の具備した場合には該期間に生産せられた完成享樂財は其期に於ける經濟財の純増

加分を成す。これは之を如何に處分しても次年度の生産には毫も影響する所なきもので、次の年度は此年度と同じ生産財と同じ耐久的享樂財の準備を以て發足し得る。斯く一定期間に生じた財の純増加にして期の發端に於ける既存の財を毫も減損することなしに任意處分し得る部分を稱して孤立人ならば彼一人の、社會ならば其社會の所得といふ。別言すれば、所得とは持續的生產過程上に於て、既存の生産財を補充して猶ほ其以上に生産せられたるものをいふ。たゞ交換經濟の下に於ては一定期間に一經濟主體に歸屬する貨幣額で、同じく既存の財を減損することなしに任意に處分し得るものを所得と稱するの常であるから、それに對して之を實物所得と呼んでも好い。

既存の財を毫も減損することなしに云々といふことは、既存の財を減損する場合と比較すれば直ぐに分る。例へば春種子を蒔いて秋に收穫する。さうして其收穫を全部食ひ盡して仕舞へば翌年は播種が出来ぬ。今年度の始めに持つてゐた種穀を來年度は持たないことになる譯であるから、「次年度の生産には毫も影響する所なく」處分し得るのは、姑らく農具肥料其他を度外して考へても、收穫の全部ではない。又クルッソオが其労働時間を分けて、其の何分一かで短舟や漁網や農具や銃器などの製作修繕を行ひ、残る何分一かを漁獵、耕作其他享樂財の獲得に宛てたものとする。彼れが其生活の現狀

を永く維持して行く爲めには、一年中の一定時間を労働用具の補充に充てなければならぬ。而して此の補充に充てる其れ丈け彼れの享樂財獲得の時間は削減される譯である。併し彼れが一時其享樂財の供給をより豊富ならしめようとすれば、其は決して不可能ではない。其の労働用具の修繕補充を怠つて、從來これに捧げられた時間を享樂財の獲得に振り向ければ好いのである。例へば短舟や漁具の修繕に宛てられてゐた時間も漁撈其事に宛てれば、たしかに一時漁獲物を増すことは出来る。けれども其代り舟や漁具は前年に比して損傷してゐるから、其場合の漁獲物全部が彼れの純利得を成すとは謂はれない。前に述べた、既存の生産財を補充して更に其以上に生産せられたるものといふには該當しない。即ち漁獲された魚の一部分は既存生産財の或部分を犠牲にすることに依て得られたもので、謂はゞ一種の賣り喰の狀態に陥つてゐるのであるから、此狀態を何時まで續けるといふことは不可能である。即ち一時漁獲量を増すといふことは將來それを減少せしめる所以となる。前に言つた既存の財を毫も減損することなしに云々といふのは斯ういふ意味である。

資本といふ言葉は、始め貸附の利子に對する元金の意味に用ゐられるにもせよ、或は企業の元金の意味に用ゐられたるにもせよ、何れも私經濟の見地からして、經濟主體に貨幣所得を齎す元本の意味

に解せられたものと見受けられるから特定の社會制度と切り離して人間の經濟生活一般に就て此言葉を適用するには異論のあることを免れないだらうが、併し右の意味に解せられた資本に取つて本質的な一の特徴は何であるかといふと、其自體を減損することなしに所得を生むといふことである。ところで前段に述べたやうに、既存の生産財を補充して猶ほ其上に生産せられたものを所得なりとすれば、此所得と生産財との關係は、私經濟の見地から見た貨幣所得と資本との關係と頗る相似たものがある。其故に學者或は生産財を資本と稱し、固定生産財と流動生産財とを呼ぶに固定資本、流動資本を以てして之を所得と相對せしめることがあるのは全く故なきことではない。

第九章 經濟的循環(二)

上述の如く、一切の生産を同一の規模で反覆して行く爲めには生産財を二つの部分に分けて、其一方を既存の生産財の補充に充て、他の一方を以て直接享樂用の諸物を生産することになければならぬ。此割當て如何に由て、若しも既存生産財の補充に必要な丈けの生産財が其に割り當てられないと、生産現狀を維持することが出来なくなる。前述のクルウソオが短舟や漁具の修繕を怠る場合は其の最も簡単な例證であるが、複雑大規模な現今の交換經濟に就いて見ても其道理に變りはないのである。例へば戰時に軍需品の製造に忙しくて工場や機械や船舶を虐使して其修繕補充を顧みるに遑がないといふやうな場合にも同様の結果が起る。若し其儘で續けて行けば、やがて完成享樂財の生産額も減少しなければならぬのである。

ところで反對に、年々の生産額が漸次に増大して行く場合には何うなるか。生産額が増進して行くといふことは完成享樂財の產出量、即ち前記の表に於けるFが $F_1 \wedge F_2 \wedge F_3 \dots$ といふやうに増大して行

くことである。然るに完成品を作るには先づ半製品がなくてはならぬ。延いて完成品の増加の前には半製品の増加がなくてはならぬ。同様に半製品の産額を増すには先づ原料の増加がなくてはならぬ。例へば原棉の増加があつて始めて綿絲の産額を増すことが出来、綿絲の増加を俟つて始めて綿織物の製造高を増すことが出来る道理である。其處で $H_1 \wedge H_2 \wedge H_3 \dots$ とする爲めにはHを $H_1 \wedge H_2 \wedge H_3 \dots$ といふ風に増さなければならず、然かするには更にRを $R_1 \wedge R_2 \wedge R_3 \dots$ としなければならぬ。

生産が同一の規模で反覆される場合には、 $R_1 \wedge R_2 \wedge R_3 \dots$ 、 $H_1 \wedge H_2 \wedge H_3 \dots$ 、 $F_1 \wedge F_2 \wedge F_3 \dots$ であるから、R、H、Fを下から斜めに讀んでも縦てに直上に讀んでも變りがないことは前記の通りであるが、今の場合ではそれが同じでない。一定の期間を取つて見れば、其期間に生産せらるる原料(例へば R_1)は必ずその同じ期間内に於ける半製品(即ち H_1)の生産に要せらるるものよりも多量、又半製品は同じ期間内に於ける完成品(即ち F_1)の生産に要せらるるものよりも多量でなければならぬ。即ち引續き F_1 丈けの享樂財を獲得する爲めからいへば、必要上の半製品と原料とが生産されてあるといふことになる。而して生産の増加は固より費用の増加を必要とする。姑らく勞働丈けに就いて見ても、其期間に於ける欲望満足を贏ち得る必要よりもより以上の勞働が費される譯である。従つて若しも現在通り

の欲望満足(例へばF₁の消費)を續けるだけで好いといふことならば、H₁、H₂及びR₁、R₂の爲めに費されただけの労働は之を省いて差支ないのである。即ち同一規模の生産が反覆されるところと生産の發展があるところとを比較すれば、一定同一期間内に生産せらるゝ一定量の完成財と半製品、及び原料との數量的關係が等しくない。發展のあるところでは靜止の状態に比して、比較的より多くの半製品、更により多くの原料が生産されつゝある。といふ事は、それだけ其時の生産財が直接現在に欲望充足の用をなさざるものの生産に投せられてゐるといふこと、即ちそれだけの待忍が行はれてゐるといふ事である。

以上姑らく労働用具の増加を度外して議論を進めたが、完成享樂財、半製品原料の増加が労働用具の増加を俟たずに行はれるといふことは、今日では殆ど有り得ぬといつても好い。そこで再び労働用具の増加と享樂財の増加との關係を考へて見なければならぬ。

生産の増加は人口の増加と密接の關係を持つてゐる。人口の増加は一方に於て消費者の増加、他方に於て生産者の増加を意味する。そこで増加して行く人口の生活水準を舊の程度に維持して行く爲めには、人口増加と同じ割合で生産額を増さなければならぬ。宛も好し人口の増加は他面に於て労働力の

増加を意味してゐる。たゞ併し乍ら労働力の増加と共に生産額を増加せしむるには、其に相當する労働用具(機械道具)の増加がなければならぬ。機械や道具の數量は以前通りであつて、たゞ労働力のみが増加したのでは、労働の効力は減殺せられなければならぬ。従つて増加する人口はその始めの程度の生活を維持することが出来ない。故に生産の増加を人口の増加に伴はせる爲めには、少なくとも労働用具の増加を人口増加に伴はせなければならぬ。これは増加する人口各員をして其の現在通りの生活水準を維持せしめるものとしての話である。ところが嘗に人口各員の生活水準を現在通り維持する許りでなくて更に其以上に高める場合は何うであるか。これは人口が増加し、而かも生産高は更に其以上の速度を以て増加するのでも好いし、人口は不變の儘であつて而かも生産高の増加するのであつても好いが、簡單の爲め後の場合に就いて考察する。

何れにして是等の場合には労働の一定單位が産出する生産物量が、即ち労働の生産力が増加しなければならぬ。而して之を増加せしめることは、姑らく分業の發達を度外すれば、重に労働用具の増加に俟たなければならぬ。然らば労働用具の増加は如何にして行はれるか。

労働用具も亦た完成生産物であつて、原料、半製品、完成財といふ段階を経て生産されることは享

樂財と變りがない。そこで勞働用具の生産高を増す爲めには、先づ加工すべき半製品を増さなければならぬ。半製品を増すには更に先づ原料を増さなければならぬ。便宜の爲め姑らく機械を勞働用具の代表物として説明するが、其の機械の製造には先づ半製品たる鐵銅材其他のものがなくてはならぬ。鐵材銅材其他を得るには、鐵鑛銅鑛其他がなくてはならぬ。即ち機械の製造高を増すには鐵鑛銅鑛其他の採掘を増し、次で鐵材銅材の產出高を増すといふ順序を取らなければならぬ。而して或期間より次の期間、次の期間より更に其次の期間と漸次機械製造高の増されて行く状態に就いて見れば、半製品たる鐵材銅材等も、又原料たる鐵鑛銅鑛等の產出高も、大體同じ割合で増して行くものと見て好いから、再び前記の表を取り出して見れば、茲でも r h f を斜に右上へ讀むのと下から直上へ讀むとは違つて來る。即ち或一定期間に就いて云ふと、其期間内に完成すべき機械の爲めに必要な以上の鐵銅材が生産せられ、又其丈の鐵銅材を造る爲めに必要な以上の鐵銅鑛が採掘されつゝあるといふことになる。

さて斯様に機械製造高を増すことは如何にして行はれるかといふに、第一に機械製造其者、及び之に先行する生産諸段階（勞働用具生産部門）に従事する人と勞働用具の數量を増さなければならぬ。

其増員は之を何處に仰ぐかといふと、結局之を享樂財の製造及び之に先行する生産諸段階（享樂財生産部門）の従業者から割かなければならぬ。例へば農民の一部を鑛山業に移らしめ、或は織物業紡績業従事者が製鐵業又は機械製造業に移されるといふやうな事が其れである。

併し此事は表面「轉業」といふ形を取らないでも、生産物の用途轉換によつても行はれる。即ち從來享樂財製造に充用する爲めに生産せられたその同じ原料や半製品を勞働用具製造の方へ振り替へるのである。例へば鐵材である。鐵材の用途は極めて廣い。それは無論機械や道具の材料として用ゐられるが、併し又同時に許多の享樂財の材料としても用ゐられる。それは住宅の建築材料にもなれば、又工場の建築材料にもなる。遊乗用自動車の材料にもなればトラックの材料にもなる。その鐵材を必要に応じて一の用途から他の用途へ移せば、鐵材の生産従事者は其專掌を變へないでも、事實上の結果に於て、人が享樂財生産部門から勞働用具生産部門へ移されたことになるのである。但し此場合に獨り従業者のみならず、従業者と共に勞働用具も轉用されることになる。無論これは鐵材に限つたことではない。同様の例を挙げればいくらかでも數へることが出来るであらう。同じことは又既設生産設備の用途轉換に依ても行はれる。即ち從來享樂財の製造に充てられたか、或は享樂財と勞働用具との

何れをも製造し得べき設備を勞働用具製造の方へ向ける。例へば從來遊乗用自動車の製造に充てられた工場を其儘か或は若干の設備變更を行つてトラック製造工場にするとか、造船所が遊船の代りに荷物船を建造するとかいふ類の事がそれである。此方も類例を挙げたら一々數へられぬ位數多くあるであらう。兎に角此場合にも表面轉業の形を取らずに人的生産力と物的生産力とが共に享樂財部門から勞働用具部門へ移されたことになる。自動車職工は自動車職工たることを失はず、自動車製造の機械道具はそれなることを失はずに勞働用具の生産に移り、造船工造船機械も亦た各々

夫れなることを失はずに同じ轉換を果たす結果となる。

そこで再び前記の表に就て見よう。

f_1 は或一期に生産せられた完成勞働用具である。

同一規模の生産が反覆されるところでは、此の f_1 が $F_1, H_2, R_3, f_1, h_2, r_3$ の諸部門諸段階に於て消耗した勞働用具を丁度補充する。 f_2, f_1 其他の F_2 以下 F_7 以

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
"	"	F_1	F_2	F_3	F_4	F_5	F_6	F_7
"	"	H_1	H_2	H_3	H_4	H_5	H_6	H_7
R_1	R_2	R_3	R_4	R_5	R_6	R_7	"	"
"	"	"	"	"	"	"	"	"
"	"	f_1	f_2	f_3	f_4	f_5	f_6	f_7
"	"	h_1	h_2	h_3	h_4	h_5	h_6	h_7
r_1	r_2	r_3	r_4	r_5	r_6	r_7	"	"

下其他に於けるも亦た同様である。そこでIII (f_1, h_2, r_3)の一期から出發して勞働用具の製造高を増すことにしたら何うなるかといふに直ちに、次期から機械の製造高を増して「V」とすることは、表の下半部丈けに就いて言へば不可能である。 F_1, H_2 であるから、 f_1 以上のものを製造する丈けの材料(半製品)が其時には未だない筈である。強いて其をするには、享樂財の製造に充てらるべかりし材料の用途を轉換し、即ち F_1 に H_2 の一部分又は全部を加へて f_2 の製造高を増すより外はない。(但しこれは材料の用途轉換が可能であるものに就いての話であつて、必しも常に其が行はれ得るものではないことは勿論である。)併しそれを行へば H_2 を材料として製造さるべき次期の享樂財産出額即ち F_3 は當然減少しなければならぬ。同時に次期の完成勞働用具 f_3 を増す爲めの材料として半製品 h_3 を豫め用意することが出来る。それは享樂財の原料として其前期に生産せられた R_3 を轉用して h_3 に仕上げるのである。併しそれをすれば第V期に於て仕上げらるべき完成の享樂財 F_5 の數量が減少すべきことは覺悟しなければならぬ。

但しこれは一時の應急策で、尋常の方法は先づ勞働用具にすべき原料の獲得を増し、次で加工して半製品の産額を増し、而る後これを勞働用具に仕上げるのである。而して此事は表では第IV期から着

手される。即ち r_4 は r_5 よりも多量に獲得される。其次の期Vには r_4 の許す限りの h_4 を造り、更にそれを第IV期には完成用具 f_4 に仕上げることが出来る。同様にして第V期には r_4 よりも多量の r_5 、第IV期には r_5 よりも多量の r_6 を造り（以下準之）この益々増加する原料からして夫々前期に於けるよりも多量なる半製品（ h_5, h_6, \dots ）、更に其の半製品から益々増加する完成品（ f_5, f_6, \dots ）が造られるのである。併し此の労働用具たるべき原料半製品及び完成品の生産高を増すには、差し、當り従來の労働と労働用具とでは不充分である。その足りないものは夫々上段のF、H、R部門から割いて來なければならぬ。それを割けば又、當り其時期のF、次期のF、更に其次期のFの産出額が減少しなければならぬ。即ち一時享樂財又はその原料半製品の生産を犠牲にして労働用具の生産を増加せしめるのである。

労働用具の生産高が増せば、労働用具の消耗速度が不變なる以上、生産高の増加と同じ割合を以て労働用具の在量も増加する。さて此の増加した労働用具を何う用ゐるか。其用途が二つある。之を享樂財の生産に充用すると、更に労働用具其者の生産に充用するのである。何れの用途に用ゐても、夫々の労働生産力は増進するものと見て好い。

従つて享樂財の生産に、増加した丈の労働用具を悉く投用すれば享樂財生産額は増加する。即ち享

樂財の生産に直接従事する者の數は減少したが、其の減少せる生産者は新たに豊富な労働用具を用ゐて生産を行ふから、人數の減少にも拘らず、享樂財の産出高は一旦減少したものが又増加する。それがどの程度迄増加するかは事實問題で、享樂財部門の人數削減の程度にも由るから一概には言へないが、若し労働用具製造が享樂財の獲得を豊富ならしむる目的を以て行はれるものとすれば、享樂財生産の従事者を労働用具生産に割くことに依て究局當初に比して享樂財の獲得を増し得るのでなければ其をすることは無意味である。即ち享樂財生産に従事する者の或部分を割いて之を労働用具生産の部門に移らしめるといふことは、其に由て結局以前よりも享樂財の生産高を増し得る場合に限つて行はるゝものとしなければならぬ。

然らば前の場合と違つて、増加した労働用具を擧げて之を労働用具其者の生産に投じたならば何うなるか。此場合には享樂財の生産は少しも増加しない。即ち減少した儘の従事者が減少した儘の労働用具で生産するのであるから、其生産高はこれ亦た同じく舊の儘である。ところが労働用具の生産高は増加する。それは既に労働用具の生産者が増大することに依て其生産高は増すのであるが、更に其の増加した労働用具を更に労働用具の生産其者に投するのであるから、労働用具の製造高は其生産従

事者の増加よりも更に大なる割合を以て増加する譯である。而して其の又増加した労働用具を更に又労働用具の生産に投じ、斯くして同じ手續を繰り返して行けば、享樂財の生産高は一向増減しないで獨り労働用具のみ際限なく増加する。これが他方の極端である。

前の場合には労働用具の生産高、従つて其存在量は一定の限度迄増加する。労働用具の増加に依つて延いて享樂財の生産額が増加する。併し労働用具の増加が一定の限度に止まるから、享樂財の生産増加も亦た或點で停止する。是以上更に享樂財の生産を増加せしめようとするれば、更に享樂財生産の直接従事者を労働用具部門の爲めに割き、其の再び増加するを俟つて更に之を享樂財の生産に充用するより外に途はない。

後の場合、即ち増加した丈の労働用具を悉く労働用具の生産に投用する場合には、労働用具存在量は愈々増大しながら享樂財の産額は全く増加しない。けれども若しも労働用具生産の目的が結局に於ける享樂財の獲得であることが生産當事者の意識にある以上は、(但し交換經濟の下に於ては此意識が失はれ、労働用具生産者は其生産物が果して究局享樂財の生産に充用せらるゝか否かを問はず、たゞ賣れるから造つて賣るといふ場合の起ることは注意を要する。但しそれは異常の程度に所得の節約の

行はれた場合の事である。)享樂財の生産に關係なく、直接欲望充足の用には供し得られぬ労働用具の量を無限に續けて益々多量に生産するといふことは考へられぬ。然りとすれば、増加した労働用具を更に労働用具其者の生産に振り向けるといふことは、何れ早晚其の造られた生産用具を享樂財の生産に充用して以て享樂財の豊富なる供給を圖る爲めだとしなくてはならぬ。

さて其れを何の點とするか。増加した労働用具を更に労働用具の其以上の増加の爲めに投ずるといふことを少し繰り返して止むか、或は度々繰り返して然る後始めて享樂財の生産に向ふかは、一に當事者が近き將來の欲望満足と遠き將來の夫れとを何れの程度で輕重するかといふことに由て定まる。近き將來の満足を求めることが痛切であれば、労働用具を増して其の労働用具で更に労働用具を増して、而して遠き將來に於て大なる欲望満足の得らるべきことを待忍するに耐へぬであらう。

或は又増加した労働用具の一部分を享樂財生産に振り向け、残る部分を更に労働用具増加の爲めに投じて、享樂財の生産を増加せしめらる旁ら労働用具の増加をも圖るといふ中間の方法も行はれ得る。併しその何れの場合に於ても、問題を決するものが近き將來と遠き將來に於ける欲望満足の取捨輕重であることに變りはない。

以上説明した所に由てこれだけの事が分かる。同一規模の生産を反覆しないで、享樂財の生産額を増加せしめる爲めには、労働用具の生産を増加せしめねばならぬ。此事は先づ享樂財の生産を一時犠牲にして、其生産に充用されてゐた生産力を労働用具の生産に割くことに依て行はれる。併し享樂財の生産を年一年と益々増大せしめて行く爲めには、先づ労働用具の生産高を年一年増加せしめねばならぬ。併しそれをするには益々多くの生産従事者を享樂財部門から労働用具部門へ移すことをするか、然らずんば、増加した労働用具を享樂財の生産に充用しないで、其の全部又は一部を更に労働用具の増加其事の爲めに充用するか何れにかしなればならぬ。何れにしても、労働用具の増加は其時の生産力を以て生産し得る限りの享樂財を生産せず、其生産額を其時の生産力が許す限度の手前に止めて、其代り直接欲望充足の用に充てることの出来ない労働用具を造るといふことに依て行はれる。

假りに上記の表に於て、労働用具の生産増加は第IV期の r_4 （労働用具の原料）の獲得から出發するものとする、 r_4 が h_4 となり、 h_4 が f_4 となつて労働用具が完成する。併しこれをする爲めにはIV V VI期に於けるFHRの何れかの幾分かは犠牲にされなければならぬ。而して假りに増加した労働用具の全部が享樂財生産に利用されると、それが次の第VII期の原料(R_7)獲得の増加を來たし、次で半製品

(H_7) 完成品(F_7)の仕上げとなる。さうすると享樂財の生産額は第IV乃至第VII期の間は労働用具生産の爲めに減少し、第IXの F_9 に至つて始めて増加する。但し其増加が果して第III期の F_3 以上に出るか否か、或は出ても何の程度に及ぶかは、一概に斷言し難い。併し兎も角労働用具の生産を増加せしめる爲めには、享樂財又は其原料半製品の生産を一部分犠牲に供さねばならず、而して着手した労働用具の生産増加が享樂財の増加といふ結局の効果を擧げる迄には少くも五期間の経過を必要とする。而かもこれは労働用具の耐久性を姑らく度外しての事であつて、若し耐久性を顧慮すれば時間は當然更に長くなる。何となれば上の場合に、成程労働用具の生産に着手してからそれが完成する迄には五期を経過する丈けであらうが、完成した用具が消磨する迄には更に長く、或は更に非常に長い時間を要するからである。若し労働用具の生産増加といふことに其を用ゐず、其時の生産力の許す限りを享樂財の生産に向けたならば、其時期の享樂財産額は當然より大なるものであり得た筈である。

増加した労働用具を更に労働用具の生産に充當する場合を考へて見ると、増加すべき労働用具は、に至つて完成するのであるから、其が更に労働用具の生産に投用されるのは第VII期以下の事ではなくてはならぬ。その第VII期で原料の獲得を増し(r_7)其が労働用具として完成するのが第IX期(f_9)、其時

に至つて始めて増加した用具が享樂財の生産に投じられるとすると、其は表には見えぬが R_{10} の量を増し、終に第XII期の F_{10} に至つて享樂財の増加なる結果を齎す。さうすると始め勞働用具の増加に着手してから其が享樂財の増加となつて現れる迄には彼表で少くも八期間の経過を必要とし、此期間は一時享樂財の減少を甘受しなければならぬのである。此場合勞働用具 f_1 も f_7 も共に同一量勞働を以て生産されるにも拘らず、後者はより豊富なる勞働用具の援けを以て生産されるから其數量は其者に優るのが常である。従つて R_{10} 、 H_{10} 、 F_{10} は R_7 、 H_7 、 F_7 より豊富な勞働用具を以て生産されるから、享樂財 F_{10} も E_7 よりも多量に上るのである。 F_{10} と F_7 と其の何れを取るべきやは F_{10} の利益と享樂財獲得の三期遅れる不利益との比較計量に依て定まる。無論 F_7 と F_{10} の何れを取るべきやも F_{10} は其爲めに五期間に亘つて享樂を延期する丈けの値打ちがあるか否かの判定に由て定まるのである。而して値打ちがあると決して勞働用具の増加の爲めに生産力が割かれる限り、享樂財の生産は其時の生産力が能ふ限りの程度よりも少ない。換言すれば人は將來の利益の爲めに、現在獲得し得る丈けの享樂財を獲得せず居るといふ次第である。

念の爲め再び八九頁の圖を顧みよう。

人間は其勞働を享樂財の生産と勞働用具生産の爲めに分ち投ずる。その各々が更に原料の獲得、半製品生産及び完成品の製造に分ち投せられる(A_1 、 A_2 、 A_3 及び a_1 、 a_2 、 a_3)。年々一定量の r が自然から獲得せられ、次いで其が h となり、更に其次に f となる。然るに r 、 h 、 f の生産は皆な何れも勞働用具を必要とする。其用具は f に依て供給される(P_1 、 P_2 、 P_3)。併し此等の P_1 、 P_2 、 P_3 は f の一部分なることを常とし、残る部分は享樂財の生産に投せらるるし勞働を助ける。それが勞働と同じく R_1 、 H_1 、 F_1 に分ち投せられる(P_1 、 P_2 、 P_3)。斯くして R が H に進み、 H が F に進んで終に欲望充足の用に供せられて經濟生活の域外に脱出する。

今同一規模の生産が反覆される處、即ち所謂靜止状態に於ては、河川の海に朝する如く、年々(又は毎經濟期)同一量の享樂財即ち F が人間の手に流入し、同じく同一量の H が F に、同一量の R が H に進む。此の不斷の流れを同一の水準に維持する爲めには、年々同一量の勞働と同一量の勞働用具とが自然と原料と半製品とに加へられなければならない。勞働の方は體力を破壊して其補充に達なき程の過激のものでなければ、年々同じ勞働を反覆するといふことは難事でない。たゞ勞働用具の方は遅かれ早かれ使用の爲めに消耗する。消耗したものは補充しなければならぬ。補充は勞働用具生産部門の完

成品(f)を以てされる。即ち f は年々消耗する $P_1 P_2 P_3$ を R, H, F に向つて供給しなければならぬ。併し毎期同一量の r を生産する爲めには、年々一定量の労働と労働用具とを r, h, f の獲得に投じなければならぬ。併し労働用具は年々消耗する。その消耗する丈けのものは年々の産額たる f の中から補充されなければならぬ。若し補充されないと f の産額は漸次に減少して結局享樂財生産部門の消耗用具を補充することが出来なくなる。補充することが出来なくなれば、 R, H 従つて F は漸次減少しなければならぬのである。即ち所謂静止状態とは年々享樂財と労働用具との兩生産部門に於て消耗せらるゝ労働用具が、丁度年々に完成する労働用具に依て補はれる状態である。

然るに斯く静止状態を維持するといふことが、既に或「待忍」を必要とする。何故といふに、静止状態を維持するには労働用具の生産額を一定水準に維持しなければならぬ。それをするには享樂財の生産に充當すればなし得るものを差し控へて労働用具の生産に充てなければならぬからである。即ち静止状態といふものは、享樂財の生産を現在の生産力が許す限度の手前に止めて置くことによつて維持される。若し一時的でよければ、享樂財の生産額はもつと増すことが出来るのである。それは労働用具の生産に投入せらるゝ労働か、労働用具か或は其の兩方を享樂財生産の方へ移せば好い。即ち $a_1 a_2 a_3$

を $A_1 A_2 A_3$ へ $P_1 P_2 P_3$ を $P_1 P_2 P_3$ の方へ移せば、其丈け R, H, F を増すことが出来るのである。併し斯くして増した F の生産額は之を久しく維持することが出来ない。何となれば r, h, f の生産に投入されてゐた労働又は労働用具が引上げられるから、 f の一定量を維持することが出来ず、それが出来なければ、 $P_1 P_2 P_3$ を維持することが出来ず、又やがて R, H, F の生産を維持することも出来なくなるからである。これは近き將來の利益の爲めに遠き將來の其を犠牲にする所以である。併し斯く遠き將來を犠牲にするといふことが必しも常に不賢明の處置であるとは言はれない。戦時又其他の危急の機會に於て、一切の生産力を擧げて當面目前の必要に應ずることの屢々已むを得ぬ場合があることは前にも述べた通りである。

反對に發展の状態、即ち同一規模の生産が反覆されるのでなくて、生産が益々擴大する規模に於て行はれて行く場合には、毎期に於ける労働用具の生産額が其期に於ける一切労働用具の消耗額を超過し、従つて享樂財、労働用具生産部門の何れか一方、又は双方に於ける使用労働用具は増加する。假りに静止の状態から發展の状態へ移るものとして其の手續きは何うであるか。それは享樂財生産部門の労働を割いて労働用具部門へ移すか、或は享樂財部門に於ける消耗用具の補充を削つて、之を労働用具

部門に充當するか、或は其双方を並びに行ふかに依て行はれるのである。その何れの方法に出ても労働總量(人口)が一定せる限りR、H、Fの生産額は差當り減少して、其代りr、h、fの順序で其生産額が増加する。fが増加すれば、それはそのf及び他方のFを生産する爲めに消耗された丈けのものを補充して剩る。剩つたものを全部R、H、Fの方へ差し向ければ其生産額を増加するし、更に累ねてr、h、fの生産に投入すれば更に又fの生産額を増加する。前の方法に出れば労働用具は其以上増加しないからFの生産も或點迄進んで其處で停止して再び靜止状態が来る。後の方法を取れば、労働用具の増加が労働用具の増加を齎し来るから、無際限の發展が起る。茲でも享樂財の生産に充當すれば爲し得るものを差し控へて労働用具の生産に充てるのである。(其際に労働の割當で、即ちAとaとの割合は同一の儘で止まることもあるし、更に一層Aを割いてaに加へること、或は反對にaを割いてAに加へることもある。Aを割いてaに加へる場合には其丈け上記の傾向を増勢し、反對にaを割いてAに加へる場合には其丈け之を減殺するのである。)更に兩者の中道として其一部分をr、h、fの生産に投じ、一部分をR、H、Fの生産に投ずるといふ場合もあらう。此場合には享樂財の生産が増加しつつ旁ら益々労働用具の生産が高められる。

何れにしても發展の状態に於ては労働用具即ちfの生産額が毎に前期に比べて増大しなければならぬ。増加した丈けの労働用具が全部労働用具の生産其者に充用されると、享樂財の供給即ち人間の欲望満足の状態は少しも改善されないが、併し労働用具の無際限なる増加といふ形で發展が續けられる。但し此發展は理論上可能ではあるが、労働用具の生産が欲望充足の迂廻方法として採用されるものとするれば不合理である。故に合理的な發展状態といふのは労働用具の増加に依て更に労働用具其者の生産も増加し、旁ら享樂財の生産も増加を續けるといふ状態だといつて好からう。此状態の下では或期のR、H、F、r、h、fの何れもが前期よりも増大する。然るに生産物の完成には時を要し、労働用具の原料たるrが増加して次いでh、更に次いでfが完成し、而して其のfの助を籍りて享樂財の原料たるR、次いでH、更に次いでFが完成する次第であるから、fはrの、Rはfの、FはRの何れも足跡を追ふことになるので、發展状態の或一時期を切り取つて見ると常にrは其時期のhよりも、hはfよりも、比較的多量に生産せられ、又fは一方では其時期に於けるR、H、F他方ではr、h、fの生産現状を維持する必要程度以上に生産せられつゝあるといふ次第である。

これは既に前段の説明で分つてゐることであるが、經濟生活の局部々々の過程でなく其全體を概観

することは經濟理論推究の發端として極めて肝要の事に屬するから敢て反覆を避けずに細説した。

以上の説明によつて見ると、發展状態と静止状態の經濟とで所得なるもの内容の違ふことが分るであらうと思ふ。所得とは一經濟期内に於て經濟主體が任意に處分して差支なき財の流入を謂ふものである。それを私は持續的生產過程上に於て既存の生産財を補充して猶ほ其以上に生産せられたる純増加分だと謂つた(九五頁)。換言すれば一經濟期内に於ける消費額と期末に於ける一切經濟財の在高から、其期の始點に於ける總在高を控除した差額が其である。然るに静止状態に於ては年々生産せらるゝ享樂財(F)が此所得を形成する。即ち斯る状態の下では此の享樂財が上記の意味の純増加分であつて、これ丈けのものは之を如何様に處分しても既存の財には増減なく、又將來の生産にも影響する所がないのである。然るに發展状態の下に於ては純増加分は常に一經濟期内に生産せられた享樂財のみでは盡きぬ。獨りFのみならずHもRもfもhもrも皆なこれを前期の其に比して増大してゐる。一經濟期に於て一定の生産財を以て出發した經濟主體は次の時期にはより大なる生産財の準備を以て發途する。一經濟期に於て既存の生産財を補充して猶ほ以上に生産されたものは獨り享樂財のみではなくて、新に増加した生産財(新に増加した勞働用具、勞働用具並に享樂財を造るべき原料半

製品)も其一部を構成する。即ち静止經濟では所得はFの形で流入するが、發展經濟に於てはFの外更に $H-H$, $R-R$, $f-f$, $h-h$, $r-r$ (H , R , f , h , r ...を先期に於ける半製品、原料其他の産額を示すものとする)の形でも流入する。これと反對に前述したやうな、勞働用具の消耗補充を怠つて一時的に享樂財の生産高を増加せしめた場合に、其の生産せられた享樂財の全部が所得を形成するのでないことも言ふ迄もない。此場合享樂財の一部は既存の生産財を犠牲にすることに依て獲得される。享樂財流入の正(プラス)に對して生産財減少の負(マイナス)を計算しなければならぬ。一方Fの流入があるに對して他方では $H-H$, $R-R$, $f-f$ etc. の喪失があるのを差引かなければならないのである。

第二篇 交換經濟生活

第一章 交換經濟と統制經濟

前篇に述べたことは苟も經濟生活の營まるゝ所では何處に於ても行はれる。

人間が勞働を投じて以て其欲望を充たすべきものを自然から獲得するといふこと、其獲得をするに
通則として其自身過去の勞働と待忍との所産たる勞働用具の助を籍ること、而して欲望を充たすべき
財は、原料、半製品、完成財の段階を経て最後に享樂に適する状態に達し、而して享樂の用に供せら
るゝと共に經濟生活の域外に脱出すること、これは孤立人の場合にも社會經濟の場合にも、また如何
なる形態の社會經濟の場合にも常に變りなく行はれる所である。然るに孤立人の經濟を假想すること
は理論考究の補助手段としては至當であり、又甚だ有用であるが、併し現實世界には孤立人といふも
のではない、假令あつても一時の變態であるから、吾々が取り扱ふべき人間は必ず社會化する人間、即

ら社會を構成せる人間である。而して社會化せる人間といへば、其處で當然人と人との關係が問題となる。マルクスの言ふ如く人間は其の要する物を得んが爲めに、常に自然に手を加へるのみならず、又人間相互の間に働きかけるのである。

人間が社會を構成するといふことは、少くも經濟上に於ては、人間が欲望充足の爲めに相互倚賴の關係を結ぶことでなくてはならぬ。假令一定の空間に多數の人間が群居しても、其各個人は其欲望充足上に於て全然自己一身の力にのみ頼り、彼れの努力はたゞ彼自身の欲望を充たすことにのみ投せられ、彼れの欲望はたゞ彼自身の努力に依てのみ充足せられ、其或者の有無は毫も他人の欲望充足に影響しないといふ有様であつたならば、是等の多數人はたゞ物理的に併存するといふ丈けに止まつて、其處に一の經濟社會が構成されてゐるとは言へないのである。一の經濟社會がある爲めには之を構成する各人の間に分業協力が行はれ、一人は全員の爲めに勞働し、全員は一人の爲めに勞働するといふ關係が結ばれなくてはならぬ。此關係が結ばれると、一人の有無はよし微少なりとも全員の福祉に影響を與へる。そこで各個人の行爲が社會的の意味を持つことになる。例へば住宅を建築するといふことはロビンソン・クルウソオも之をする。併し分業組織の下で大工が大工の仕事に當るといふ事は他の

の仕事と相俟つて、他の仕事と一定の比例を保つことに依て始めて役立つ。即ち彼れは單に木を切つたり削つたりする外に一の社會的職分を果たすのである。茲に於て經濟組織がある。

分業協力を俟つて一の經濟社會が成立することを強調するものにロオドベルトスがある。曰く、「分業あることに依て個々人の間に一個の共同 (Gemeinschaft) が造られる。此の共同は孤立經濟の一切の概念に更に一の新なる性質を刻印し、此性質の爲めに此等諸概念は個別的生産並に消費經濟の世界並に本質から取り除かれる。此の共同は又以上のものに加ふるに更に孤立經濟には相似物を缺く所の他の諸經濟概念を以てする。最後に此の共同は、其自體を制規する爲めに必然的に更に幾多の新なる經濟行爲を必要とし、此等經濟行爲は上記の新なる諸經濟概念と共に一個の新なる特殊の全體、一の第三の經濟的體系、一の社會經濟に結合する。」「分業の本質はその個人主義に存せずして正に其の共同主義に存する。分業は正に勞働の共同 (Gemeinschaft der Arbeit) と稱せらるべきものである。」「れば此意味に於て分業は、留針の生産が云々せらるゝ意味に於けるよりは更に高き或物であり、此意味に於て分業は、寧ろ個人の集合を社會たらしむる物質的紐帶たること、宛も道德や『法』が倫理的に、言語や『國民意識』が精神的に然るに同じきものである。分業は社會生活其者の根本的諸關係の

るものである。即ち其處では事實上一人が全員の爲めに働き、全員が一人の爲めに働く所の一個の共同の與へらるゝ彼の經濟的根柢關係である。最高共同連帶の此規則が分業の最終原理である」(Das Kapital, S. 55, 56, 57, 58)。

然るに此分業は如何にして定められるか。即ち幾許の人が何れの労働を擔當するかといふことは如何にして定められるか。而して生産せられたるものを以て如何なる人の欲望を如何なる程度に於て満足せしめるか。別言すれば如何なる人の如何なる欲望を満足せしむる爲めに生産を行ふか。これを定める原則が二ある。經濟社會全體を統制する一個の統一的意志をして之を決定せしめるのと、各業務の擔當者をして隨意其の利益とする所のものに従はしめるのとである。如何にして分業が定められるかといふことは畢竟生産せらるべき財の種類品質數量は如何にして決定されるかといふことである。如何なる物を如何なる數量に於て生産すべきかといふことは、即ち何れの財の生産に幾許の労働力を配當すべきやといふことに外ならぬ。前記の圖示せられた財の循環行程を見ると、原料が自然から獲得せられ、原料が加工されて半製品に進み、半製品が更に加工を受けて完成財となる。完成財といふ中にも享樂財と労働用具とがあつて、享樂財は欲望の充足に、労働用具は消耗用具の補充又は擴大に

用ゐられる。斯く原料が半製品に、半製品が完成品に進むといへば、如何にも經濟財が自發的に運動するかのやうに聞こえるかも知れないが、無論さうではなくて、人が之を動かすのである。例へば一年に鐵礦の幾許量が採掘せられ、精鍊せられ、更に加工されて某々の機械となるといひ、棉花幾許量が採取せられ紡績せられて幾許量の綿糸になるといふ。無論鐵が自ら機械となり棉花が自ら綿糸となる譯ではなくて、人間が取捨選擇の結果求めてさうするのである。何故機械を生産するか、又何故それを一定の數量に於てするか。何故綿糸を紡績するか、又何故それを一定の數量に於てするか。此決定が適當に行はなければ、經濟社會は甚しきは死滅し然らざる迄も力の浪費に陥らなければならぬ。例へば全然不要のもののみを生産して、全然必要物を生産せぬといふが如きことがあれば、斯る經濟社會は存續する譯には行かぬ。其れ程甚しからずとも、比較的不要のものを多量に、比較的緊要のものを少量に生産するやうなことがあれば、其社會の力は不合理に用ゐられた譯である。又生産獲得せられたものを以て何れの欲望を充足するか。若しも緊切痛切なる欲望が閑却されて不急不要の欲望充足が先重されるといふことがあれば、これ亦た同じ不合理に陥るものである。誰れがその適當なる決定に當るか。

是を決定する原則が前述の如く二ある。私は其一を共同主義又は統制主義、他を營利主義又は交換主義と稱する。既に卷頭にも述べた通り、各人自ら認めて其利益とする所に従つて特定の財又は勤務を他人に提供し、それに對して得た報償を以て更に自ら所要の物を購ふといふ今日吾々が營みつゝある經濟生活は、云ふ迄もなく營利經濟又は交換經濟である。反之、共同經濟又は統制經濟は、事實としては、自給自足せる昔の大家族又は莊園經濟に之を見る。即ち此場合に於ては經濟組織全體の爲めに其の欲望を充足すべき經濟財を獲得し、又之を其各員に分配することは各人の任意に委せられないで、一個の統一的意志、即ち家長又は領主の意志が之を定める。即ち是等の經濟主體は其家族員又は莊園屬員の欲望と勞働力と既存の勞働用具とを對比考量して、充たさるべき欲望の先後輕重に従つて、其生産力を以て何れの欲望を何れの程度迄満足せしむべきやを決定し、獲得生産せられた經濟財は又一定の規則に従つて之を所屬各員に分つ。遠き將來と近き將來の欲望の何れを何れの程度迄満たすべきかも亦た同様にして決せられる。家長又は領主が遠き慮ある人ならば、所屬員の希望に反しても其の現在の欲望を抑制して將來の計を爲すであらうし、又反對の性質の人物ならば、これと反對の處置に出るであらう。斯の如き場合に於ては人對人の間に結ばれる經濟組織は、また一個の主體の下に立つ一

經濟單位を成すのである。

共產主義者に依て描かれてゐる未來の社會も亦た同じ原則に基づいて、併し乍らたゞ遙に大規模に構成される筈である。即ち其の一切の生産力は其中央機關の統制の下に置かれ、生産物は一定の原則に従つて各員に分配される。マルクスに従へば各人は其能力に應じて勞働し、各人は其の欲望に應じて與へられるといふことである。即ち例へば最も智力を要する仕事には最も智力ある者、最も腕力を要する仕事には最も腕力ある者をして當らしめ、而して生産せられた物を分配するに當つては、各人はその如何なる種類の勞働に服したか、又生産上に幾許の貢獻をなしたかを問ふことなく、其欲望に應じて其の必要とする所のものを取らしめること、例へば食物は先づ最も饑ゑたる者に之を與へ、衣服は最も寒さを感ずる者に與へるやうにするといふ次第である。今日でも吾々の家庭内に於ては略ぼ此原則に従つて分業が行はれてゐる。一家の夫婦子女の間に家事上の仕事の分擔が行はれる場合に、各人に與へる食物や衣服等の量質を其仕事の難易と出來榮とに應じて定めるといふことは先づ行はれない。否、全く勞働に従事しない幼児や老人も其必要物の給與に與かるのみならず、場合に依ては其を最も厚くされてゐる。此の同じ原則をば幾百萬或は幾千萬人の社會に適用し得るや否やは問題であ

るが、併し共產主義者の主張は斯の如きものであつて、究局に於ては經濟社會全體を單一の意志の統制下に立つ一個の經濟單位たらしめんとすることを期して居る。

但し現今勞農聯邦が近き將來に實現せんとして努力してゐるのは斯る完全なる共產主義社會ではなくて、其の遙かに手前に居る、單に私人の營利生産を廢止する、それも重に鑛山、交通、工業並びに生産物配給に於ける私營を廢止するといふ意味での社會主義經濟組織である。即ち此等の生産は原則として國家に依て營まれる、其に必要な生産財も國家の有に屬する。此限りに於て經濟生活全體が一個の統一的意志の指導を受ける。併し此生産に参加する者は自己の才能の適否と共に依て受ける報酬とを比較計量して自ら利益とする職業を選擇し、而して其勞働又は勤務に對して賃銀給料を支拂はれる。然るに此の賃銀又は給料、即ち所得を如何なる用途に支出するかといふことは當人の自由であるから、各人は其所得の許す範圍内に於て自ら好む所の物を購買する。ところが購買せんと欲する物が缺乏すれば、其物の價格は騰貴する。反對に誰れも購買せんとする者がなければ其生産物の價格は下落するか、甚しきに至つては皆無に歸する。さうすると生産は國家に依て營まれるとはいふものゝ、國家も購買者のない品物の生産を繼續する譯には行かぬ。反對に購買者超過の爲めに一物の價格が騰

貴すれば、國家と雖も特別の反對理由がない限り、恐らく其物の生産を擴張せざるを得ないであらう。其物の生産を擴張するには其従事者を募集しなければならぬ。而して募集の必要があつて、而かも應募者が足りなければ、表面の形式は兎に角、事實上に於て賃銀給料を増額するか、或は實質上に於て其に等しい利益を以て之を誘引しなければならぬ。反對に購買者を見出し得ない生産部門に必要以上の勞働者が殺到すれば、賃銀か給料か、或は其他の勞働條件が低下することも避け難い結果であらう。さうすると此場合、國家は一面に於て生産財の所有者であり生産の當局者であるけれども、而かも其時現有の生産力を以て、如何なる財が幾許量だけ生産せられるかは、全組織を構成する各經濟單位の所得と此を以て出来る限り良く其欲望を充たし、他面各人自ら其の利益とする生産部門を選択して此に従業せんとする努力に依て決せられねばならぬ。此努力は諸物の價格を成立せしめると共に、又成立したる價格を指針として其方向を定められる。而して此限りに於て社會主義社會にも不充分ながら營利主義交換主義の行はれる一面がある。但し、價格を指針として生産が行はれるといふけれども、社會主義社會では價格の騰貴したものが必ず生産されるとは限らない。生産擔當者たる國家は其の國家本來の立場から見て、現在購買者の乏しい物の生産を繼續或は擴張することもあらうし、又

購買者の多い品物を生産せずに置くといふこともあらう。又所得の支出は當人の自由に行はれるといふものゝ所得の種類は限られる。今いふ通り生産は國家が其當局者となり生産財は私人のものでなく、國家の有に屬するのであるから、私人が生産企劃の責任を負擔することに對する報酬(企業利潤)又私人が生産當事者に其所有の生産財を提供することに對する報酬(利子、地代)は社會主義社會では見られない譯である。而かも生産の企劃が利得の爲めに行はれ、何が何程生産されるかといふことが、其が差當り先づ其企劃の責任者に利得を與へるか否かに由て決せられるのが交換經濟の最も重大なる特徴を成すのであるから、此點に於て社會主義經濟と營利又は交換經濟との間に根本的差異のあることは勿論である。

然るに今日吾々が營みつゝある交換經濟になると、許多の經濟單位が分業交換の關係に結び付けられ織り合はされて、一個の經濟組織を成すけれども、此の組織其者は一個の單位を成さぬ。即ち組織全體を支配する統一的の意思はないのである。組織を構成する單位は各々自家の利益を追求して活動するが、統一的に組織全體の爲め各員の何の欲望を何の程度まで充足せしむべきかを心配し、決定するものはない。今日の所謂國民經濟は同一の政治領域に住し、且つ通常民族、言語、宗教歴史を同うす

る多數の經濟單位を以て構成せらるゝ一個の交換經濟組織であつて、國家は極めて大きいが、併し此組織の主體ではなくて之を構成する許多の經濟單位の一たることに於ては家族や企業と殊なるものではない。たゞその收支が家族等と比較にならぬ程巨額であるといふ差違がある許りである。而かも各經濟單位は直接自家の欲望を充たすべき物は全く自ら生産しないか、生産しても極く其一小部分に過ぎぬ。それでゐて各人は如何にして其の所要物を獲得することが出来るか。全體を統制する中央意思を缺きながら、各種生産部門への生産力の配當が如何にして過不及なく行はれ、又一物を欲することのより痛切なる者が先づ其を得て、然らざる者を後廻しにするといふことが如何にして行はれるのであるかといふに、それは全く市場價格の機構と各人の利得努力に依て行はれるのである。

各人(各經濟單位)は原則上各人自身の利害に依て動かされる。各人は經濟財を得て之を其欲望満足に充てなければならぬ。併し今も言ふ通り、各人自ら其所要物を生産するとしても分業の行はれる處では其は其の極く小さい一部分を成すに過ぎぬ。其他の物は皆な之を他人に求めなければならぬ。他人に求めるには代償として此方も他人の欲するものを提供しなければならぬ。即ち各人は自家の欲望を充たす爲めには他人を利益しなければならぬ。他人を利益するのは好意ではない。他人

を利することが己れを利する捷徑であるから、即ち己れを利する手段として他人を利するのである。アダム・スミスが人間は交換本能を有すると説くのは誤謬である（國富論第一篇第二章）。併し其事に關聯して彼れが文明社會に於ては各人皆な他人を利益することが即ち却てよく己れの利益を進むる所以なることを説いた一段には頗る適切な叙述がある。左に之を引用しよう。

「人間以外の動物に在りては一度壯年期に達せる以上、殆ど何れも全然獨立にして、其自然的狀態の下に於ては復た他の動物の援助を必要とすることがない。然るに人間に至つては殆ど常に他の同胞の援助を必要とせざるなく、然かも單に他の恩恵に依りてのみ其援助を得んと期待するが如きは全く不可能事に屬する。自己の利益の爲めに他人の自愛心に訴へ、自己が其人より得んことを欲するものを自己に與ふるは即ち其人の利益なる次第を其人に示す時は、單に其人の恩恵に訴ふるよりも遙に其目的を達するに近かるべし。然れば他の人と或る取引を爲さんとする者は、先づ之を爲さんことを其人に申出づるの常であつて、予が欲する其物を予に與へよ、然らば予は貴下の欲する此物を貴下に提供すべしとは、即ち此種申出の通義である。吾人が日常互に必要とする他人の好意斡旋を幾多の他人より享受するは多く斯る方法に據るものであつて、例へば吾人が毎日食事を爲すことを得るは、屠肉者、

醸造者又は麵麩製造者の恩恵に依るにあらず、此等の人士が各自其利益を思ふが爲めに外ならぬ。吾人は此等の人の慈悲心に訴へずして其自愛心に訴へ、吾人自身の必要を告げずして、此等の人の利益を告げ、以て此等の日から其供給を受けるのである。云々」

斯く各人が己れ自身の欲望を充たさんとする念慮が彼等を驅つて他人の所要物の生産に努力せしめる。得んが爲めには先づ與へなければならぬからである。逆説的にいへば、經濟社會を構成する各員は利己主義者たるが故に他人の爲めに、社會の爲めに働くのである。其處で各人に取つて最も重要な問題は、彼れが與へる物に對して幾許の物が代償として得られるかといふことである。此の一物の一定量に對して與へられる他物の一定量が即ち其の相互の代償又は價格であるが、交換が偶然變則的に行はるる場合、例へば經濟單位が其の偶然の餘剰生産物を互に交換し合ふといふ如き場合を別とすれば、歴史的事實としても、又理論的にも交換は常に直接的に行はれないで、一般的に承認せられた交換手段たる貨幣を通じて間接的に行はれるから、物の價格は物で現されないで貨幣額で現される。この貨幣で現されたものを特に貨幣價格と稱することがないでもないが、今日では單に價格といへば直ちに一物と交換せらるる貨幣額と解することが常である迄になつてゐる。

直接物々交換を行ふことの困難は普通貨幣論の始めの章に説かれて居る。而して貨幣は此等の直接交換の困難を除く爲めに發明採用されたものと教へられてゐる。併し貨幣は單に交換を容易ならしむる爲めに發明されたといふ程度のもではない。貨幣による間接交換といふものがなければ分業的生産といふものは全然行はれ得ないと謂つて好からう。例へば茲に紡績業者があつて綿絲を生産するとする。彼れが紡績に依て生活するには、其生産物たる綿絲と交換してその衣食住に必要な諸物を取得しなければならぬ。併し農夫や大工や機械製造者等が綿絲を要せぬことは勿論である。綿絲を要するものは、たゞ其を原料として生産を営む織物業者のみである。然るに織物業者の生産するものは綿布である。さうすると、紡績業者は農夫や大工等に彼等の要せざる綿絲を與へて以て己れの欲する衣食住物を取得するか、或は綿絲と綿布とを交換し、さてその綿布を以て衣食住物を取得するか(綿布ならば農夫大工等にも入用と解せられる)何れかの途に出でなければならぬが、何れにしても此場合間接交換が行はれる。即ち農夫や大工等は其の差當り必要とせぬ綿絲を收受して、さて此の綿絲を以て更に其の必要とするものを購ふか、或は紡績業者がその必要とせぬ綿布を收受してさて其を以て其の必要とする諸物を購ふか、何れにかしななければならぬ。何れにしても直接交換を行ふことは不可能

である (F. Lederer, Grundzüge der ökonomischen Theorie, 1922 S. 45)。是等の點は別の場處で詳しく論すべきであるが、要するに貨幣なくして規則正しい交換は行はれ得ないから、交換經濟は即ち貨幣經濟であり、交換といへば物と貨幣との交換、即ち賣買。一物の價格といへばそれと交換せらるる貨幣額であると解して好い。

そこで何故物に價格があるかといへば、無論其物が欲望に對して不足してゐるからである。若し一物の人間に取つて如何に大切なものでも其存在量が豊富で何人も自由に取つて之を處分し得るやうな場合には之に對して價格を支拂ふ醉興人はない。人が一物の爲めに價格を支拂ふのは、進んで好んでするのではなくて、已むを得ずして支拂ふのである。欲するものを得られぬ不利益と、價格を支拂ふ不利益とを比較して其の比較的小なる害惡を選択するに過ぎないのである。そこで人が一物を欲求することが愈々切實であれば、其に對して支拂ふ價格も愈々多かるべきは勿論である。ところで孤立經濟にあつては、人は己れの欲するものを己れ自ら獲得するのであるから、有用のものを棄て、無用のものを生産し、或は必要の痛切なるものの獲得を後にして然らざるものを先にするといふことは有り得ないし、又獲得せられたるものは、當然先づ最も痛切なる欲望の満足に充當される譯であるが、社

會經濟、即ち分業生産の行はれる處では、一物の生産者とその消費者とは同一人でないことを原則とするから、必要なるものと不用なるものとの差別、又其程度を、生産當事者が直接に感知するといふ途がない。前記の通り、統制經濟では此の先後輕重は經濟主體の判斷に依て統一的に決せられるが、主體を缺く交換經濟では、たゞ市場價格の高下に依て生産と消費の方向と數量とを決するの外はない。即ち必要が痛切であるものの供給量が缺乏すれば其價格は騰貴し、割合に必要なか、或は其供給量の豊富なるもの、價格は下落する。此の價格の騰貴下落が二重の作用をする。一方では價格の騰貴は其物の購買を抑制し、他方では其供給の増加を刺戟するのである（價格の下落は當然其反對の効果を生ずる）。即ち價格が騰貴した場合、元來價格は已むを得ずして支拂はれるものであるから、敢てその騰貴した價格を支拂ふことを辭せぬといふ者は、痛切に其物を欲する人でなければならぬ。其物に對する欲望の比較的薄弱なものは價格騰貴の爲めに其購買を斷念する。反對に一物の價格が下落すれば比較的薄弱なる欲望者も亦た其購買に参加し得るやうになる。斯くして價格の騰落に依て比較的緊切な欲望が先づ満たされ、次いで漸く緊切ならざるものの満足に及ぶといふ結果が保障される。他面に於て一物の價格騰貴は其物の生産を有利ならしめ、延いて其供給量を増加せしめ、これと反對に價格

の下落は同じ理由に由て其物の供給量を縮小せしむるの作用をなす。勿論生産の有利不利は生産物の價格と生産の爲めの犠牲即ち生産費との比較に由て定まることであり、生産費の解剖は又別に詳細の議論を必要とするけれども、兎も角他の事情にして變らぬ限り、生産物の價格騰貴は其生産を有利ならしめ、其下落は之を不利ならしめると謂つて好い。而して各人が其自家の利益を追求して怠らざる限り、必ず有利なるものの生産は増加し、不利なるものの生産は減少する。

斯の如く交換經濟組織の下に於ては、社會の爲めに必要なものの生産せられ、又その生産物の最も之を必要とする者に交附せらるゝことを命ずる統一的意思を缺くに拘らず、市場の價格を指標とする各人の自利追求の努力は期せずして略ぼ是に類する結果を齎す。アダム・スミスが各人の自利追求に依て社會全體の爲めに有利の結果が齎されることを樂觀したのは誰れも承知してゐる通りである。「各個人は、多少を問はずその有する資本の爲めに最も有利の用途を發見すべく絶えず努力しつゝある。彼れが眼中に置く所は彼れ自身の利益であつて社會の其ではない。併し彼れ自身の利益の研究は自然的に、或は寧ろ必然的に彼れを導いて彼の社會に取つて最も有利なる用途を擇ばしめる。」誠ニ各人は公共の利益を助長することを意圖せず、又彼れが何れ丈け其を助長しつゝあるかを知りもしない。

外國産業よりも内國産業を支持することを擇ぶのは、彼れがたゞ己れの安全を意圖するからである。又此の産業をば其所産が最大の價値を有し得るやうに指導するのは、彼れがたゞ己れの利益を意圖するからである。而して此場合に於ても他の幾多の場合に於けると同じく、彼れは目に見えぬ手に導かれて、其意圖の中に存せざりし結果を助長する。又其が彼れの意圖中に存せざりしことは必しも社會に害をなすものではない。彼れ自身の利益を追求することに依て彼れは屢々眞に社會の其を助長せんと意圖する場合よりも一層有効に之を助長するのである（Wealth of Nations, Edited by J. Cannan, vol. I, p. 419, 421）。固より一概に此讚辭に同意する譯には行かないが、各人の營利行動が、何等統制的意思の指導を俟たずに、社會全體の爲めに或程度に於て適宜なる欲望充足を保障しつゝあることは認めなければならぬ。

第二章 需要及び供給

茲に考へなければならぬ問題がある。上述の如き大切な働きをする市場の價格は何うして定まるか。其詳細は別に價格論に譲るとして、兎に角價格は需要と相俟つて定まる。その需要とは如何なるものであるか。

一物に對する需要は無論之に對する欲望から發する。けれども直ちに欲望其者ではない。一物に對する需要とは對價を支拂ふ力、即ち購買力を伴ふ欲望の謂である。反面からいへば、一物に對する需要は即ち對價物の提供を意味する。而して前記の通り對價は貨幣を以て支拂はれるから、需要は反面に於て貨幣の提供である。其故單に一物を欲望するだけでは其欲望が如何に痛切なものであつても未だ以て需要にはならぬ。支拂能力を持つ者の欲望のみが始めて需要として價格に或作用を及ぼすのである。假りに一物の價格が圓なる時、その物を得んが爲めには敢て圓を投することを辭せざる者の欲望のみが顧慮せられ、此欲望のみが價格に影響を及ぼす。或者は特に之を稱して有効需要といふ。

該物を欲望することは痛切であつても x 圓を支拂ふ丈の用意がなければその欲望は毫も價格に影響しない。であるから、需要の強弱は對價物と比較しての相對的強弱である。需要の強弱では欲望の強弱は分らない。強い需要は強い欲望から發してゐるかも知れないが、又對價物即ち貨幣に對する評價の低いことに因るかも知れない。吾々はたと一物に對して提供せらるゝ貨幣額の多少に由て貨幣との比較に於て物に對する欲望の強弱を知り得るに過ぎぬ。而して各人が營利行動をなす場合に於ては、ただ此意味の需要のみが問題となる。單に欲望といふ點からいへば、有名なコヒヌア・ダイヤモンドに對して乞食も欲望を有するであらう。或は痛切なる欲望を抱いてゐるかも知れない。併し此寶石の價格を論ずる場合には、支拂能力を有たぬ乞食の欲望は全く顧みられない。斯る乞食が幾萬人に上らうとも、寶石の價格は毫末の影響をも受けないのである。反之、たと對價物さへ支拂へば、其自身弱い欲望も強い需要として現れ、其自身としては強いが、併し支拂力を伴はぬ欲望よりも先重せらるゝ權利を持つのである。(茲に其自身強い欲望弱い欲望といふことを書いたが、嚴密にいふと異なる人々の欲望を比較する場合に其自身として強い欲望とか弱い欲望とかいふことは言はれない。同じ余の一欲望の強度を他の欲望の其と比較することは出来る。併し或人の欲望の主觀的の強さを他の人の欲望の

其と直接に比較することは出来ぬ。予が讀書に依て受ける快感と他の或人が觀劇に依て受ける快感とその何れが強いかは直接に比較のしやうがない。たと予は或書籍の爲めに已むなくば x 圓を支拂ふことを辭せず、或人はまた觀劇の爲めに同じく x 圓を支拂ふことを辭せぬとすれば、或意味に於て、予と彼れとの夫々の欲望は同じ強さを持つといふことが出来る。併しそれはたと貨幣との比較に於ていふことであつて、貨幣その者の一單位額を何れ程に評價してゐるかは人に由て違ふから、或欲望を満たす爲めにAもBも同じく x 圓の支出を避けぬ故此の二つの欲望が同じ強さを持つとは言はれない譯である。さうすると、上述の如く其自身として強い、若しくは弱い欲望といふことは全然意味をなさない言葉であるかといふに、敢て必しもさうでない。といふのは、人間の欲望の強度には經驗上大凡その順位がある。其順位とても、極く嚴密正確なものではないが、併し通常吾々は饑渴に瀕してゐる時に其を打ち棄て、置いて他の欲望を充たすとか、或は雨露に暴されつゝあるのに先づ裝飾品を求めるとかいふことはしない。吾々は先づ饑渴を満たし、寒暑を防ぎ、雨露を凌ぐの計をなした後初めて娛樂や裝飾を求めるのが普通の順序である。其故嚴密な意味に於てなく、常識的に考へて、例へば饑渴に迫るといふことは裝飾品を求め得られないといふことよりも激しい苦痛を感せしめるものだ

推定することが出来る。其意味に於て、或貧人が一圓を投じて食物を買ふ、一方一富者が同額の一圓を心付けとして給仕に投與するとすれば、同じく金壹圓に依て現されてはゐるが、その壹圓に依て満たされる欲望の強弱は等しくない。同じ壹圓が貧者の爲めには富者に對するよりも遙に強い欲望を満たすといふことは、略ぼ言つて差支ないことであらう。前に其自身弱い欲望が強い需要として現はれる云々と言つたのは此意味である。

そこで前に市場價格と各人自利追求の努力とに依て、何人も統一的指導に當る者がなくても、より切實なる欲望が先づ満たされる機構が備はつてゐるとは言つたが、そのより切實なるといふのは其對價として提供せらるゝ貨幣額に現はれた切實の欲望であつて、今日の經濟社會では如何に切實にして正當なる欲望と雖も購買力を伴はぬ限りは全く顧みられないで終る。例へば一片の牛肉が買はれる場合に就いて見るに、或者は其を一家の食物とする爲めに買ふであらう。或者は其の贅澤なる愛犬の食餌として求めるであらう。併し牛肉を賣る者は其の如何なる用途に充てらるゝかは問はない。之を犬の食物として買ふ者が、より高い價格を支拂へば、彼れは當然の事として飼犬の爲めに人一日の食物を奪ふであらう。既に生産せられたるものゝ獲得のみならず、限りある生産力を如何なる物の生

産に充當するかに就いても亦た同様の事が行はれる。生産當事者はたゞ生産の犠牲に對して價格の高いものを生産する。價格の高いといふことは、當然購買力ある者に欲望されるといふことである。其處で物其者は常識から見ると全く無用なる贅澤品に過ぎずとも、之が爲めに高價を支拂ふ氣紛れの富豪のある限り、それは必需品を犠牲にしても生産されるであらう。即ち交換經濟の下に於て需要のあるものは必しも有益のものではない。有つて益なきのみならず、或は道徳上衛生上却て望ましからぬものと雖も、苟もそれがより大なる購買力を伴つて出現する限り、それが必ず先づ供給されるのである。これが道徳上衛生上望ましからぬことであるのは勿論である。吾々は充分それを認めなければならぬ。併し同時にまた此の價格の機構は、社會の爲めに或程度迄適當なる欲望充足を保障してゐる。與へられたる生産力を、無用の物を避けて必要なるものゝ生産に充當するといふことが或程度迄これに依て保障されてゐる。誰れも中央に居て指揮する者がなくても、衣服許り生産せられて、食物と家屋は全然缺乏するとか、(反對に食物と家屋は有り餘るのに衣服は全く生産されないとか)酒は醸造されるのに酒樽が一つもないとか(反對に酒樽許り有り餘つて其に盛るべき酒はないとか)、洋服はあるのにボタンがないとか(反對にボタン許り有り餘つて洋服はないとか)といふことは此機構に依つて

矯制される。有り餘つたもの、價格は下落し、足りないもの、價格は騰貴することに依つて、或は生産を阻害し、或は之を奨励する。共同經濟に於ける中央機關の統制と比較して何れが優るか、即ち何れが正當、何れが正確、何れが周到、何れが簡便、何れが敏速であるか。これは容易に決し難き重要な問題であるが、兎に角交換經濟組織が上述した丈けの効果を擧げ得ること丈けはこれ亦た充分に認めなければならぬ。吾々は茲に需要又は有効需要なるものに逢着する。これはたゞ交換經濟の下にのみある概念である。曩に經濟生活は欲望充足の爲めに營まれると謂つた。併し交換經濟の下で顧慮されるのは、たゞの欲望ではなくて、需要又は有効需要として現れる欲望のみである。人間が其欲望を充たす爲め之に必要な外物を獲得するといふことは何時の世にも行はれなくてはならぬことである。併し欲望が需要として現はれることに依て始めて充たされるといふことは、特定の社會に於てのみ行はれることである。欲望が絶對的、純經濟的概念なるに對して需要は相對的歴史的概念といふべきである。

上述の如く交換經濟に於ては、各人が以て其欲望を満たすべき經濟財は全部か或は大部分之を他人の提供に仰がなければならぬ。而して他人の提供を仰ぐ場合には各人の欲望の強弱は顧みられない

で、たゞ其の有効需要のみが顧慮される。故に苟も今の世界に於て其欲望を充たさんとするものは其欲望をたゞの欲望に止めずして之を有効需要たらしめなければならぬ。換言すれば、以て其欲望を充たすべき經濟財の價格を支拂ふ丈けの貨幣を持たなければならぬ。即ち經濟的活動は二段として行はれる。先づ貨幣を獲得し、然る後其貨幣を以て自家欲望を充たすべき對象を購買するのである。然るに貨幣と財との交換であるが、貨幣を以て財を購買することは比較的容易く、財を以て貨幣に換へることは比較的困難である。其故は特定財の用途は如何に廣くても限りがある。食物は食用に供せられ、衣服は着用に供せられ、靴は外出用に供せられ、筆は書字用に供せられ、書籍は讀用に供せられる等々々々。換言すれば特定財は偶々特定の欲望を持たぬものには必要がない。商人は更に販賣する爲めに自分自身に取つては必要のないものを購入するけれども、而かも商人も究局に於ては特定の欲望を持つ者を見出して之を賣らねばならぬ。其用途は必しも唯一ではないが、併し必ず狭く限られてゐる。之に反し貨幣の方は其用途が實際上無制限である。貨幣は特殊の場合を除けば、貨幣其者を以て欲望を満たすの用に供せらるゝのでなくて、以て他の物を購買するの用に供せらるゝものである。而して現在の世界に就いて見れば、吾々は貨幣を以て購買し得べきもの、種類の凡てを直ぐに腦裡に

浮べるとは殆ど不可能である。貨幣を以て獲得し得るものは、無論嚴密にいへば限りあるに相違ないが、實際上は無限に近いといつて好い。それ故食物は食物を要する者、衣服は衣服を要する者、書籍や筆紙墨は、各々其を要する者に取つてのみ必要があるのであるが、貨幣は何人に取つても必要がある。食物を要する者も、衣服を要する者も、書籍筆紙墨を要する者も、誰れも皆な貨幣を要する。従つて貨幣は何人に依ても收受されるが、特定財は特定の人のみに依て收受される。従つて貨幣を以て物を買ふは、貨幣を獲得するよりも遙に容易なることを常とする。貨幣一萬圓を贏得するのと、贏ち得たる一萬圓を使ふのと果して何れが容易いかと考へて見れば思半に過ぐるであらう。そこで欲望を充たすといふ上からいへば、先づ貨幣を獲得することも、獲得した貨幣で所望の物を購入することも共に同じく必要の過程であるが、今日前者が遙に重要視せられて、動もすれば經濟行爲即ち貨幣獲得行爲とされるのは異しむに足らぬ。

然らば貨幣は如何にして獲得されるか。其方法には無償的なるものと有償的なるものがある。國家や自治體の租稅收入、慈善團體の寄附收入の如きは無償獲得である。學生が父兄に學資を仰ぐことも亦是に屬するであらう。哀請竊取強奪も亦た其方法であらう。此等の場合には貨幣の獲得は何等の對價物を

提供することなしに行はれる。併し此等無償の獲得は、有償の獲得者があるのを待つて始めて行はれる。國家や自治體が租稅を徵收するといふ。誰れからそれを徵收するか。誰れかそれを納附するものがなくてはならぬ。その納附者は如何にして其貨幣を得て來るのか。納附者自身も亦た無償に之を獲得したのであるか。(それは必しも不可能ではない)。然らばその無償獲得者は更にそれをば誰れから得たか。斯うして追尋して行くと、結局何處かで有償獲得者に逢着しなければならぬ。若しも何處まで行つても無償獲得者許りであるとする、獲得した貨幣が貨幣でなくなるといふ奇妙な結果を見なければならぬ。何となれば凡ての人が無償で貨幣を獲得する(寄附か哀請か竊取か強奪かに依て)といふことは、何人も賣ることなしに買手になるといふことであるから、貨幣と稱するものを獲得してもそれを買ふべきものが存在せぬといふことに歸着する。物が買へない貨幣は貨幣ではない。

有償的に貨幣を獲得するといふのは、申す迄もなく、何か對價物を提供し、其價格として貨幣を取るのである。これが即ち交換經濟下に於ける供給である。物の供給といへば、物の提供又は存在を謂ふのであるが、併しその提供は必ず貨幣獲得の爲めに行はるゝものでなくてはならぬ。従つて需要が單純なる欲望でなくて貨幣の提供を伴ふ欲望たると同様に、これに對する供給は必ずたゞ物を提

供するのではなくて、貨幣取得の手段として物を提供することである。即ち供給は、物の提供たると共に必ず貨幣に對する要求として現れる。

さうすると斯う謂ふことが出来る。今日の經濟組織に於ては貨幣を提供せぬ者の欲望は顧みられないが、その貨幣を獲得するには何物かを代りに提供しなければならぬ。即ち人は供給者たることに依つてのみ、又供給者たる程度に應じてのみ、需要者たることが出来るのである。勿論前記の如く無償的に貨幣を獲得するといふことはなし得られる。併し貨幣の無償的獲得は、従つて無償的獲得による需要は、必ず有償的獲得があることに依つて、又其の限度内に於てのみ行はれる。例へば慈善團體が無償的に取得する寄附金収入に就いていふと、寄附金収入の許す範圍内に於て該團體は物を買ふことが出来る。併し乍ら其の寄附金は誰れから得たかといへば、結局有償的獲得者、即ち何物かの供給者が其の供給した物の價格として收得した金額から割かれたものでなくてはならぬ。従つて慈善團體が購買力を行使するそれだけ寄附者の購買力は削減される譯である。其の場合に於ける需要の總額は、寄附者の供給に依つて制限される。寄附者に依つて供給せられたもの、價格が寄附者自身と慈善團體との需要力の總額を定めるのである。國家や自治體の租稅収入に就いても同様である。國家や自治體はその

租稅收入を以て物を買ふ。併し國家其他が物を買ふだけ納稅者の購買力は削減される。その時の市場に於ける需要の總額は決して納稅者の購買力プラス國家自治體の購買力ではなくて、納稅者の購買力のみによつて其限度を定められる。要するに人は供給者たることに依つてのみ（或は供給者に支給を仰ぐことに依つてのみ）需要者たり得ると同時に、その需要者の購買力限度は供給せられたもの、價格に依つて定められるから、供給は他面に於て需要となり、需要は他面に於て供給を意味する。或は供給（一物の）は供給（他物の）を可能ならしめるといつても好い。

そこで供給であるが、前述の通り、今日の供給なるものは、たゞ物を提供するのではなくて、其に由つて貨幣を獲得せんとしての提供である。然るに物を供給するには先づ之を生産しなければならぬ。生産の定義は前に下した。物に人力を加へて之を欲望充足に適した、若しくはより良く適した状態に移すこと、即ち効用を造り若しくは之を増すことがそれである。然るに交換經濟の下に於ては生産が生産者自身の欲望を充たす爲めに行はれるといふことは其の極く一小部分であつて、通常其の大部分は他人の生産物と交換する爲め、即ち貨幣と交換する爲めに行はれる。従つて生産者に取つては、其生産物が如何に彼自身の欲望を満たすかは問題にならないのであつて、彼はたゞそれと交換して果して

幾許の貨幣額を取得し得べきかのみを顧慮する。果して幾許の貨幣額を取得し得べきやは、供給せらるゝものゝ市場價格に由て定まり、市場價格は需要に由て左右される。故に今日生産の主要なる部分は他人の欲望、而かも購買力を伴ふ欲望を満足せしむる爲めに行はれる。而して單に欲望を満たす爲めではなく、之を市場に賣却する目的を以て生産せらるゝものを稱して商品といひ、商品を生産することを自己の欲望を充足する爲めにする自己生産に對して商品生産、又は營利生産といふ。今日經濟財の大部分はそれが欲望充足の用に充てらるゝに先だつて、一度商品形を取ること常とする。

人間の欲望を充たし得べきもので、而かもその充たさるべき欲望に對して存在量の不足せるものは經濟財である。而して此の經濟財は苟も人間の經濟生活が營まるゝ限り、如何なる社會にもなければならぬものである。然るに其經濟財は、今日の社會では、商品といふ特殊の形態を取つて現れ、斯る特殊の形態に於て生産される。食物が人間の欲望を充たして、而かも通常其存在量の不足せることには變りはない。衣服も家屋も、其他の必需品便宜品、又は贅澤品にあつても同様である。而かもそれは或事情の下には商品となり、他の事情の下には商品とならぬ。物其者の欲望を充たす性質には變りはない。たと其の生産せられた社會的秩序が違ふのである。小麥は今日の交換經濟の下に於ても生産せられて食用に供せられ、共產主義の社會に於ても恐らく同様に生産せられ、又食用に供せらるゝであらう。ロビンソン・クルウソーも魚を捕り、今日の漁業會社のトロオル船も魚を捕る。小麥や魚に變りがないのみならず、これ等のものが人間になくは叶はぬ大切なものであること、其の有無得失に對して吾々が無關心であり得ないことも變りがない。即ち此等のものは常に經濟財である。而かもそれはたと今日の社會でのみ商品であり、又商品として生産される。即ち經濟財なり、生産なりは如何なる社會に於ても、否な社會を形成せぬ孤立人に就いても考へ得べき絶對的、又は純經濟的概念であるが、商品なり商品生産又は營利生産となると特殊の社會事情を前提としなければ考へ得られぬ、歴史的、法制的或は社會的概念である。

今日の社會では如何に生産の主要部分が商品生産として行はれて居るかは、商品生産として行はれぬ生産を屢々生産と認めないことに由ても察せられる。生産を以て効用の創造又は増加と解すれば、今日家庭内に於て主婦や婢僕が營む仕事の多くのものは當然生産に數へられなければならぬ。第一に來るのは食物の料理である。米を買つて來てそれを炊いて飯にするといふことは上記の定義からいへば無論生産でなければならぬ。飯を炊くといふことは白米に勞働を加へて之を一層食用に適した状態

に進めること、即ち効用を増大せしめることである。否な筈に飯を炊くのみではない。之を飯櫃に移して食堂に持ち來ることも、亦た形状や位置の變化による所の効用増加を來たさしむる所以である。否な飯許りではない。食卓に於いてナイフとフォークでビフステイクを切ることも、効用を増進せしめる所以である。而かも主婦なり家婢なりが飯を炊くこと、飯を釜から飯櫃に移すことを誰れも生産とは言はぬ。況や食卓に於て牛肉を切ることをや。吾々は之を生産と言はずして消費過程の一部分と考へてゐる。又吾々は鍋や釜やナイフやフォークや其他を家具とか食器とかいふけれども殆ど之を生産用具とはいはぬ。併し、若しも生産をば單に効用の創造又は増加と解するならば、これと石炭を採掘したり、鐵を精鍊したり、絲を紡いだり織つたり、生産物を運送したりすること、變りはない筈である。變ることは、これ等の事が今日は通常營利生産として行はれ、生産物は商品として市場に賣却せらるゝに反し、家庭内に於ける勞働の結果は一度も商品の形態を取ることなしに欲望充足に充てられることである。これは全く同じ行爲を營利の爲め、即ち貨幣獲得の爲めに行ふ場合と、自分の欲望を満たす爲めに行ふ場合とを比較して見ると分かる。吾々が新着の洋書を読むのに *mount* ならば紙切りで切つてそれを読む。併し誰れも此行爲を生産とはいはぬ。それは讀書といふ欲望充足行爲の一部分

を成すものと解してゐる。併し *cut* のものは、製本工場の職工がそれを截る。これは誰れも生産行程の一部分たることを異しまない。而かも紙を截るといふ行爲其者には變りがないのである。さうすると違ひは何處にあるか。職工に依て截斷せられた書籍は商品として市場に出る。或は職工は金の爲めにそれを截る。吾々が紙を截るのはたゞ欲望充足に便ならしめんが爲めにする。違ひはたゞ貨幣の獲得を目的として行はれるか否かといふ一點に繋るのである。炊事、料理、或は裁縫に就いても同様であつて、主婦が家庭でパンを焼くのは通常生産に數へられないが、パン屋がパンを焼くことは誰れも生産とするに慥しまない。家庭でする裁縫を生産とすることは躊躇するかも知れないが、裁縫業が生産業であることは何人も異存がないのである。斯く營利的生産でないものが抑も生産とは認められない程に、今日では生産が營利の爲めに行はれることが正常の事となつてゐるのである。

以上享樂財の生産を念頭に置いて述べたが、享樂財を造るべき生産財の生産も亦た同様である。今日生産は原則として營利の爲めの生産として、商品生産として行はれる。此事は生産財の生産に就いても變りがない。生産財の生産も亦た商品生産として行はれる。享樂財の生産と同様、生産財の生産にも自己生産と商品生産の別がある。ロビンソン・クルウソは無論一切の必要物をば、その享樂財たる

と生産財たるを問はず、悉く自分一人で生産した。例へば自分の食ふ食物を自分で生産したのみならず、其食物を生産すべき農具其他をも自分で生産したのである。然るに生産財の自己生産といふことは交換經濟の下に於ても行はれないのではない。例へば漁夫が自ら網を造り、或は獵師が自ら弓矢を造ればそれは即ちこれに該當するが、併し發達した交換經濟の下では、享樂財と同じく、生産財も之を自ら使用する爲めなく、他人に賣却して以て貨幣を獲得せんが爲め的手段として生産される。即ち羊毛生産者は羊毛紡績業者に賣る目的を以て羊を飼ひ、紡績業者は毛織物業者に賣る目的を以て毛絲を紡ぎ、毛織物業者は裁縫師に賣る目的を以て羅紗を織る。これは流動生産財に就いて言つたのであるが、固定生産財、即ち勞働用具に就いても同様で、例へば機械製造業者は大部分自ら使用する爲めに機械を製造するのではなくて、鑛山業者とか紡績業者とか造船業者とかいふ機械の使用者に賣つて利益を營む爲め之を製造するのである。さうすると是等の生産財の生産者に取つては、其の各々の生産物は何れも自分で使用するものではないから、生産上に何れ丈けの役に立つかといふことは問題でない。たゞいくらに賣れるかといふ其價格丈けが問題となる。然るに價格となれば、それは享樂財の場合と同じく生産財に於ても是に對する有効需要に依て左右される。其需要は何うして定まるか。生産財と

いふものは直接に吾々の欲望を充たすことはしない。たゞ吾々の欲望を充たすべきものの生産に役立つことに依て間接に欲望を充足するものである。然るに交換經濟の下では享樂財の生産者に取つては、何人かの欲望を充たすか否かといふことが大切ではなくて、たゞ生産物に對して有効需要があるか否かといふことのみが問題である。而して一物に對する有効需要の有無が之に對する欲望に關係あることは勿論であるが、たゞ獨り欲望のみでは左右せられず、その欲望が購買力を伴はなければならぬことは既述の通りである。そこで生産財に對する需要は生産物に對する(たゞの欲望でなくて)有効需要から發すると謂はなければならぬ。併し生産物に對して有効需要があるといふことは、其生産財に對する需要の發源とはなるが、直ちに需要其者を決定しない。需要ある生産物を造り得るといふことは其生産財に對する欲望を喚起する。併し此の單なる欲望が需要となるには更にそれに購買力が伴はなければならぬ。それは享樂財に就いて謂つたことと同様である。寶石は貧乏人でも欲しいかも知れぬ。併したゞ欲しいといふ丈け、即ち欲望を抱くといふ丈けでは彼れはまだ其需要者にはならぬ。それと同じ様に或生産物が市場で高く賣れるといふ事實は、吾々に此生産物を造るべき生産財に對する欲望を起こさしめる。併し其はたゞ欲望たるに止まる。吾々が其に對する需要者となるには、たゞ此欲望を抱

くのみならず、此欲望を實行すべき購買力を持たなければならぬ。此の購買力を伴ふ欲望があつて初めて生産財は價格を持ち、價格があつて始めて生産財の生産は促される。生産財の生産者に取つて、生産財の生産はたゞ營利の方法たるに過ぎぬ。其生産物が如何に役立ち、如何に社會生存の爲めに必要のものであるかといふことは、直接には問題を決定せぬ。勿論大體に於て必要でないものは人が買はないから、其點に於て生産に役立つといふことは肝要の條件であるが、併し如何に必要であつても、其必要を認めるものが購買力を持たなければ、其生産は引合はぬ。引合はなければ今の社會では生産されない。それは宛も享樂財の場合に衛生上道德上如何に望ましからぬ品物でも購買者があれば生産される反對に、如何に必要な望ましいものでも之を欲望するものに資力がなければ其生産が後廻しにされるのと同様である。

實例に就いていふと、吾々が綿服を必要とする。併したゞ必要とする丈けでは供給されない。吾々は相當の購買力を持たなければならぬ。相當の購買力があれば綿織物業者は綿布を生産する。綿布を生産するには綿絲が入用である。併したゞ綿絲が入用であるといふ丈けでは綿絲に對する需要にはならぬ。織物業者は綿絲を買ふ丈けの購買力を持たなければならぬ。綿絲に對する需要があれば紡績業

者は原綿を必要とする。これもたゞ必要とする丈けでなくて、購買力を以て必要を満たさなければならぬ。これに對して綿花が生産されるといふ次第である、さうすると綿花が生産されるのも、綿絲が紡績されるのも、綿布が織られるのも、結局綿服に對する需要を満たさんが爲めではあるが、併し直接に其生産物を消費者に供給するのはたゞ綿織物業者丈けであつて（實際には商人が其間に介在するが、話を簡單にする爲め省略する）其他のものは皆な一段次の生産者の需要に對して生産を營む。即ち綿花採培者は紡績業者の爲め、紡績業者は織物業者の爲めである。而して此等の生産物は究局的には消費者から需要されるにもせよ、直接には次段の生産者に依て需要される。消費者は綿布に對する欲望を抱き、又充分の購買力を有するとしても、消費者自身は直接に綿絲や棉花を買ふのではない。綿布に對する消費者の需要がなければ無論始めから問題にはならないが、併し此需要があつたとしても、彼れが求めるのは綿布であつて、綿絲でもなければ、原綿でもないから、織物業者なり紡績業者なりが夫々必要の購買力を持たなければ此等のものは需要せられず、又需要されなければ之を商品として生産する譯には行かない。

これは原綿、綿絲といふ流動生産財に就いて言つた事であるが、農業用具、紡績機械、織物機械

の如き勞働用具に就いていへば事態は一層顯著である。是等の機械や道具は、何れも夫々の製造業者に依て製造される。何の爲めに製造するかといへば、無論商品として賣却せんが爲めである。之を買ふ紡績業者織物業者は無論最終の生産物たる織物に對しての消費者の需要を豫想して機械や道具を購入するのであるが、併し消費者が求めるのは綿布であつて、紡績又は織物機械ではない。直接に機械道具の購入を可能ならしめるものは紡績業者等の購買力であつて、綿服着用者の需要ではない。假令織物に對して如何に多くの需要があり、又紡績業者織物業者が如何に生産擴張の必要を認めても、彼等が必要なる購買力を有たぬ以上は、機械を購入して設備するといふ譯には行かないのである。故に吾々はミルが勞働に就いて言つた言葉を學んで、生産物に對する需要は直ちに生産財に對する需要でないと言つて好い。機械や道具を購入して備付けるものは、無論その機械道具を使用して造り出した生産物の價格が究局に於て其購入費を償つて猶ほ餘りあることを豫想してするのであるが、假令此豫想に間違ないとしても、機械を購入する其時に於ては、無論未だ生産物は出來てゐない。況や其の賣却代金の受取りをや。よし又代金が受取れたとしても勞働用具は其消耗に年月を要するから、生産物の代金として受取るものは當然勞働用具の價格の一部分に過ぎぬ。従つてどうしても生産物に對する

需要が直ちに生産財に對する需要とはならぬ。生産財に對する需要が起る爲めには必ず生産者が購買力を持つてゐなければならぬ。但し購買力を持つといふことは今日では貨幣を持つといふことであるが、生産者が如何にして此購買力を調達するかは今差し當り問題ではない。生産者の行使する購買力は必しも嚴格な意味で其所有に屬するものでなくても好い。換言すれば借用したものでも好い。例へば原料生産者が其生産物を半製造業者に賣却し、後者は其生産物を製造業者に賣却するとする。原料生産者は半製造者の需要に對して生産を營み、後者は更に製造業者の需要に對して生産を營む譯であるが、其場合に半製造者又は製造業者が必しも現實に自ら貨幣を所有してゐなければならぬと謂ふのではない。銀行其他の機關を通じて之を調達しても好いし、又假りに是等生産財の賣手又は生産物の買手が或は代金の受取りを待ち、或は代金を先拂ひするといふことであつても好い。何れにしても當事者は信用に依て購買力を取得したのである。勞働用具購入の場合も道理に變りはない。たと勞働用具は加工材料に比べて遙に耐久であるから、勞働用具を使用して造つた生産物の購入者が勞働用具の使用者に代つて其價格全部を先拂ひするといふことは殆ど不可能である。又勞働用具の生産者が其代金の受取りを待つといふことも困難である。此場合には別に長期に亙る資金調達の方法を講じなく

てはならぬ。

これで簡單ながら交換經濟組織の下に於て其時の生産力が如何なる欲望の満足に充てらるゝかを説明した。繰り返していふが、今日の社會に於ては生産は原則として營利の爲めに行はれる。原則として如何なるものも儲からなければ生産されない。其代り儲ければ如何なるものでも生産される。さてその儲かる儲からぬは生産費と比較しての價格の高下に由て定まる。價格が高ければ儲かる。廉ければ其反對である。その價格の高下はたゞの欲望でなくて、有効需要に由て定まる。有効需要とは度々いふ通り購買力を伴ふ欲望である。如何に痛切緊急なる欲望と雖も、苟も購買力を伴はぬものは今の社會では顧みられない。これは獨り享樂財のみならず生産財に就いてもいへることである。生産財も同じく營利の爲めに、商品として生産される。たゞ生産財の場合には其需要者は其を以て自家の欲望を充たさうとする消費者でなくて、更に其生産物を賣却して利得を收めようとする營利的生産者である。此生産者は特定の生産財が其營利の爲めに幾許の貢献をなすであらうかと考量して生産財を購入する。併し乍ら、特定生産財が如何に營利に貢献する所多大であることが明であつても、充分なる購買力を持たぬ生産者は必要なる生産財を取得することが出来ぬ。それは恰も痛切なる欲望を抱きながら、たゞ購買力を持たぬ爲めに之を充たし得ぬ消費者と變ることがない。(高價なる新式機械の備付けが多大の収益を齎すことを承知しながら、たゞ其力を缺く爲めに之を果たし得ずに居る生産者が如何に多數に上るかを一考せよ)。限りある生産力は比較的不利なる商品の生産を避けて有利なる商品の生産に向けられる。有利不利といふのは斷る迄もなく需要のあるなしといふ事に歸する。結局享樂財の生産も生産財の生産も購買力の何れに向ふかによつて其方向數量を定められる。それが多く享樂財に向へば先づ享樂財の價格は比較的騰貴し、延いて享樂財の生産は増加し、生産財に向へば生産財の價格は先づ騰貴し、延いて其生産が増加する。此事は資本の機能を理解し、又國民經濟の發展と靜止と衰頹とを論ずる上に極めて重要な關係を持つのである。

そこで次に交換經濟組織の下で如何にして生産が行はれるかを見なければならぬ。

第三章 交換經濟的生產

生産とは人工に依て自然の物質と力とを人間欲望の充足により、良く適した状態に置き改めることである。と前に言つた。當然生産には積極的に働きかける人間と働きを受ける自然とがなくてはならぬ。即ち能動的要素としての労働、受動的要素としての自然、此の二つは如何なる生産にも缺くべからざる本源的要素である。

自然は様々の方法態様に於て生産に利用される。併し自然の物質や力で我々の必要に對して其存在量の有り餘るもの、即ち缺乏して居らぬものは、吾々の經濟的考慮の對象にはならぬ。例へば空氣其者や其壓力や風力や又は太陽熱の如きは、生産上極めて重要な働きをすることが明であるが、併し此等の物質や力は、何人も之を利用するに困しませんが、之を利用する爲めに排他的に占有するの必要がないから、何人も其の一定量の有無得喪を顧慮しない。さうすると生産要素たる自然にして實際上「缺乏」せるものとして經濟的考慮の對象となるものは主として土地である。土地の生産に役立つ態様は様々

であるが、大別して凡そ三とすることが出来る。生産の場所としての土地、有限なる有用物の保藏者としての土地、無限なる有用物泉源としての土地がそれである。第一は言ふ迄もなく殆ど凡ての生産に缺くべからざるものである。生産を行ふには殆ど如何なる場合にも場處を要する。而して生産の種類に由て其場處に適否の差があることは耕作地に肥瘠の差があるに等しい。第二の有限なる有用物保藏者としての土地とは重に鑛山や石坑として利用せらるゝ土地と解して好い。土地に人力を加へて有用物を獲得するといふ點からいへば鑛業も農業も一見變りがないやうに見える。併し鑛山や石坑の場合には生産に依て何物も湧き出では來ない。人間はたゞ地中に包藏されてゐるものを取り出すだけである。取り出された丈け包藏量は減少する。斯くして或程度に至れば、包藏は全く無くなるか、或は採掘が引合はぬ位困難となる。此點に於て農業用地は趣を殊にする。耕地は無限なる有用物泉源である。固より目前の收穫のみを急いで所謂掠奪耕作を行へば地力は涸れて仕舞ふが、適當の施肥や土地改良を怠りさへしなければ、人は幾度も同じ土地を耕し、繰り返して收穫を收めることが出来る。リカードの言葉を假れば、土地は本源的且つ不可滅なる力を保有するのである。

然し人間が何等の補助具なしに労働を直接土地に加へるといふことは絶無ではないが、殆ど稀であ

る。大概の場合には既に労働の所産たるものを用ひて生産を行ふ。これが生産財である。生産財を分つて能動的所動的の二とすることが出来る。前者は労働を助ける用具である。後者は労働のそれに加へらるゝ對象である。紡績機械も原綿も等しくこれ綿糸を生産せんが爲めの生産財である。たゞ原綿は加工を受けて綿糸となり、紡績機械の方は加工を助けて原綿を綿糸にする一方機械は機械の儘に留まる。此の能動的なるを労働用具、所動的なるを生産材料、又は原料といふ。生産財は又屢々資本と稱せられた。人間に依て生産されたのではない土地と區別する爲め、屢々資本とは生産せられたる生産手段であるとも説かれた。さうして労働土地資本を生産の三要素とすることが久しい間の慣行であつた。併し此意味の資本は労働及び土地の本源的なるに比して第二次的なる位置に立つ。第二次的といふのは重要な程度が劣るといふ意味ではない。資本其自身が既に自然に加へられた労働の所産たる點に於て、労働や自然の如く既に始めに與へられたものではないと謂ふのである。生産財を直ちに資本と呼ぶことが適當であるか否か。予は姑らく其を避けて單に生産財と書いたのは、經濟學教科書以外の日常用語で資本といふ時には、常に商賣の元手、即ち營利の手段たる財産の意味に解せられてゐるからである。所謂生産せられたる生産手段はそれが營利生産に用ひられたる場合には當然營利の手段と

なり、當然日常用語でいふ資本となる。併し乍ら、生産財が營利手段となることは特定の社會に限られたことであり、其の特定の社會に於ても凡ての生産手段が資本と認められてゐる譯ではない。生産財は苟も人間が經濟生活を營むところでは、それが文字通り手から口への生活にあらざる限り、何れの社會に於ても必ずなくてはならぬものである。否な、何れの社會といふ迄もない。全く社會を形成せぬロビンソン・クルウソオでも生産財を生産し且つ使用する。然し乍らクルウソオに取つては生産財は無論貨幣獲得の手段ではない。自給自足を營む大家族や莊園に於ても同様である。共產主義社會を想像すれば、其處でも亦た生産財が營利の手段となるといふことが行はれぬ。生産財が營利手段となることは、たゞ現在の如き生産財の私有の認めらるゝ交換經濟の下にのみ行はれる。而かも交換經濟の下に於ても凡ての生産手段が營利の用に供せられてはゐない。前にも述べた通り、物の効用を造り若しくは増すといふ意味での生産は、吾々の家庭内にも行はれてゐる。即ち此意味での生産に充當せらるゝ庖厨用具や裁縫機械の如きは無論生産財に屬すべきものであるが、而かも此等のものは營利の用には供せられてゐない。然るに同じものが別の狀況の下では營利の手段となる。庖厨用具が旅館、料理店に用ゐらるゝ場合、裁縫機械が裁縫師に依て用ゐらるゝ場合の如きがそれである。而して

家庭内に使用せらるゝ鍋釜やミシンは誰れも之を資本とは言はないが、旅館や料理店營業者や裁縫師に取つて同じものが資本となることは何人も之を疑はない。たゞ交換經濟が發達するに従つて原則として主要なる生産は皆な營利生産として行はれるやうになつたから、たゞ生産とだけ言へば營利生産の意味に解し、營利の爲めに行はれぬ生産を生産視せぬ迄に至らんとすることは前段に叙べた通りである。従つて學者がたゞ生産手段が即ち資本であると説く場合には恐らく營利生産の手段を念頭に置いたのであらう。

茲でも亦た吾々は經濟學が取扱ふ絶對的純經濟的概念と歴史的法制的又は社會的概念とを明に區別しなければならぬ。生産財は經濟財一般や生産や労働と同じく純經濟的範疇に屬し、營利財産の意味に解せられた、日常用語にいふ資本は、商品や商品生産や賃銀等と同じく、歴史的又は社會的範疇に屬する。生産財を資本と稱すること其自身には別段左したる不都合はない。たゞ名稱の問題である。併し通常用語に於て資本が營利の手段として解せられてゐるならば、それは如何なる形態の社會にも通用なものでないといふ事だけは明にしなければならぬ。機械や道具や原料は享樂財の生産に役立たせる爲めに生産せられた生産財である。それはクルウソオの生活にもあり得るし、莊園經濟にもあり

得るし、現今の勞農聯邦にも無論あるし、もつと完成した共產社會にもなければならぬし、無論現在の資本主義的と稱せらるゝ交換經濟にもある。併し營利手段の意味に於ける資本があること、生産財が此意味の資本となり得ることは、たゞ生産財の私有を認める現在の社會にのみ之を見る。卷頭にも述べたやうに、予は特定社會秩序を前提として立て得る概念のみが經濟學上の概念だといふ主張は狹隘に過ぎると思ふ。經濟財も、生産も生産財も労働も皆な當然經濟學の取扱ふべき對象であつて、此を經濟學から放逐しなければならぬと主張する者があれば、それは實に不穩當であるのみならず、事實に於て行はれないことを力説しなければならぬと思ふ。併し經濟學の概念に特定の社會秩序を前提として始めて立て得るものと然らざるものがあることは何處までも明にしなければならぬ。生産財と營利手段とは之を説明するに恰好の一例である。(前に純經濟的範疇と歴史的法制的範疇といふ言葉を使つたが、これは姑らくアドルフ・ワグナーの用語を踏襲した迄で「法制的」云々は實は少し窮屈に感ぜられる。私の言はんと欲するのは特定の社會的秩序を前提として始めて成り立つ概念と然らざるものとを明に區別すれば好いので、その特定の秩序は事實上のものであれば好い。それが法律に依て規定されるといふことは必しも必要でない。所謂有産階級と無産階級との對立は法律に依て定められ

たものではない。例へば生産技術が改良されて高價な機械を備付けけるやうになると、其機械を備付けないものは之と競争することが出来なくなつて、賃銀労働者となり、而して此等の労働者は遂に自ら其の高價なる機械を備付ける機會を失ふので、労働者たるものは遂に労働者の境涯を脱却することが出来なくなつたとすれば、茲に所謂労働者と資本家との對立が生ずる譯である。併し此の對立の生ずる以前と以後とに殆ど法制上の差別はない。共に同じく私有財産と自由競争を原則とする社會である。ただその私有財産制度の下に各人の經濟的努力が或る特殊の状態を生み出したといふに過ぎぬ。労働者が獨立の手工業者として労働するか、或は賃銀労働者として労働するかといふことは重要な差異である。併し此差異は法制に依て規定されたのではない。何れの場合にも私有財産制度に變りはない。即ち法制的の外廓は同一であつて、たゞ其外廓を充填する事實上の秩序が違ふといふ丈けに過ぎない。併し吾々に取つては此の事實上の秩序が大切である。例へば労働は何時の世にも行はれるが賃銀労働といふ形でそれが行はれることは、有産者と無産労働者が對立の状態にある處でなくては行はれない。併し此の對立があることは、特殊の法制に依て定められた譯ではない。私が前に特殊の社會秩序を前提として云々と云つたのは此の事實上の社會秩序を指して謂ふものである。それは事實上の秩序

たると共に法律に依て制定せられたものである場合もあらう。又一定の法制の下で特殊の發達に依て實現した事實上の秩序であり、従つて同じ原則の法制の下に違つた事實上の秩序が出現する場合もあらう。

さて茲で純經濟的範疇と歴史的法制的範疇の區別となると、再び生産に就いて其事を言はなければならぬ。効用の創造又は増加の意味に於ける生産が純經濟的範疇に屬し、自己生産、商品生産が歴史的範疇に屬することは既に述べた。ところで生産を行ふには必ず労働、土地、生産財といふ上記の生産要素の結合が行はれなければならぬ。これは如何なる場合に於ても變りがない。自己生産に於ても商品生産に於ても、クルウソウ經濟に於ても、鎖封家族經濟、莊園經濟に於ても、共產經濟に於ても、無論現在の交換經濟に於ても變りがない。たゞ其の結合の方法が同じでないのである。クルウソウ經濟では此の三要素が同一人の支配に屬するから問題はない。労働はクルウソウ自身の労働である。土地は自由に使用し得る無人島の土地である。生産財は彼れ自身が製作したか、或は難破船から引上げた様々の道具である。クルウソオはたゞ彼自身の適當と認める所に従つて其労働と生産財とを使用すれば好いのである。大家族又は莊園經濟の場合も略ぼ同様である。大家族又は莊園經濟といふものはた

だ孤立人がたゞ一人で營む所を多人數で營むに過ぎぬ。單一の意思に支配せらるゝ一家族、又は莊園を孤立人と同様に見れば好いのである。成程家族員間に分業が行はれ、或は肉體的勞働に従事するものと劃策指揮の任に當るものとが擔當を分つといふやうな事もあるだらうが、要するに此場合にも生産の三要素は單一の意志の下に置かれるのであるから、生産要素は同一人ではないが、同一經濟主體に屬すると謂つて好い。主體は家族員の勞働と所有の生産財とを其の適當と認める方向に向つて結合すれば好いのである。共產社會では何うかといふに、さう言ふ社會が果して實現されるか否かは別として、若し一切のものゝ私有が廢せられて各人は其能力に應じて働き各人は其欲望に應じて與へられ、絶えて個人の努力に對する個別的報償といふものが與へられぬことゝなつたならば、其曉には全社會一家の如きものであるから、生産要素結合の原理は矢張り孤立人や家族經濟の場合と同じく單一の意思の支配に屬する。たゞ其の單一意思の統制を受ける人員が夥しい爲めに仕事が複雑になるといふ違ひがあるだけである。

然るに交換經濟社會に於ては、常に生産が他人の欲望（正しくは需要）を満たす爲めに行はれるのみならず、又其の生産を行ふべき三要素が各々別人の所有に屬してゐる。即ち勞働は勞働者、土地は

地主、生産財は資本家の有に屬し、同じ要素を所有するものは勞働者、地主、資本家と夫々の集群又は階級を成してゐる。尤も勞働者自ら生産に必要な生産財を所有し獨立して生産を營むことがない譯ではなく、又以前には工業生産は皆な此の手工業的形態で行はれたのであるが、交換經濟が發達するに連れて、地主と資本家とは兎に角、少くも勞働といふ人的生産要素の所有者は、他の物的要素の所有者と分離して、勞働者は單なる勞働者、地主資本家は單なる所有者として漸く相對立するやうになつた。

序でに何故さうなつたかと言ふに、様々の原因はあるであらうが、勞働用具の發達による生産力の増進は其の重なる一であらう。勞働用具の發達といふことは大體に於て勞働用具の高價となることを意味してゐる。同時に生産力が増進すれば流動生産財、即ち原料の消耗が多くなる。此の兩方から必要な生産財の購入が多數の勞働者に困難又は不可能となつて來る。今日でも勞働者自身が生産財を自ら所有するといふことは全然不可能なのではない。たゞ今日の技術の水準に達した生産財を備付けることが出來ないのである。今日の勞働者の収入でも、舊式の絲車や手織機程度の勞働用具ならば之を購入し、又其に必要な原料を購入するといふことは必しも不可能ではない。併し優秀な新式の機械の

運轉してゐる傍らに斯様な舊式の労働用具を使用して生産を営むことは無意義であり、又不可能である。度々いふ通り、今日の生産は生産者自身の欲望を満たす爲めではなくて市場に賣却する爲めに営まれる。市場では如何なる方法や機械で生産されたものでも同じ品質のものは皆同じ価格で賣買される。さうすると舊式の道具で生産したものは引合はなくなつて市場から退却せざるを得ない。即ち労働者必しも生産財が買へない譯ではないが、今日の技術が必要とする程度の生産財が買へない。其處で労働者はたゞ労働力のみを持つ労働者となる。労働と離れた生産手段は又別人の所有に屬するといふ次第である。兎に角さういふ譯で生産要素が分離して居る。而かも生産を営むには必ず之を糾合しなければならぬ。何うして其をするか。

生産財の所有者を假りに資本家といふ(資本家の何たるかは後で説明する)。工場とか機械道具とか原料とかの所有者たる資本家は是非其他人の有に屬する労働を得なければならぬ。他面たゞ労働のみを有する労働者は、また同様に他人の有に屬する生産財を使用しなければならぬ。併し奴隷制度の撤廢せられて以來他人を強制して労働せしむる譯には行かぬ。労働者が生産財の所有者を強制し得ないことは固より言ふ迄もない。そこで労働と生産財との結合も亦た自由契約に依る賣買の方法で行はれな

ければならぬ。即ち労働者は其労働給付を資本家に賣り、即ち資本家に儲はれ、資本家は之に對する價格として賃銀を支拂ふ。資本家が賃銀を支拂ふのは給付せられた労働に依て生産せられた商品の價格が、支拂はれた賃銀を償ふて餘りあるものと豫想するからである。宛も生産物に對する需要が生産財に對する需要の發源となると同様に生産物に對する需要の豫想がその有する購買力と相俟つて之を生産すべき労働に對する需要を定める。一方に於て労働に對する此需要、他方に於て労働の供給、これが労働給付の價格たる賃銀を定める。(嚴格にいへば、此需要と此供給と而して賃銀率とが相互に定め合ふ)。資本家が労働者を強制して労働せしめ得ないと同様に、又彼れは労働者の賃銀を一方的に命令することは出來ぬし、労働者も亦た無論一方的に一定率の賃銀を強求することは出來ぬ。資本家に取つては賃銀の支拂ひは已むことを得ぬ犠牲であるし、労働者に取つては労働の給付がこれ亦た已むことを得ぬ犠牲である。であるから資本家は一定の労働給付に對して支拂ふ賃銀の能ふ限り少額であることを希ふし、労働者は反對に成るべくその多額ならんことを希ふに過ぎぬ。その願望が何處まで貫徹されるかはたゞ市場の状態が之を定める。労働に比して生産財が缺乏してゐれば賃銀は資本家に有利に定まるし、反對に労働が缺乏すれば労働者の願望が多く通る。固より賃銀決定に於ても一般價格の

決定の場合と同様に、純經濟的考量以外様々の動因が作用することは認めなければならないが、併し之を決定する最も主要の要素は労働の相對的缺乏である。(序で乍らいふと、労働者が資本家に備はれることを上に労働の給付を賣ると書いた。然るに此點に就いてはマルクス以來労働力の賣買といふ言葉が多く用ゐられる。資本家は労働者の労働力を購入し、其の労働力の價值以上の労働をなさしめるといふのが彼れの餘剩價值論の根柢をなすのであるが、私は之を不穩當と認めて故らに労働の給付を賣買すると書いた。労働力なるものが若しマルクスの謂ふ如くエネルギーを出す肉體的精神的の力であるならば労働者は決してそれを手離して他人に賣ることは出来ない筈である。労働力は飽く迄も労働者に屬し其購買者は決して之を我物とする事は出来ない。出来るのはたと已れの爲めに其労働力を行使して労働せしむることのみである。若し奴隸制度が行はれて人の一身が他の商品と同様に賣買されるなら、労働者の労働力を身ぐるみ買取るといふことも出来やう。然し人身賣買の許されぬところでは、資本家はたと労働者をして賃銀に對して其労働力を揮つて労働せしめ得るのみである。労働力は終始労働者のものである。例へば土地の産出力に喩えることが出来る。土地の産出力は土地から引き離すことが出来ない。土地其者を購入する者は土地其者と共に其地力を買取るであらう。併し土地

を賃借するものはたと地力を使用するのみである。彼れが購買するのは地力の「用」のみであつて地力其者ではない。住宅を賃借する場合と購入する場合との比較も亦た同様であらう。家屋を賃借するものは其用を買ひ、之を購買する者は家屋其者を買ふ。労働力の場合も其通りで、資本家は謂はゞ労働力の「用」を買ふのみで労働力其者は終始労働者のものたることを失はない。賃銀は労働力其者の價格ではなくて謂はゞ其使用料である。即ち賃銀は給付せられた労働の價格或は労働力の用に對する價格であつて労働力の價格ではない。此事は個數賃銀の支拂はれる場合を取つて見れば極めて明瞭であらう。例へば電氣工場の職工が電球一個の製造に就いて何錢といふ賃銀を支給せられ、而して一日には何個かを仕上げるものとする。此場合の賃銀は言ふ迄もなく、仕上げた電球數に依て計算せられた丈の労働給付に對して支拂はれたもので、其労働者の労働力に對して支拂はれたのでないことは明白である。此場合に同じ労働力を持つ労働者が何かの事情で他人の半數丈けしか仕事をしなかつたとすれば、彼れは當然半額の賃銀を支拂はれる。此の全額と半額との差違は何から起るかといふに、無論労働力の差違ではなくて労働力を行使する程度、即ち労働給付の程度が違ふところから生ずる。些か岐路に入る嫌があるが此機會に述べて置く。

發達せる交換經濟の下では生産はたゞに交換の爲めに行はれるのみならず、又交換に依て行はれる。即ち分離せる生産要素を交換行程に依て例へば勞働給付を賣り又は買ふといふ行程に依て結び付けなければならぬのである。そこで生産の主宰者は二の價格の間の差額に利益を求めることになる。今姑らく勞働のみに就いて言へば、勞働給付の價格と、其の勞働に依て生産せられた商品の價格との差額である。若し此の兩者の間に開きがなければ、彼れは此生産に依て何等の収益を得ることが出来ない。

以上姑らく、生産財の所有者が勞働給付を買ふやうに述べたが、嚴密にいふと、生産主宰者必しも自ら生産財の所有者ではない。彼れは他人の勞働給付を購入して其生産に充てると同じやうに、他人所有の土地や生産財の「用」を購入して、即ち此等の生産要素を賃借して生産を営むことが出来る。即ち一方に於て勞働者を備ひ、他方に於て他人の土地、建物、機械道具原料等を借り入れて之を生産の爲めに糾合することが出来る。而して其は無論生産物の價格が此等諸要素の借料一切を償ふて餘りあるとの期待の下に行はれるのである。さうすると此の生産主宰者は生産物價格の豫想に基づいて勞働給付を購入すると同様に、また同じ豫想に基づいて物的生産要素を借り入れるのである。但し發達せる

貨幣經濟の下では、生産主宰者が物的生産要素の實物其者を借り入れるといふことは絶無ではないが、(例へば土地家屋の賃借の如く)専ら稀であつて、一切のものが貨幣を以て購入される今日では、多くの場合少し違つた形で行はれる。即ち貨幣の所有者から貨幣を借入れ其貨幣を以て必要なる生産要素を購入し、生産要素の實物に對して賃料を支拂ふ代りに、借入れた貨幣に對して利子を支拂ふといふことが専ら多く行はれる。無論兩方法が混用される場合も多からう。例へば、土地や家屋は賃借するが、機械や道具や原料は借入れた貨幣を以て購入するといふ如き場合である。而して斯く貨幣を以て必要なる生産要素をば土地と生産財とを問はず隨意に購入し得るところでは、生産當事者の目から見ての土地と土地以外の物的生産要素との差別が餘り有意義でなくなる。生産當事者の眼中にはたゞ一定の生産物を如何にして能ふ限り少ない費用で生産すべきかといふことのみがある。其見地から見れば、其貨幣を以て購入するものが機械たると建物たる土地たるとは問ふ所でない。たゞ此等のものは彼の營利の手段として一定の貨幣額と交換せられたるもの、或は一定の貨幣額を具體せるものに過ぎないのである。肝要なることは貨幣を有することである。貨幣さへあれば、必要に應じて機械でも土地でも何でも隨意に取得して生産用に充て得るのである。

(それでは土地と生産財との間に何等の差異がないかといふに決してさうではない。重要な差異がある。それは土地以外の生産財は再生産し得るけれども、土地はそれが出来ないといふことである。そこで土地以外の一般生産財は、其賃料が騰貴すれば其生産が刺戟されて其數量が増し、延いて賃料其者を引下げる作用が起るけれども、純粹の土地其者に於てはそれが行はれない。例へば家屋と土地とを比較して見ると分る。吾々は貨幣を借りて家屋を建築することが出来る。借入金に對しては利子を支拂はなければならぬ。一方家屋に對しては家賃が取れる。そこで若しも建築費に對する家賃の割合が借入金に對する利子の割合よりも高ければ、借入金をして建築する者が増加し、延いて貸家の供給を増して其家賃を引下げ、斯くして家賃と建築費との割合を借入金の利率に近からしめる作用が起るであらう。一方土地の場合では、土地には地價といふものがあるけれども、純粹の土地其者には生産費はないから、土地の賃借料が騰貴したからとて、新に土地を生産するといふ譯には行かぬ。勿論土地賃借料の地價に對する割合が利率よりも高ければ土地を購入せんとする者が増加して地價を騰貴せしめるから、やがて此の二つの比率が一致する傾向が起るであらう。けれども前記の建築の場合と違ふのは、再生産出来ぬ土地の場合には、生産財の供給増加によつて賃料其者が下落するといふ作用が起ら

ず、地價は全然受動的に賃料と利率とに由て定まることである。再生産し得る生産財の場合には、其物の生産費が賃料を左右し、賃料が或程度以上に高ければ之を引下げ、低ければ此を引上げる作用をなすが、土地の場合にはこれがない。これは興味ある問題を含んでゐるがそれを論ずるのは別の處にゆづらなければならぬ。)

斯うして見ると物的生産要素の實物其者、又は以て此等生産要素を購入すべき貨幣を所有するといふことは必しも生産主宰者たるに必要な資格ではない。無論生産主宰者は多くの場合自ら若干の生産要素又はそれを購入すべき貨幣を有するを常とするが、併し生産主宰者として勞働と物的生産要素とを糾合することは、實は他人所有の生産財又は貨幣を以てしても出来ることである。斯く自ら生産財を持たずに生産の主宰者たるものがあれば、同時に他面に於て生産財又は之を購入すべき貨幣を有し乍ら自ら生産主宰の衝に當らないで、たゞ己れの所有物を彼れに貸附けるに止まるものがある譯である。斯く地主の土地又は資本家の生産財又は貨幣を借入れて之と勞働とを糾合する其衝に當る者は、即ち企業家である。企業家は自ら兼ねて資本家たり地主たることもあるが、その純粹の形を想像すれば、企業家は一方に於て地代を拂つて土地を賃借し、賃料又は利子を支拂つて生産財又は貨幣を借り入れ、他

方貸銀を支拂つて労働者を備ひ、是等の貸借料又は利子と貸銀とを生産物の價格から差し引いて剩りがあれば、それを企業利潤として自ら收得する。併し果して剩りがあるか否かは市場に於ける需給の關係に由て定まること何人も保證しない。剩りが多ければ多くの利潤を收める。少ければ僅かの利潤、全く無ければ皆無の利潤を受ける。否な其のみならず、生産物の價格が生産出費を償はなければ、彼れは此損失を負擔しなければならぬ。彼れは此損失の責任を何人にも嫁することが出来ぬ。彼れは何人に向つても利潤を要求する權利はない。即ち企業家は特定の商品を生産する爲めに必要な生産要素を糾合することに就いて、一切の危険に自ら當らなければならぬのである。これは企業家に労働給付を賣却する労働者は勿論、彼れに物的生産要素を提供する地主や資本家にはないことである。労働者は約定した貸銀を企業家から受取る權利がある。地主や資本家は賃料や利子を受取る權利がある。勿論企業が失敗すれば約定した貸銀や賃料利子でも支拂不能に陥るかも知れない。さうなれば彼等も間接には企業成敗の危険に當らなければならぬ譯であるが、併し兎に角彼等は彼等の報償を企業家から約束されてゐる。企業家は之を支拂ふべき義務を免れないのである。反之企業家は一方貸銀利子等の生産出費を支拂ふべき義務を負擔しながら、他方に於てこれから生産せらるべき商品に就いて何

人にも購買の義務を負はしめることが出来ぬ。生産物に對して需要があれば賣れるであらう。需要がなければ顧みられぬであらう。其以上は奈何ともすることが出来ないのである。

そこで企業家に取つての第一の任務は、市場に於ける需要を豫測若しくは觀測して、現存の生産要素を之に應じて結合することである。曩に今日の社會では生産せらるゝものは需要即ち購買力を伴ふ欲望の對象たるものであると謂つた。併しその需要の方向及び程度は誰れが觀測判斷するかといへば、即ち企業家である。勿論企業家は任意放恣に之を決定する譯ではなくて、常に市場の需要に適應せんとして汲々たるものであるが、併し兎に角一國民經濟の生産力を何れの方向に行使するかを定める直接の當事責任者は企業家である。統制經濟に於て中央機關の掌るべきことを、今日の社會では企業家が其衝に當る。その企業家は當然一方に於て賣手たると共に他方必ず買手として市場に現れる。買手としての企業家に依て供給されるものは或は享樂財、或は生産財である。買手としての企業家に依て購買されるものは必ず生産要素である。彼れは労働給付を買ひ、土地（或は土地の用）を買ひ、機械原料其他の生産財（或は生産財の用）を買ふ。即ち企業家の重要な任務は特定の労働又は物的生産要素を購し、斯くして生産の方向と程度を定めることにある。例へば労働の用途は極めて多種多様

である。然るに其の勞働が紡績企業家に買はれることに依て、何れの生産にも充當せられ得るものが他の方向に向はずして綿糸の生産に向ふ。土地は紡績業者に賃借又は購入せらるゝことに依て同じく綿糸の生産に向ふ。特定の生産財に就ても、紡績業者が紡績機械や原綿を購入すれば、それはやがて人をして他の機械の代りに紡績機械を、他の生産物の代りに原綿を生産せしむることになる。即ち買手としての企業家の判断と行動とに依て一國民經濟の生産要素はその特殊の形態を取得するのである。然るに諸生産要素を購入するには、如何にして調達せらるゝにもせよ、兎に角貨幣又は貨幣に依て代表せらるゝ購買力を持たねばならぬ。然るに此購買力は特殊の欲望を充たさんが爲めに供用されるのでなくて、一により多くの貨幣を取得せんが爲めに行使される。それが勞働となり、土地となり、機械となり、原料となるのは、たゞより多くの貨幣を獲得せんが爲めの過程に外ならないのである。而して茲に資本の本質が存する。

前にも述べたが、資本とは何ぞやといふ問に對して、學者は屢々生産せられた生産手段がそれだと答へた。併し實際世界の用語と餘り背馳させぬ爲めには所謂生産手段を營利生産の手段と解さなければならぬ。又學者が念頭に置いたのも恐らく營利生産であつたらうと推定すべき理由がある。生産せ

られたる」と故らに言ふのは天與の土地と區別する爲めである。然るに天與の土地と人工の生産財とは國民經濟全體の生産行程を總括的に考察する場合には區別を要するけれども、營利當事者、即ち企業家の立場から見れば、土地も機械や原料や建物も、共に自由に賣買し得る今日に於ては、之を區別すべき理由が極めて薄弱である。何れも營利の目的を達する爲めに貨幣を以て購入した物的生産要素である。一定額の貨幣を以て幾許の土地と幾許の機械を買ふべきかは、たゞ營利の目的を達する爲めに何れが適宜であるかといふことに依てのみ決せられる。然るに營利生産の手段として購入されるものは物的生産要素のみではない。勞働も亦た同様にして購入される。而して幾許の勞働と幾許の土地と幾許の機械其他を購入すべきやは一に營利の見地からせられ、企業家は其の最も適當と認める結合を發見せんと努める。さうすると營利生産の目的を達する上に最も肝要なるものは、以て任意に此等諸般の生産要素を購ふべき貨幣、又は貨幣で現された購買力を有するといふことである。此の營利の爲め何物にも變形し得る購買力を資本といふ。此貨幣を以てより多くの貨幣を獲得せんが爲めに企業家は或は勞働或は土地或は機械原料其他を購入する。是等の個々の具體的生產要素は普遍的抽象的な購買力が取得する一時的特殊の姿と見ることが出来る。そこで機械や建物等其者を指して資本と

謂はぬことはないが、寧ろ資本が是等のものに投せられてゐる、又は資本が此等に體現せらるゝと見られてゐる。例へば、一製造會社の財産は種々様々のものから成り立つて居り、而してそれは刻々に變り得るが、此企業の資本といふときは、その個々の物を數へずして資本金幾千萬圓といふのである。

然らば此の如き意味の資本は如何にして企業家のものとなるか。言ふ迄もなく企業家自身が之を貯蓄したか、或は他人の貯蓄したものを借入れたか何れかである。而して貯蓄とは現在(又は極めて近い將來)の欲望充足を一時放棄することに外ならぬ。前にも言ふ通り、購買力は對價として何物かを提供することに依て獲得される。或人が一定額の購買力を有することは、(彼自身に依て、若しくは彼に代る何人かに依て)其に相當する丈の對價物の供給せられたことを意味する。今斯くして得たる購買力を直接の欲望満足に行使して仕舞へば、それは無論資本になり得ない。さうすると貯蓄といふことは何物かを供給し乍ら、其對價として得たものを全部欲望満足には充用しないことを意味する。而して此事は社會の生産力がより多く生産財の生産に振り向けられることを意味する。購買力は需要あるもの、提供に依て取得されるとすれば、購買力の一部が享樂財以外のもの、購入に充てられてゐるといふことは、即ち購買力其者の一部が享樂財以外のもの、即ち生産財を對價として得られたことを示すに外ならぬものである。

上述の如く生産を營む爲めに必ず缺くべからざる生産要素の糾合は、今日では企業家に依て交換行程を通じて行はれる。企業家は其の購買した生産要素の所有者に、各々其價格として賃銀、地代、利子を支拂ふ。これが彼等の所得を形成する。而して生産物の價格と此等生産要素の價格との間に差があればそれが企業家の所得たる利潤(若し負數ならば損失)を形成する。而して此等の生産參加者は其所得の許す範圍内に於て其所望の財を購入する。其故に今日の交換經濟に於ては、交換による生産要素の糾合によつて始めて生産が營まれるのであるが、而かも交換による此糾合は當然生産參加者の所得を決定し、所得の決定は國民經濟總生産物の分配を決定する。

第四章 交換經濟的循環(一)

そこで經濟一般を論ずる場合にしたやうに、次に交換經濟の下に於て經濟財の生産と分配とが如何に交換過程を通じて行はれるか、その全體の姿を概観したい。

便宜上所得を以て出發する。交換經濟に於ける所得とは一定期間内に一經濟主體の有に歸する貨幣額にして、既存の財産を減損することなしに任意に處分し得るもの、謂であることは前に述べた。既存の財産を減損することなしに云々といふは、畢竟一時的偶然的でなく持續的正常的に處分し得るものといふことに歸着する。此所得は何處から來たか。又何處へ行くか。

抑も經濟生活は吾々の欲望を満足せしめんが爲めに營まれる。然るに交換經濟に於ては欲望を充たさんとするものは、商品として提供せらるゝ經濟財を購ふべき貨幣を先づ得なければならぬ。貨幣を獲得するには對價として何物かを市場に提供しなければならぬ。提供せらるゝものは何であるか。吾々の欲望は偶然突發的に起るものではなくて、絶えず繰り返して生起する。従つて其充足も反覆的持

續的に行はなくてはならぬ。然るに持續的に貨幣を獲得するには、其反對給付として提供されるものも又一度で後が續かなくなるといふ性質のものでなくて、持續的に提供し得るものでなくてはならぬ。さうすると吾々の所有物又は財産を賣却するといふ方法では行はれないことが明である。例へば所有の土地や家屋や又は什器寶物の如きものを賣却すれば、吾々は確に貨幣を獲得し得るけれども、賣却すれば土地家屋其他は失はれて仕舞ふのであるから、それを幾度も反覆して行ふ譯には行かぬ。反覆的連續的に提供し得るものはたゞ今在るといふ丈けでなくて、謂はゞ新に湧出するものでなくてはならぬ。其は結局三つしかない。労働の給付(或は労働力の用)、所有物の用、及び新に生産せらるゝ經濟財がそれである。

労働の給付は當然反覆して行ふことが出来る、労働は今日労働すればそれで労働力は潤れて明日又は明後日から労働し得ぬといふものではない。反覆出來ぬ場合があるとすれば、其は労働力の保存を不可能ならしめる程の過勞の行はれる場合である。此場合には謂はゞ労働の元本が磨り耗らされるのであるから、畢竟土地や家屋を賣却して生活すると同様の賣り喰ひの状態に陥る譯である。

労働の給付を買ふものは誰であるか。労働給付を以て直ちに己れの享樂に充てんとする消費者と、